㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター研究紀要

紀要愛媛

第　9　号

特集　―愛媛の考古学史と今後の課題―

第１章　旧石器時代 …… 池尻　伸吾　１～７

第２章　縄文時代 …… 兵頭　　勲　７～13

第３章　弥生時代 …… 柴田　昌児　松村さを里　15～26

第４章　古墳時代 …… 山内　英樹　27～36

第５章　古　　代 …… 中野　良一　37～44

第６章　中　　世 …… 中野　良一　柴田　圭子　松村さを里　45～54

第７章　近　　世 …… 土井光一郎　55～61

第８章　近　　代 …… 多田　　仁　藤本　清志　63～72

2010

財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター

刊行にあたって

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターでは、愛媛県内において埋蔵文化財の調査研究及び埋蔵文化財に対する保護思想の普及・啓発を目的に業務を進めております。

当センターの調査成果につきましては、調査報告書にまとめ刊行するほか、発掘調査時においての現地説明会、当センターでの速報展・テーマ展を行うと共に、調査の概要につきましては年報『愛比売（えひめ）』に掲載して配布する等、埋蔵文化財の普及・啓発に努めております。

このたび、当センター職員の埋蔵文化財に関する日頃の研究成果をまとめた『紀要愛媛』第９号を刊行することとなりました。

今号では従来と趣向を変え、当センターで実施した発掘調査を中心に各時代の研究史を振り返り、まとめてみました。

この研究紀要を、皆様方の歴史や考古学の研究の上で、ご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係諸機関並びに関係者の皆様におかれましては今後ともご協力とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年７月

財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
理事長　　藤　岡　　澄

例　　言

1　本書は財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが「特集－愛媛の考古学史と今後の課題－」と題して刊行する研究紀要です。

2　各論では当センターの調査成果を中心として、各時代における研究史を振り返ってみました。

3　本文中の参考文献のうち当センター及び愛媛県教育委員会の刊行物につきましては、巻末の第１～７表「愛媛県関係刊行報告書一覧」を参照して下さい。

凡例　1)「愛媛123」は愛媛県埋蔵文化財調査センター報告書の第123集

凡例　2)「県1966」は1966年に愛媛県教育員会発行したもの

4　今回の紀要執筆者のうち、兵頭勲・山内英樹両氏につきましては当センター在職期間中に執筆したものに加筆修正を行い掲載しました。現在の職は次のとおりです。

兵頭　勲：愛媛県教育委員会文化財保護課主任学芸員

山内英樹：松山市都市整備部道路管理課主事

5　第１～７表「愛媛県関係刊行報告書一覧」は嘱託員 松本美香が作成しました。

6　本書の編集は主任調査員 多田　仁が行いました。

第１章　旧石器時代

池尻伸吾

１　はじめに

愛媛県の旧石器時代研究は、火山灰の堆積環境が劣悪であるといった主に物理的側面での制約から、全国的にみても先進的と呼べるような状況にはなく、西日本旧石器文化の実態理解を阻害するひとつの要因となっている。

ただ、1960年代に鎌木・高橋両氏により瀬戸内の旧石器文化が論じられて以降（鎌木・高橋1965）、県内でも主に在野の研究者を中心とした精力的な踏査・表面採集資料の蓄積が繰り返された結果、県内の旧石器文化の輪郭は徐々に明らかになりつつあるといえる。また、調査例が僅少な県内において、それらの成果は今なお、愛媛県の旧石器文化を語る際の基礎的な資料として重要視される。ここでは、こういった過去に集積された成果と近年実施された発掘調査によってもたらされた成果から、現状における愛媛県での旧石器文化研究の到達点と残された課題を整理し、本県における今後の旧石器文化研究の在り方を展望してみたい。

２　各段階の石器群の様相

はじめに、これまで明らかとなっている石器群の様相について整理する。愛媛県は東西南北に長く、各地域の置かれた石材環境や文化的環境によって石器群の内容には相当程度の偏差が認められるが、現状では地域差を詳述できる段階には至っていないため、成果は時期毎に詳述し、そのなかでこれまでに明らかとなっている地域的偏差を述べる。

本県で旧石器時代の遺跡の発掘調査が本格化するのは1980年以降であり、架橋工事や高速道路の敷設など、大規模工事の件数増加に比例する。それ以前にも、鎌木義昌による旧弓削町鯨・日比におけるナイフ形石器の発見（鎌木1961）や学史的にも著名な金ヶ崎遺跡・津波島遺跡の紹介などにより、旧石器文化の存在は確実視されていたが、発掘調査によって、石器群の内容が明らかにされたのは1980年に発刊された叶浦（B）遺跡の調査報告書が初例である（愛媛3）。その後、1990年代以降実施された四国縦貫・横断自動車道建設関連で調査された妙口遺跡（愛媛46）、宝ヶ口Ⅰ遺跡（愛媛47）、水戸森遺跡（愛媛93）、東峰・高見Ⅰ遺跡（愛媛98）において本県の旧石器文化の内容が明らかにされている。また、これらの発掘調査による資料の蓄積と併行して、十亀幸雄氏による芸予諸島域の旧石器文化の紹介（十亀1988ほか）や重松佳久氏による松山平野の旧石器文化の紹介（重松1992a・b）、木村剛朗氏による西南四国地域の旧石器文化の紹介と編年研究（木村2003）、沖野新一氏による旧双海町周辺における旧石器の発見と紹介（沖野1998）など、貴重な成果が公表され、県内の旧石器文化の骨格が次第に明らかとなってきている。

⑴ナイフ形石器文化期の様相

ナイフ形石器文化期の遺跡はこれまでに数箇所の遺跡で発掘調査が実施され、これに単独出土

の遊離資料や表面採集資料をあわせるとかなりの数の遺跡がこれまでに周知されている。資料的には県内で類例が最も多く、比較的石器群の内容も明確である。

ナイフ形石器文化前半期

姶良Tn火山灰降灰以前の時期であるナイフ形石器文化前半期の遺跡としては、東峰遺跡第４地点出土石器群が唯一の例として挙げられる（愛媛98）。当地点ではテフラ分析によって姶良Tn火山灰の降灰層準が確認されており、前半期の石器群はその下位から出土している。出土した石器は台形様石器や局部磨製石斧をはじめとする計10点のみであるが、火山灰との関連性で年代が特定された例として四国内でも唯一の例である。現段階では他に類例がなく、位置付けも明確ではないが、中国地方の石器群との比較からナイフ形石器文化前半期でも古相に位置付けられる台形様石器を指標とする石器群との関連性が考えられている（愛媛98）。

ナイフ形石器文化後半期

ナイフ形石器文化後半期については、1965年に鎌木・高橋両氏により提示された国府型→宮田山型→井島Ⅰ型という石器群の変遷観を軸に研究が展開してきた経緯をもち（鎌木・高橋1965）、旧弓削町鯨・日比における国府型ナイフ形石器の発見以来、瀬戸内技法が拡散する地域として上記の変遷観に比較可能な資料の探索が主たる課題であった。そして、それらの様相解明に向けた作業は、上述した十亀・重松・木村・沖野氏らの研究によって着実に進められたといえる。これらの研究によって、金ヶ崎遺跡を中心とする芸予諸島には、瀬戸内技法を包摂する鯨遺跡などの遺跡と国府型ナイフ形石器をもちつつも非瀬戸内技法による剥片剥離が認められる金ヶ崎遺跡があり、後者が前者にやや後出するものであること、松山平野では、多彩な剥片剥離技術の存在と多様なナイフ形石器の在り方が抽出され、従来の瀬戸内技法偏重型の石器文化観を修正する必要性が唱えられた。また、四国西南部では、膨大な表面採集資料をもとにナイフ形石器文化後半期を3段階に区分する編年案が提出されている。これらは、個々の表面採集資料や単独の遊離資料から導き出されたものであったが、詳細な分析に基づくこれらの石器文化の変遷観は、類例増加によって追認される内容をもった重要な指摘であったといえる。そして、1986年には『愛媛県史』において、それまでに集積された資料をもとに県内の旧石器時代の概要が纏められた（長井1986）。

こういった成果に肉付けするように1990年代以降、大規模開発の増加とともに旧石器時代の発掘調査が実施されるようになる。この時期は県内における旧石器研究の画期といえるもので、旧小松町妙口遺跡・旧丹原町宝ヶ口Ⅰ遺跡・旧津島町中駄馬遺跡・伊予市新池遺跡・旧内子町水戸森遺跡・旧双海町東峰・高見Ⅰ遺跡などの調査成果が相次いで報告され、石器群の編年・技術論・石材研究が飛躍的に進んだ。

妙口遺跡では二側縁に加工を施した小型ナイフ形石器やスクレイパーが出土している。石材はサヌカイト製で、出土した剥片素材石核には求心状の剥離痕が残る（愛媛46）。妙口遺跡に関しては層位も安定的ではなく、出土点数も少なかったことから、その編年的位置付けや石器群の全貌が明らかにされたとは言い難いが、非瀬戸内技法による単相の石器群の存在を調査資料として提示できたことは重要な意味を持つ。同年に刊行された宝ヶ口Ⅰ遺跡では、430点の石器群が出土

しており、報告書のなかで砂川遺跡の調査以降、遺跡の構造理解の糸口として広く行われていた個体別資料分類による石器群の分析が試みられている。ブロックに近接して確認された礫群分析とともに、県内においてはじめて行われた旧石器時代遺跡の構造把握へ向けた研究として評価できる。また、報文中では、小型角錐状石器を指標とする本石器群の編年的位置について検討しており、詳細な剥片剥離技術の検討から周辺地域との対比を行っている。

さらに、石材についても出土石器群の分析から、サヌカイトを一定量使用しつつも頁岩が卓越する東予地域、サヌカイトと赤色珪質岩を使用する中予地域、赤色珪質岩や在地の頁岩を多用する南予地域といった地域性を指摘している。これらは現在でも、県内の旧石器時代における石材利用の地域的偏差として引用される内容をもっており、石材研究の嚆矢として注目される。

主要地方道宿毛津島線建設工事に際して実施された旧津島町中駄馬遺跡では、ナイフ形石器や削器を含む46点の石器群が確認された。調査では、鬼界アカホヤ火山灰・姶良Tn火山灰の降灰層準が確認されており、石器群はそれらの中間であるⅢ層中から出土している。ナイフ形石器は縦長剥片を素材とする小型の二側縁加工のものや横長剥片を素材とするものがあり、ナイフ形石器文化後半期の新段階の資料と評価されている。本石器群は在地の頁岩を使用したもので、南予地域における石材利用の一端を示すものとして貴重なものである。また、堆積環境の劣悪な本県において、石器群が層位的に検出された意義は大きく、周辺遺跡との層位対比を可能とする数少ない遺跡のひとつである。

新池遺跡では、ナイフ形石器・角錐状石器・削器など、総数56点の石器群が出土している。ナイフ形石器は縦長剥片を素材とする小型の二側縁加工ナイフ形石器や横長剥片素材のナイフ形石器で、これに縦長剥片を素材とする小型の角錐状石器が伴う。時期的には高見Ⅰ遺跡や宝ヶ口Ⅰ遺跡に先行する石器群と考えられている。使用石材では、赤色珪質岩が大部分を占め、チャートや安山岩が補完的に用いられている状況が明らかとなった。

水戸森遺跡ではナイフ形石器を含む300点以上の石器群が確認された。本遺跡で注目されるのは多量の石核と20個体にのぼる接合資料で、具体的資料から剥片剥離技術が帰納できる資料として重要性をもつ。石器群の技術基盤は交互剥離による横長剥片剥離技術であり、これを素材とした一側縁・二側縁加工のナイフ形石器で構成される。また、特筆される事象としては、主要石材として消費された赤色珪質岩と灰色チャートが分布域を異にすることが挙げられる。

東峰遺跡・高見Ⅰ遺跡では、総数150点程の石器が確認されている。石器群にはナイフ形石器・角錐状石器が含まれ、交互剥離による横長剥片剥離技術・「備讃瀬戸型石刃技法」類似の縦長剥片剥離技術を技術基盤とすることが明らかとなった。報文中では、ブロックの設定と個体別資料分類による石器群の構造分析が行われ、さらにナイフ形石器や剥片剥離技術の類型化との比較から、県内の諸遺跡あるいは中部瀬戸内地域との石器文化の異同が論じられている。これらは、既存資料を体系的に関連付ける研究として非常に重要性をもつもので、県内のナイフ形石器文化研究におけるひとつの到達点といえる。

⑵尖頭器文化

尖頭器文化期の遺跡はこれまでのところ確認されていない。

⑶ 細石刃文化

県内において初めて細石刃文化関連の資料が報告されたのは、十亀氏が1978年に発表した祝谷丸山遺跡の資料である（十亀1978）。県内における細石刃文化研究の嚆矢といえるものであるが、この石器群については後年、多田氏により否定的な見解が示されている（多田1992）。この後、1988年には同じく十亀氏により、金ヶ崎遺跡から出土した8点の細石刃文化関連資料が紹介され、船野技法との関連性が示唆された（十亀1988）。芸予諸島域において当該期の資料が確認されたのはこれが最初である。また、1995年には四国西南部の細石刃文化関連資料が木村・多田氏によって提示され（木村1995、多田1995）、池ノ岡遺跡では船野型細石核が、深泥遺跡では細石核ブランクの存在が明らかにされた。このほか、旧双海町唐崎遺跡においても近年、細石核の存在が確認されている（沖野1998）。

⑷ 旧石器時代終末期～縄文時代草創期

当該期の資料は発掘調査例としてはわずかであるものの、表面採集資料や単独出土例の収集によって資料的には着実に増加している（多田2000、藤野1991、安川2003）。本県でも多田氏による石斧・尖頭器の集成と編年研究によって、次第にその様相が整理されつつある（多田2000・2002）。

３　課題と展望

まず、ナイフ形石器文化前半期においては、新たな石器群の検出が大きな課題としてあげられる。この時期の石器群としては県内では未だ東峰遺跡が唯一の例として認められるのみで、比較検討資料が決定的に不足している。他地域では、近年当該期の資料が徐々に増加しており、石器群の構造論的研究や環状ブロック群研究を主とする該期の集団論研究が蓄積されつつある。

続くナイフ形石器文化後半期では、編年研究の更なる深化が望まれる。編年の確立は県内はもとより、ひろく西日本全域の課題としてあるもので、堆積環境の不良な本地域でいかにより広範な地域を対象とした整合的な編年を組み立てていくかが今後の大きな課題として挙げられる。本県でも当該期の編年研究には、先学の成果が残されており、これに修正・肉付けを重ね、系統立った編年の確立を目指す必要がある。

また、石器の技術・系統論や集団論と関連して、角錐状石器の様態や瀬戸内技法の拡散の問題を整理する必要がある。角錐状石器については石器群の広域対比を行う際の定点として、従来さまざまな研究がなされている。中・四国地方においても、1995・1999年には角錐状石器を対象とする研究会が実施され、各地域における実体が次第に明らかにされつつある（旧石器文化談話会1995・1999）。角錐状石器の理解は広域編年の確立や石器の技術構造の解明につながる可能性をもっており、今後も各地域における角錐状石器の在り方や編年的位置を実証的に確認する作業（多田1997a）を積み重ねていく必要がある。

瀬戸内技法の波及については、これまでの資料の蓄積から、翼状剥片等の瀬戸内技法関連資料をもつ芸予諸島の諸遺跡の在り方、また、それと対照的に製作工程を示す資料を欠き、製品のみが単独で出土する松山平野の在り方、距離的には最も離れているにも関わらず、在地の頁岩をもちいた瀬戸内技法関連資料が豊富に確認された旧御荘町和口遺跡等、各小地域単位での様々な在

り方が予想されている。これらの様相差は文化要素を受容する際の地域的勾配とも考えられるが、和口遺跡のように、ほぼ純粋な形で瀬戸内技法が受容される例はこれとは別の解釈が必要となってくる。今後は当該資料の蓄積をもってこれらの課題を整理し、集団移動の問題などに昇華させる必要がある。

また、これらに関連して各文化要素を他地域との比較のもと整理する必要がある。例えば、備讃瀬戸型石刃技法類似の縦長剥片剥離技術や旧双海町で確認された剥片尖頭器などは、他地域との関連性を端的に示すものであり、石器群の系統論・文化の波及の問題・広域編年などを理解する際の一助として研究を進めていく必要がある。

つぎに、尖頭器に関しては県内では類例がいまだ確認されておらず、様相は現状では不明であるといわざるを得ない。しかしながら、近年尖頭器文化については、全国的な視野に立った研究(藤野2004)や西南四国における尖頭器の分類案(多田2002)など、徐々に研究が蓄積されており、周辺地域での尖頭器文化の内実が明らかにされつつある。県内での在り方については、当該石器群の検出が急務の課題として挙げられるが、資料が蓄積したのち、前後の時期にあたるナイフ形石器文化・細石刃文化との関連性を含めて、当該地域における尖頭器文化の特質を抽出する必要がある。

細石刃文化期に関しては、本県でも検出例の多い船野型細石核・船野技法の理解を更に深める必要がある。船野技法については、分布の中心が九州南半部にあり、近年の資料の蓄積により、四国地域でも太平洋沿岸地域や瀬戸内海にも波及することが確認されている。木村氏はこれらの在り方から船野技法の東進を想定する(木村2003)立場をとるが、この文化的な影響関係の実態については、今後、九州と四国の時間的な対比が確実性をもった段階で再度検討する必要がある。

また、近年、多田氏によって提唱された羽佐島技法の問題も整理する必要がある(多田2001ほか)。これら羽佐島技法として抽出された板状剥片を素材とする細石核の存在は、九州においても鈴木忠司によって瀬戸内地方との関連性が想起されている(鈴木1988)。本県ではいまだ確実な羽佐島技法関連資料を欠くものの、これらの解明は細石刃文化段階における九州と四国との文化的な影響関係を明らかにする可能性をもっており、今後の研究の深化が期待される。

旧石器時代終末～縄文時代草創期については、石斧・尖頭器の技術形態学的研究から、編年的位置付けが検討されており、一括資料を欠くものの様相が次第に明らかになりつつある。池ノ岡遺跡や深泥遺跡では刃部磨製石斧と船野型細石核が同一地点で採集されており、東九州の細石刃石器群との類似性が示唆されている(多田2000)。また、中・四国地域の石斧を形態学的に検討した安川豊史氏も西南四国と東九州との類似性を示唆しており、今後は該期資料の蓄積とともに、広域編年の整備と石器群の比較研究を更に進めていくことが課題として挙げられる。

4　おわりに

以上、愛媛県における旧石器時代を巡る研究史の展開と、そこから展望される今後の課題を述べた。本県は火山灰の堆積が良好ではなく、また旧石器時代に属する遺跡の発掘調査例も近年下火となっている。したがって、以上に述べた課題の克服は資料の蓄積の進行に大きく依存するこ

ととなってしまう。しかしながら、資料的な制約を持ちながらも、各段階の石器群の輪郭がおぼろげながらも明らかになっているのは、これまで精力的に活動を続けてきた先学諸氏の努力の賜であり、こういった研究姿勢を受け継ぎ、さらに資料の蓄積を進めていく必要がある。また、これまでに収集された資料を詳細に分析し、既存の資料を今日的視点から再度評価する試みが今後も必要となってくるであろう。（2009年6月8日）

参考文献

沖野新一1998『赤石をもつ狩人』 青葉図書

鎌木義昌1961「愛媛県越智郡弓削南北二遺跡」『日本考古学年報』9号

鎌木義昌・高橋護1965「6　瀬戸内海地方の先土器時代」『日本の考古学Ⅰ　先土器時代』

木村剛朗1979『四国西南旧石器・縄文時代の新発見遺跡と遺物』 土佐考古学叢書3

木村剛朗1995『四国西南沿海部の先史文化　旧石器・縄文時代』 幡多埋文研

木村剛朗2003『南四国の後期旧石器研究』 幡多埋文研

中・四国旧石器文化談話会編1995『中・四国における角錐状石器をめぐる諸様相』

中・四国旧石器文化談話会編1999『角錐状石器の諸問題』 第16回中・四国旧石器文化談話会発表要旨

重松佳久1992a「第12章　石手川水系に於ける旧石器文化」『桑原地区の遺跡』㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

重松佳久1992b「第8章 小野川水系における旧石器文化」『来住・久米地区の遺跡』

鈴木忠司1988「上野Ⅱ文化層の位置づけをめぐって」『大和のあけぼの』Ⅱ　大和市教育委員会

十亀幸雄1977「愛媛県弓削島楡田採集の翼状剥片」『遺跡』No.15　遺跡発行会

十亀幸雄1978「愛媛県祝谷丸山遺跡の細石刃剥離技術」『古代学研究』88

十亀幸雄1981「佐島百山遺跡のナイフ形石器」『遺跡』第20号　遺跡発行会

十亀幸雄1982「愛媛県弓削島における先土器時代の遺跡と遺物」『遺跡』第22号　遺跡発行会

十亀幸雄1983「西部瀬戸内地方の瀬戸内技法」『遺跡』第23号　遺跡発行会

十亀幸雄1984「弓削島高浜神社遺跡の先土器時代遺物」『遺跡』第26号　遺跡発行会

十亀幸雄1988「芸予諸島の先土器時代資料」『遺跡』第31号　遺跡発行会

多田仁1992「松山平野の石器文化」『祝谷アイリ遺跡』㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

多田仁1995「四国西南部の船野型細石核」『旧石器考古学』51　旧石器文化談話会

多田1997a「中・四国地方における角錐状石器の様相」『九州旧石器』第3号　九州旧石器文化研究会

多田仁1997b「西四国における旧石器時代終末から縄文時代草創期の石器群」『中・四国の縄文時代草創期の土器と石器』 第8回中四国縄文研究会発表資料　中四国縄文研究会

多田仁2000「四国地方中・西部における旧石器時代終末から縄文時代草創期の石斧」『紀要愛媛』創刊号　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

多田仁2001「羽佐島技法の再評価」『旧石器考古学』62　旧石器文化談話会

多田仁2002「四国の尖頭器」『四国とその周辺の考古学』 犬飼徹夫先生古希記念論文集刊行会

多田仁2003「瀬戸内とその周辺における細石刃文化の一様相」『古代文化』55－8　古代学協会

長井数秋1986「一．先土器時代」『愛媛県史　資料編　考古』 愛媛県史編さん委員会

藤野次史2004『日本列島の槍先形尖頭器』 同成社

安川豊史2003「石斧の様相」『中・四国地方旧石器文化の地域性と集団』 中・四国旧石器文化談話会

第２章　縄文時代

兵頭　勲

１　はじめに

戦後間もない中・四国地域の縄文時代研究は、土器編年の組み立てに向けて、その空白部を埋めていく発掘調査や研究を中心に行われてきた。愛媛県では、資料が十分に蓄積さていないこともあり、周辺地域と比較して編年研究の面で立ち遅れていたが、畿内や九州といった周辺地域の影響を受けた土器も次第に認められ始め、広域土器の地域性について検討していくことの必要性が求められた。そして1956年には四国地域の土器編年が発表され（岡本1956）、編年体系の整備は今後の課題として残されてはいたが、その後の土器編年の基本となる業績といえる。

愛媛県での本格的な縄文時代研究は、愛南町平城貝塚に端を発し（西田1954、鎌木・西田1957ほか）、1960～70年代には、縄文草創期～早期、特に押型文土器前後を埋める資料の発見が相次ぎ、なかでも日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会によって行われた久万高原町上黒岩岩陰遺跡の調査は大きな成果を上げることになる（江坂・岡本・西田1967）。さらに西予市穴神洞・中津川洞遺跡の調査でも隆起線文土器や押型文土器などが層位的に出土し（大山1978、長井ほか1979）、現在もなお、当該期の様相は上述の洞穴・岩陰遺跡の成果に拠る部分が大きい。さらに近年においても、こうした洞穴・岩陰遺跡の再整理・再検討が積極的に行われている（長井2004、小林ほか2008）。

愛媛県の縄文時代遺跡は、縄文早期中葉、縄文後期前葉～中葉、縄文晩期後半の遺物を出土する遺跡が多く存在するも、縄文前期～中期の遺跡については比較的少ない傾向にあり、このことは県内のみならず、四国地域全体にも言えることである。とくに縄文後期前葉～中葉については遺跡数・遺物量ともに多いことからも、当該期を中心とした土器研究は活発に行われ、後期資料に関わる調査報告も多くみられる。こうした研究は、西田栄、長井数秋、犬飼徹夫の各氏が中心となり牽引してきており、その初期の成果をとりまとめたものに、『愛媛県史』の原始・古代Ⅰ（愛媛県1982）や考古資料編（愛媛県1986）が挙げられる。1990年代に至るまでの研究は、主に土器編年の構築や石器組成、石器石材の流通を研究対象として行われてきた一方で、住居形態や集落構造といった地域社会の構造に至る研究については、良好な資料的事例を欠くため、その関心の低さは否めない。しかし近年においては、周辺地域での活発な集落研究を反映してか、それに関連する調査や報告も徐々にではあるが増えてきている。

こうした一連の流れの中で、当センターもその役割を担ってきた。そこで以下、当センターにより発掘調査の行われた主要な縄文時代遺跡についての成果を振り返りながら、研究の現状と今後の課題について述べてみたい。

２　発掘調査の成果

1970年後半～80年代は、四国縦貫自動車道や本州四国連絡橋等の建設に関連した大規模開発事

業が増加し、それに伴う発掘調査が行われたことで縄文時代の遺構・遺物の発見例も徐々に増えていくことになる。この時期全国的な縄文時代研究は、時代観やその文化的内容にわたる研究についての積極的な取り組みがみられ始めるも、県内では依然として土器編年を中心とした研究が主流であり、また、地域的な偏在も認められ、県内全域におよぶ縄文時代遺跡の実態把握を必要としていた。

まず東予地域では、四国中央市医王寺Ⅲ遺跡、同市長命寺遺跡、西条市半田山遺跡では、縄文早期の押型文土器や無文土器が出土している。長命寺遺跡では約400点の無文土器とともに5点の押型文土器が出土し、押型文土器は楕円文を規則的に横位施文したものであり、そのうち口縁部の1つには内面に刻目が施された資料も確認できる。多量の無文土器に伴い出土している点等からも、押型文土器出現期の資料として評価されている(愛媛38)。また、半田山遺跡では、多くの竪穴住居跡や掘立柱建造物が検出され、出土遺物から弥生時代中期後半～後期初頭を主体とした集落遺跡である。しかし、縄文早期の高山寺式土器が一定量存在していることは注目すべき点であり、今後は遺跡立地や周辺遺跡との関係を含めて検討していく必要がある(愛媛39)。

中予地域については、国道33号線や県総合運動公園建設に伴う調査で大きな成果を上げており、ここでは長田遺跡、城ノ向遺跡、土壇原Ⅱ遺跡、西野遺跡などが調査されている。砥部町長田遺跡では縄文前期前半である九州系の轟式土器と瀬戸内系の羽島下層式土器がそれぞれ出土している(愛媛7)。さらに松山市土壇原Ⅱ遺跡では、一辺約4ｍの竪穴住居跡が検出され、その底面にから多量の無文土器が単独で出土している。この一群については、押型文土器に伴う無文土器、いわゆる蔦島式土器とは一時期を画す資料として、土壇原式土器として設定されている。かねてからその位置付けについては諸説があり、黄島式土器に先行もしくは後続するものとして考えられてきた。これらは厚手無文土器として一括で捉えられてきたが、最近の調査では、薄手の無文や条痕を有する土器なども存在するなど、今後再検討を要する一群である(兵頭2006)。

1990年代～2000年前半は、青森県三内丸山遺跡や鹿児島県上野原遺跡に代表されるよう各地で大規模な集落遺跡が発見され、全国的にも縄文時代観の見直しが迫られるようになった。県内では継続して大規模事業に伴う調査が行われており、これまでは東・中予地域を中心とした調査であったが、徐々に南予地域へと調査が広がったことで、これまで縄文時代遺跡の実態が不明瞭であった西四国地域においても遺跡の発見が急増していくことになり、地域的な偏在も徐々に解消されていくことになる。縄文時代研究についても、土器編年を中心とした研究に留まらず、集落や交易といった縄文文化全般を捉えた研究の取り組みも試みられるようになっていく。

西条市横山城跡、同市妙口遺跡での調査で、縄文早期中葉～後葉の押型文土器や無文土器が出土しているほか、石鏃や石槍といった石器群も認められる(愛媛44・46)。また、古くから周桑平野周辺部では、縄文後期の遺跡が数多く存在しており、安定的に遺跡が展開していることが認められてきた。同平野南部についても西条市小松川藤木遺跡、同市仏心寺遺跡、同市明穂東岡遺跡、同市川原谷遺跡、同市鶴来が元遺跡などが挙げられる。そのなかでも当センターが調査を実施した鶴来が元遺跡は、妙之谷川の東に展開する河岸段丘に位置しており、縄文早期中葉、縄文中期末～後期、中世の複合遺跡である。遺構は縄文後期の土坑34基が検出され、中津式～松ノ木式

段階の土器が大量に出土しており(愛媛45)、小松川藤木遺跡出土の土器を含め、当該地における後期土器の指標となる一群といえる。また、同平野北部においても、同市松木池遺跡、同市世田山Ⅰ～Ⅶ遺跡、同市永納山遺跡、同市六軒家Ⅰ～Ⅳ遺跡など山麓地帯において縄文時代遺跡が集中することが知られている。断片的な情報が多いなか、同平野北部の主要形成河川である大明神川の扇状地北端を貫流する北川・スミヤ川によって形成された河岸段丘上に位置する福成寺遺跡と旦之上遺跡は、県道新設に伴い調査の行われた遺跡であり、縄文早期、縄文後期、縄文晩期の遺構や遺物が検出された。その福成寺遺跡では、調査区全面にわたり縄文早期から中世までの遺構が検出されており、縄文早期のおとし穴状遺構などが確認されている。また土坑内からは押型文土器が出土しており、出土点数は少ないものの、その文様は山形文に限られており、無文部を残した帯状施文を意図している特徴などから黄島式に先行する土器として位置付けられ、押型文土器出現期を考える上で重要な資料と考えられる。また、後期土器については、分類毎の出土頻度から中津式～宿毛式にかけての時期にピークがあることが指摘されており、晩期土器では、黒色磨研土器や方形浅鉢などが出土しており、その位置付けがされている(愛媛118)。

今治市阿方・矢田遺跡では、自然流路付近より検出された土坑より、刻目突帯文の深鉢や精製浅鉢が多数出土しているほか、内外面に漆を塗布した浅鉢や結晶片岩製の石棒・石錘などの一括性の高い資料が得られている(愛媛84)。今治市辻堂遺跡では、自然堤防に掘削された土坑や包含層中から福田KⅡ式併行の土器が多量に出土している。ローリングを受けた痕跡がないことなどから人為的な一括廃棄とし、また、赤色顔料塊が出土していることで祭祀に関わる遺構と考えられており、今後の整理に期待される。

島嶼部においては、これまで今治市水崎遺跡や同市波方港海底遺跡などでの断片的な資料が多かったが、本州四国連絡橋建設に伴う調査によって良好な臨海集落の発見が多くみられる。島嶼部における縄文時代遺跡の初現は、今治市叶浦Ｂ遺跡の押型文土器文化期に遡るも(愛媛3)、縄文前半期の遺跡数は少なく、当該地に遺跡が広範囲に展開するようになるのは、縄文海進以降の海退によって海浜部に砂州とラグーンが形成されたことで生活環境が保証される縄文中期～後期になってからであり、こうした時期を中心とした遺跡が数多く発見されるようになる。なかでも今治市馬島亀ヶ浦・ハゼヶ浦遺跡は、来島海峡中の島に所在する臨海集落遺跡であり、亀ヶ浦遺跡においては香川県金山産サヌカイトの荒割素材7点が検出されており、サヌカイト原石の入手から内陸部への流通品である資料とされた。縄文後期における石材流通システムを考える上でも重要な資料といえる(愛媛79)。また、馬島ハゼヶ浦遺跡では、結晶片岩製の石器をはじめ突帯文土器の胎土中に片岩粒が確認された。この結晶片岩は当地域で産出しない石材であり、内陸部である加茂川や中山川の流れる周桑平野などで認められることからも、両地域との関係が想定されている。さらに調査では、半径2ｍの範囲から2,000点にも及ぶサヌカイト製の砕片が出土したことで、本遺跡は非在地石材の流通中継地であるとともに石器加工地であった可能性が考えられている(愛媛79)。

また、こうした遺跡に関連するものとして、愛媛大学埋蔵文化財調査室によって調査が行われた今治市江口貝塚が存在する。本遺跡では縄文前期～晩期における石材利用の変遷を指摘し、蛍

光X線分析の結果、剥片石器の主体となるのは金山産サヌカイトであることが明らかにされている(宮本編1993)。さらにはサヌカイト原石や素材剥片が出土しており、組織的な金山産サヌカイトの流通が考えられる。この他にも後期初頭～前半における西北九州産黒曜石の石核・剥片も出土しており、このことは石材流通に縄文社会の複雑な要素が介入していたことを示唆していよう。近年におけるサヌカイト流通に関する愛媛県内の研究事例について概観しておくと、谷若倫郎氏の研究(谷若1997)は、縄文時代後期から晩期のサヌカイト流通について原産地からの距離を基にした地域設定を行い、各地域におけるサヌカイト製板状素材や石核の様相差を見出している。さらに平尾勝洋氏も、芸予臨海地域と松山平野の石器組成の差やサイズの差などを導き出し、松山平野では石核のみの組成であることや法量自体が小型化することが述べられている(平尾2003)。また、多田仁氏は猿川西ノ森遺跡におけるサヌカイト製石器の様相を１段階資料(板状素材)が伴う「近距離地域」と比定し、さらに遺跡の立地が平野部から山間部に入った段丘と丘陵の発達した地域であることから、内陸地域を通じた流通の存在を検討する必要性を示唆している(愛媛147)。

次に南予地域の調査に転じると、先述したとおり遺跡数が急増しており、とくに西予市宇和町や宇和島市津島町御槇盆地などでの成果が上げられよう。こうした成果の中には、火山灰分析や石材分析といった理化学的な手法も積極的に取り入れられ、各分野での情報が蓄積されていくことになった。

まず西予市では、常定寺遺跡において石鏃、尖頭器、剥片、石核といったアカホヤ降灰後の石器群が出土している。これらは姫島産黒曜石、安山岩、サヌカイト、赤色珪質岩を用いているが、あくまでもその中心はチャートを主体としたものであり、遺物の出土状況から丘陵南部分と北部分に密な分布状況が確認されている(愛媛103)。また、同市音地遺跡では、アカホヤ降灰前の石器群が出土し(愛媛103)、同市下川遺跡では、縄文早期の包含層から石核や剥片といった石器群が出土しており(愛媛103)、ともに石器利用石材についてはチャートが用いられている。今後は原産地の問題も考慮しつつ、こうした資料の蓄積を続けていくことで、当該地における石器群の様相が明らかになるものと思われる。

次に御槇盆地においては、四国地域の山間部で非在地石材である姫島産黒曜石や縄文土器といった九州地域との交流を示唆する遺物が数多く確認されていることもあって、古くから注目されてきた地域であり、御内川の水源地周辺部には、同市池ノ岡遺跡や同市影平遺跡といった縄文早期～前期の良好な遺跡が存在している。その御槇盆地中心部に展開する御内川の河岸段丘上に位置する宇和島市中駄場遺跡において調査が実施されている。出土遺物は轟B式土器、石鏃、打製石斧といった縄文前期のものが出土しているが、土器に関して言えば遺物全体の約１割程度と少なく、石器を中心とした組成であることや石器の残存状況からキャンプ地として利用されていた遺跡として考えられている(愛媛74)。

また、この中駄場遺跡から直線距離にして東へ1.5㎞いった場所に宇和島市犬除遺跡が位置している。縄文早期の集石遺構や縄文後期の配石墓が検出されており、配石墓については西南四国地域では初めての事例となった。出土遺物は、縄文早期・前期・後期の３時期であるが、その大半は後期の遺物で占められ、西南四国の縄文時代遺跡の中でも最大規模といえる。また、縄文早

期の集石遺構を検出しており、西条市明穂東岡東遺跡に次いで２例目である（愛媛54）。出土遺物は、早期は厚手無文土器であり、繊維混入の認められるものである。瀬戸内側の厚手無文土器については明らかに繊維が含まれているものが少なく、太平洋に面する南四国側では繊維を含むといった特徴が色濃く認められる。後期土器については、後期前葉～中葉の土器が認められ、宿毛式、松ノ木式、三里式、片粕式、伊吹町式土器などである。遺物全体において高い比率を示す石器類についても多種多様であり、石鏃、打製石斧、スクレイパー、石錐、石錘のほか、結晶片岩の礫岩を砲弾型と板状に整えた2点の垂飾品が出土しており、砲弾型ものについては穿孔途中段階の痕跡が認められる。また、剥片・石核は、付近を流れる松田川で産出する頁岩製のものが点数・重量比ともに高い割合で確認されており、包含層中より出土した剥片と、松田川採集の石材サンプルを科学的に分析した結果、元素組成上ほぼ一致することが確認されている。また、姫島産黒曜石についても確認されているがその利用頻度は低く、縄文時代を通して中心的に使用された石材は、本遺跡周辺で採取可能な頁岩であることが証明されており、本遺跡においては石器製作が行われていたことがうかがえると同時に、当該地における縄文人の拠点的場所であった可能性が考えられている（愛媛92）。

また、近年の調査では、これまで縄文時代遺跡が空白地域であった場所で遺跡が発見されている。なかでも北条平野からやや奥まった山峡部を流れている立岩川の河岸段丘上にある松山市猿川西ノ森遺跡の調査では、縄文早期から中世にかけての遺物が確認されている。各文化層からは定住を示すような遺構は確認できなかったものの、縄文早期中葉、後期全般、晩期後葉の土器がまとまって出土している。早期土器については、山芦屋Ｓ４下層式－黄島式－高山寺式－穂谷式といった押型文土器が連続的に認められ、黄島式に先行する一群が確認された。後期土器は遺跡全体で最も多くの土器型式が出土しており、これまで県内で資料的にも少なかった元住吉山式や福田KⅢ式といった後期後葉の資料が確認できたことは大きな成果といえる。また、出土した石器については石鏃が最も多く出土し、これに楔形石器が続いている。こうした狩猟具や工具といった石器類が卓越した組成を示している反面、凹石や磨石といった植物質食料加工具は少なく、漁撈具については1点も認められないことから、本遺跡では狩猟活動に比重を置いていた生産活動が展開されていたと考えられる。また、本遺跡の石材利用はサヌカイトが最も多く、江口貝塚や馬島亀ヶ浦遺跡同様に、石核や板状剥片といった流通形態のものも確認されておりその関連性も注目される。また、黒曜石の原石や石核も出土しており、蛍光Ｘ線分析により島根県隠岐久見群産と大分県姫島観音崎群産に推定されている。隠岐久見群産黒曜石については分割礫を素材としたものであり、その重量は23.53gを量り、四国地域のなかでも最も大きい部類のものといえる。こうした状況から、本遺跡は当該期における石材の流通基地的な役割を担っていた可能性が考えられている。先述した臨海部遺跡と内陸部にある猿川西ノ森遺跡とでは、自然環境や石器組成などの面から明らかに生活基盤に違いが認められるが、こうした生活スタイルの異なる海浜部と内陸部といった石器石材の流通関係はもちろん、陸路によるサヌカイト流通の存在については今後の検討課題である。住居跡を示す遺構は検出されなかったが、土器型式や石器素材などの豊富さが物語っているように、当地域は生活に適していた場所であり、単なる一過性の生活領域ではな

かったことがうかがえる(愛媛147)。

宇和島市柿の木西法寺遺跡では遺構は検出されなかったものの、量的に少ないながらも縄文時代包含層中より早期中葉の黄島式土器、前期の轟Ｂ式土器・羽島下層式、後期前葉の中津式土器が、石器では姫島産黒曜石製やサヌカイトの石鏃やスクレイパーなどが出土している。また、姫島産黒曜石の剥片や細片が多く出土している点からも石器製作の一面を持つ遺跡とも考えられる(愛媛134)。

この姫島産黒曜石については、古くから木村剛朗氏や橘昌信氏により研究対象とされており、採集資料であるが四国西南部の御荘湾・宿毛湾沿岸地域において500～1,000gの原石・大型石核の報告があり、こうした事例は当地域に限られている。当地域には平城貝塚や宿毛貝塚が存在しており、四国地域の中でも古くから注目されてきた地域であり、姫島産黒曜石製石器が出土する遺跡も多く、現在のところ30数箇所の遺跡が知られている(橘2002ほか)。原石・大型石核については、愛南町深泥遺跡で縄文前・中期の土器とともに670gの石核が採集されているほか、同町節崎遺跡では縄文前期の土器とともに1,000gを超える円礫状原石が、同町茶堂Ⅰ遺跡では約500gの原石が縄文前・中期の土器と一緒に採集されており(木村1987、1995ほか)、いずれの遺跡も海岸から至近の距離に位置していることからも、四国西南部における姫島産黒曜石流通の窓口的地域として重要視する必要がある。これに対して海岸部からさらに四万十川の上・中流域においては、時期に関係なく在地石材である頁岩やチャートを多用しており、当然、こうした背景には各遺跡と石材原産地との距離の問題が考えられる。

新居浜市上郷遺跡(愛媛152)、西条市池の内遺跡２次(愛媛151)では、縄文晩期の良好な資料が出土しており、前者では晩期末の突帯文土器、後者では晩期前半の黒色磨研土器が出土し、両遺跡ともに祭祀に用いる石棒が認められる点は興味深い。このほか今治市高橋佐夜ノ谷遺跡、同市神宮太郎丸遺跡、同市矢田大坪遺跡、同市矢田大出口遺跡、西条市松木池遺跡、同市成福寺Ⅷ遺跡などで調査が行われており、このように東予地域は、現在、整理中である四国中央市上分西遺跡も含め、縄文後期～晩期について確実に資料が蓄積され、今後は当地域を中心とした総体的な検討も必要になるであろう。

また、現在も継続して調査の行われている松山市北井門遺跡２・３次調査では、県内において空白部分であった後期末～晩期初頭の資料がまとまって出土しており、竪穴住居跡や土坑墓の検出や石鍬状石器の豊富さなどからも、集落や生業論といった各研究にも期待が持たれている。

３　おわりに

以上、すべてを取り上げることは出来ないまでも埋文センターが携わってきた主要遺跡の概略について述べた。他地域と比較して調査されてきた遺跡は決して多いとは言えないまでも、縄文時代を研究する上で重要な遺跡が多いことも今回再認識することができた。また、ここではあまり触れなかったものの、この他にも市町教育委員会との協力により、新らたに発見された遺跡も少なくなく、八幡浜市須川丸山遺跡２次調査[1](多田・兵頭2003)もその一つに挙げられる。

愛媛県における縄文時代研究は縄文土器の分類・編年を中心に進められてきたが、あくまで様

式としての大枠で把握されている部分も多く、各型式の系統立った研究も十分に行われているとは言い難い。今後はより精緻な編年の確立が望まれ、新出資料の発掘と既存資料の再検討といった両面からの方向性を必要である。

また、愛媛県の各地域は、地形・気候・植生などの自然環境に違いが顕著にみられ、縄文文化もその地域に卓越した地形に適応する形で生活場所を選択し、各地域によって異なる生活環境を生み出している。このことからも各地域、各遺跡単位での詳細な出土比率などのデータを整理し、自然環境、土器型式、生業活動、精神生活など多角的な視点で考慮していく必要があるだろう。

（2009年6月11日）

註

(1)本遺跡は16㎡の小さい調査面積ながら、無文土器・石鏃・凹石・楔形石器などが出土しており、アカホヤ火山灰の準降灰層の下位から出土したことにより縄文早期に属するものと考えられている。無文土器は、押型文土器文化の波及以前のものとして位置付けられる。

参考文献

江坂輝彌・岡本健児・西田栄1967「愛媛県上黒岩岩陰」『日本の洞穴遺跡』 平凡社

愛媛県1982『愛媛県史』原始･古代Ⅰ

愛媛県1986『愛媛県史』資料編 考古

大山正風1978『中津川洞 第Ⅲ次発掘調査概報』 城川町文化財保護協会

岡本健児1956「各地域の縄文式土器－四国」『日本考古学講座』第３巻、河出書房

鎌木義昌・西田栄1957「伊豫平城貝塚」『瀬戸内考古学』創刊号　瀬戸内考古学会

木村剛朗1987『四万十川流域の縄文文化研究』 幡多埋文研

木村剛朗1995『西南四国沿海部の先史文化　旧石器・縄文時代』 幡多埋文研

小林謙一・国立歴史民俗博物館編2008『縄文時代のはじまり－愛媛県上黒岩遺跡の研究成果－』 六一書房

多田仁・兵頭勲2003「須川丸山遺跡の調査」『保内の遺跡２』 保内町教育委員会

橘　昌信2002「四国西南部における縄文時代の石材環境」『四国とその周辺の考古学』 犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会

谷若倫郎1997「「瀬戸内的物流」の原形」『伊達先生古稀記念古文化談叢』

長井数秋2004『穴神洞・中津川洞発掘記録抄』 城川町教育委員会

長井数秋・十亀幸雄・土居陸子1979『城川の遺跡』 城川町教育委員会

西田栄1954「平城貝塚調査略報(愛媛県南宇和郡御荘町)」『愛媛大学紀要 第１部人分学部』第２巻第１号

兵頭勲2006「北四国地域における早期土器研究の現状と課題」『早期研究の現状と課題－前葉を中心に－』 中四国縄文研究会

平尾勝洋2003「愛媛県域における縄文時代の石器－中期・後期・晩期－～サヌカイト製剥片刃器を中心に～」『中四国地域における縄文時代石器の実相』 第14回中四国縄文研究会発表資料

宮本一夫1993『江口貝塚Ⅰ－縄文前中期編－』 波方町教育委員会・愛媛大学法文学部考古学研究室

第３章　弥生時代

柴田昌児　松村さを里

１　はじめに

昭和53（1978）年に㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター（以下、当センターと略す）として発掘調査を開始して以来、多くの弥生時代遺跡の調査を行い、調査成果を蓄積してきた。そこで本稿では愛媛県を東予（愛媛県東部）地域・中予（愛媛県中部）地域・南予（愛媛県南部）地域の3地域に分け、地域ごとの調査履歴を軸にその成果の足跡を辿っていくことにしたい。そして当該地域の弥生時代研究の進展と課題についても触れていくことにする。なお、本稿の執筆は次節の「２　東予（愛媛県東部）地域」を柴田が、「３　中予（愛媛県中部）地域」と「４　南予（愛媛県南部）地域」を松村が担当し、「５　まとめ」を両者で協議したうえで柴田がまとめた。

２　東予（愛媛県東部）地域

まずこの地域の調査成果を語る場合、西瀬戸自動車道建設と四国縦貫自動車道建設という2つの大規模開発事業に伴う一連の発掘調査を欠かすことはできない。

瀬戸大橋建設に伴う調査では伯方島の丘陵谷部に立地する叶浦（B）遺跡で前期後半から中期前半の弥生土器が多量に出土し、その後の編年研究における基礎資料の初例ともいえる報告書が1980年に刊行されている（愛媛3）。さらに四国縦貫自動車道では四国中央市（旧伊予三島市）の法皇山脈から延びる丘陵において標高113～118mの丸山Ⅱ遺跡が調査され（愛媛1984a）、竪穴住居が検出されている。これ以降この路線上で多くの丘陵性弥生集落が検出されるようになるのであるが、この遺跡は一連の調査の端緒である。

1980年代後半になると県営圃場整備や一般国道に伴う調査も次第に増加し、中期後半から後期の竪穴建物を検出した今治市の朝倉南甲遺跡（愛媛17）や朝倉下岡遺跡（愛媛23）、そして西条市池の内遺跡（愛媛32）など、低地に展開した弥生集落の一端を調査するようになる。

さらに一般国道196号に伴う調査では今治市中寺州尾遺跡の自然流路から縄文時代晩期後半の突帯文土器と弥生時代前期前半の弥生土器が比較的まとまって出土し、それに伴う大陸系磨製石器も出土した。それによって北部九州の板付Ⅱa式に併行する時期前後の地域的様相が明らかになり（愛媛31）、弥生文化の波及を知る調査成果となった。しかし、中寺州尾遺跡の場合、調査時の認識不足に起因した出土資料の層位的同時性・帰属性の検証が曖昧であったため、良好な資料を峻別することができず、周辺地域との関連や突帯文土器と前期弥生土器との厳密な対比ができなかったことは悔やまれる。

当時、後期中頃の典型的な高地性集落としてすでに評価されていた西条市八堂山遺跡も1980年代後半に２次（愛媛25）と３次（愛媛36）の調査が行われ、集落を区画あるいは防御する溝（壕）が検出されている。

1990年代に入ると先述した瀬戸大橋建設と四国縦貫自動車道建設が急ピッチで進展するようになり、それに比例して大規模な発掘調査が増加していくようになる。

特に1990年代前半は四国縦貫自動車道建設に伴う調査報告書が相次いで刊行された。四国中央市土居町では標高109～126mの平坂Ⅱ遺跡をはじめ、医王寺Ⅱ遺跡や長命寺遺跡など中期後半を中心に営まれた丘陵性集落が調査され、竪穴建物や付随施設の様態が明確になった(愛媛38)。さらにインターチェンジが建設された標高118～128mの西条市半田山遺跡では、31,000㎡に及ぶ面積を調査し、竪穴建物23棟、掘立柱建物25棟が検出され、丘陵上に展開した比較的大規模な弥生集落の実態が明らかになった。

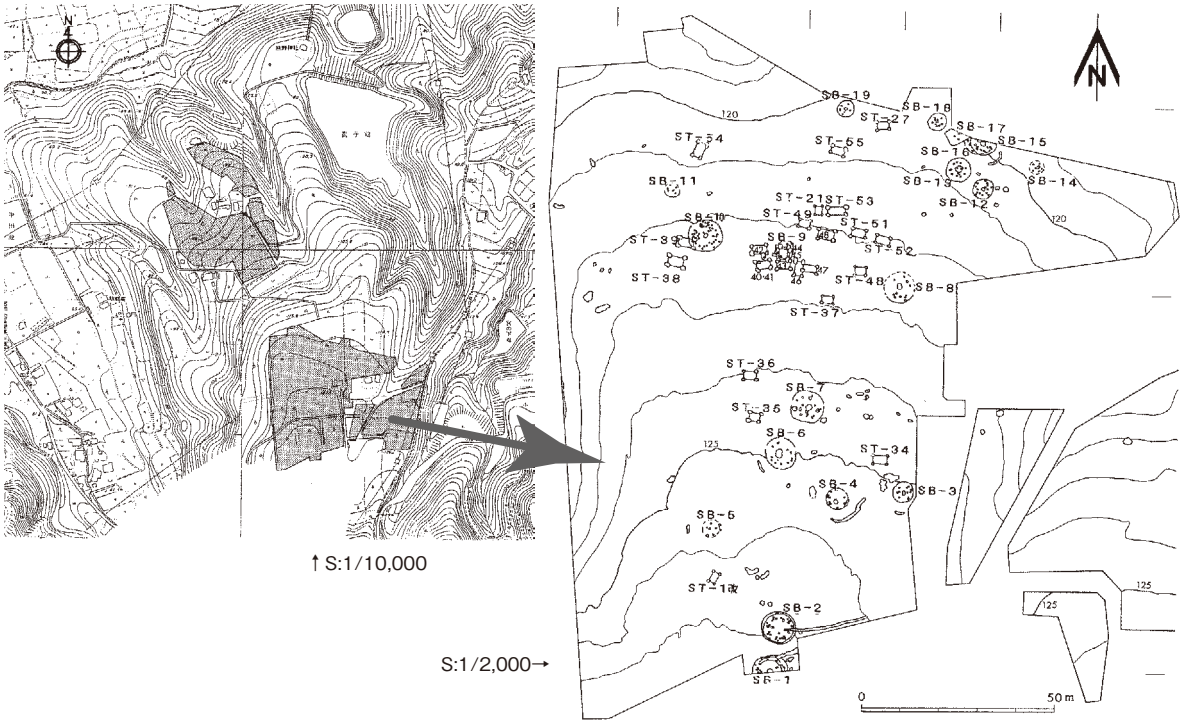
そして、西条市横山城跡(愛媛44)や西条市小松町大谷池東遺跡(愛媛46)、明穂東岡Ⅱ遺跡(愛媛54)など多くの丘陵性集落の実態を明らかにしていった。

こうした一連の丘陵性集落の調査は、各遺跡で検出された多くの遺構の中から竪穴建物を中心とした同時併存遺構の特定を可能にした。その結果、竪穴建物大小2・3棟と貯蔵施設が1つの組み合わせとなる集落経営における普遍的な「最小構成単位」の抽出を可能にしたのである(柴田2002)。そしてこうした一種の農業共同体を形成している丘陵や山頂に立地する弥生集落を「山住みの集落」と総称することで、「軍事的防御的機能」が付加された八堂山遺跡などの『高地性集落』とは概念的に弁別することが可能になった(柴田2004・2006)。

1994年に刊行された多々羅製塩遺跡(愛媛52)を嚆矢に1990年代後半は瀬戸大橋建設に伴う一連の調査に関する報告書が相次いで刊行された。多々羅製塩遺跡では古墳時代前期の製塩炉と多量の製塩土器が出土し、芸予諸島における土器製塩の実態を明らかにすることができた。またその報告書では当該地域における弥生時代中期末から奈良時代までの製塩土器編年案を提示し、芸予諸島における土器製塩の動態が検討された。さらに糸大谷遺跡(愛媛63)、火内遺跡(愛媛70)、馬島亀ヶ浦遺跡や馬島ハゼヶ浦遺跡(愛媛79)など、来島海峡に面した弥生時代から古墳・奈良時代にかけて経営された臨海性集落の実態が明らかになり、製塩や漁撈など生業の一部を海に依存する集団の実相が時空的に追えることになった意義は大きい(柴田2007、谷若2002)。

1990年代は、上述したように大規模調査によって飛躍的な資料の増加が認められた。さらにこの頃から今治市教育委員会などの自治体に文化財専門職員が採用され、市町村での行政発掘が徐々に増加していった。こうした資料的充実を受けて2000年に刊行されたのが『弥生土器の様式と編年－四国編－』である。これには後述する伊予中部(中予)地域を梅木謙一(梅木2000)が、伊予東部(東予)地域を本稿筆者の一人である柴田が担当し、それぞれの地域における弥生土器様式編年案を発表した。これによって東予地域では弥生時代から古墳時代初頭にかけてⅠ様式からⅥ様式の大別6様式が設定され、さらに16小様式に細別する様式編年案が提示された(柴田2000a)。こうした弥生土器編年案の提示には、1980年代後半から1990年代の膨大な調査資料の蓄積とそれを体系的に咀嚼するためへの希求が背景にあったのである。

そして21世紀を迎えるのであるが、2000年代に刊行された報告書で特筆できるものとして、まず今治市阿方遺跡を挙げることができる。阿方遺跡は1941年に杉原荘介によって調査され、1947年にその出土土器が阿方式土器と命名されて以来(杉原1947)、弥生時代前期末の代表的な遺跡と



第１図　西条市半田山遺跡（柴田2002より引用・一部改変）

四国中央市平坂Ⅱ遺跡

西条市明穂東岡Ⅱ遺跡

今治市阿方遺跡

写真図版１　東予（愛媛県東部）地域の弥生遺跡

して学会でも広く知られている遺跡である。この阿方遺跡は瀬戸大橋関連事業の一つである来島海峡大橋建設に関連する橋脚の建設に伴い、新たに1996年から1997年にかけて発掘調査が行われ、報告書が刊行された(愛媛84)。その調査では、杉原が調査したと思われる場所(県指定史跡阿方貝塚)に近接したA11区を中心に縄文時代晩期から弥生時代中期までの遺物が出土し、特に弥生時代前期末～中期初頭の土器が大量に出土した。さらに農耕具などの木製品も大量に検出され、Ａ８区とA13区では弥生時代前期末～中期初頭の木製短甲が出土し、A13区では当該期の流路に沿ってシガラミ状遺構や木樋状遺構が検出されている。シガラミ状遺構であるA13区SX01の横木に使用されていた径約26㎝のヒノキ材は、奈良国立文化財研究所(当時)の光谷拓実によって年輪年代測定が行われ、「伐採年代はB.C.311年+辺材部分の年数」の測定結果を得ている。ところが極めて重要な年代測定であったにも関わらず、報告書中では遺構説明の中で数行ほどしか触れられておらず(愛媛84の85頁)、遺構の時期についての記述も中期前半以前という漠然とした表現となっている。これは、当時、弥生時代前期末から中期前半の実年代観が紀元前2世紀ころと考えられていたことから、ヒノキ材の測定結果が紀元前4世紀後半とあまりにも古い年代観が示されたため、それを意識した結果、遺物が伴っているにも関わらず上述のような漠然とした年代観を記述するに至ったと考えられる。その後、AMS(加速器質量分析)法による炭素14年代測定法を用いた高精度年代体系を確立させた国立歴史民俗博物館の研究チームが、弥生時代前期末を概ね紀元前5世紀後半から4世紀前半に位置づける新たな年代観を提示し、現在に至っている(春成2006、藤尾2004、藤尾ほか2006など)。こうした現状を踏まえるとむしろ阿方遺跡A13区SX01で出土したヒノキ材は前期末の良好な資料であり、年輪年代測定法を用いたその測定結果は、AMS－炭素14年代測定で得られた年代観よりもやや新しくなる年代測定結果として弥生時代実年代に関する議論の俎上に載せるべき重要な測定結果なのである。

2000年代に入ると縦貫自動車道や国道のバイパス建設など大規模開発に伴う埋蔵文化財調査は、その主体が中予と南予地域に移行し、東予地域では減少傾向に転じていく。そうしたなか、断続的ではあるが東予地域の各平野で比較的規模の大きな調査が行われる。国道11号新居浜バイパスに伴う調査では、新期松菊里型住居(中間1987)を含む前期末(伊予東部Ⅱ－1様式)の竪穴建物が検出された星原市東遺跡(愛媛109)や中期末(伊予東部Ⅳ－3様式)の良好な一括資料や竪穴建物群を検出した松原遺跡(愛媛127)が調査され、新居浜平野に形成された国領川扇状地上に立地する弥生集落の一端が明らかになった。

道前平野の旧東予市(現西条市)に所在する久枝Ⅱ遺跡は、今治小松道路建設に伴う調査で検出された中期弥生集落である(愛媛122)。この遺跡では溝によって区画された方形区画域を中心にその周りに祭祀土坑が配され、さらにその外側に居住域を形成する集落構造であることがわかった。出土遺物も他地域からの搬入品が比較的多く認められ、石製指輪などの稀少品や被熱変形土器などの特殊な土器も出土した。遺構の構造や出土遺物の組成から道前平野における中核的な拠点集落としての機能を想定することができ、沖積低地に展開した中期弥生集落の様相を知るうえで重要な成果といえる。しかし、久枝Ⅱ遺跡では周辺を調査する機会に恵まれながら水田などの生産遺構を検出することはできず、集落が具有する機能空間の特定・分析は未解決のままである。

道前平野の北部では新規の県道建設に伴う調査で旧東予市(現西条市)に所在する福成寺遺跡と旦之上遺跡を調査した(愛媛118)。両遺跡では断続的ではあるが弥生時代前期末(伊予東部Ⅱ様式)・中期前半(伊予東部Ⅱ−2〜Ⅲ様式)と後半(伊予東部Ⅳ様式)の竪穴建物、そして中期後半(伊予東部Ⅳ様式)の土壙墓群、後期後半(伊予東部Ⅴ−3・4様式)の溝などが検出された。特に旦之上遺跡1区で検出された土壙墓群は下限が伊予東部Ⅳ−3様式に比定でき、区画を持たない墓制が展開していることがわかった。被葬者階級や親族関係の特定は難しいが弥生時代中期の墓制が欠落する愛媛県においては貴重な墓制資料であり、今後、類例の蓄積が期待される。刊行された報告書では上述の遺構について様々な角度から検討が加えられ、巻末に考察として掲載されている。それぞれの考察は参考にはなるけれども、事実報告と異なる結果をベースに分析・考察している箇所が多々見受けられ、読者がその相違点を検証することができないもどかしさが残る。

道前平野南部では西条市小松町に所在する大久保遺跡大久保･竹成地区が調査された(愛媛118)。弥生時代前期末〜中期初頭(伊予東部Ⅱ様式)の袋状土坑を中心とした貯蔵穴群と溝が検出され、扁平片刃石斧などの層灰岩製大陸系磨製石器、層灰岩原石、凝灰岩製管玉、そして舶載鋳造鉄器片が出土した。特に舶載鋳造鉄器片は20点が出土し、北部九州以東ではこの時期で最多の出土量を誇る。出土した舶載鋳造鉄器片の多くは再加工品であり、利器として使用されていた。この舶載鋳造鉄器の時期は、先述したAMS−炭素14年代測定で得られた年代観では列島に鉄器が流入する上限時期に相当し、その年代観が現在議論されているところである(村上2007)。また一方では前期末〜中期初頭、つまり第Ⅱ様式の土器様式自体の時間的位置づけも再検討の必要性に迫られている。大久保遺跡や上述した阿方遺跡でも報告書中で弥生土器の型式組列を試みているが、各遺構や包含層の出土状況と比較すると厳密に成功しているとはいえない。前期末〜中期初頭の問題は単にAMS−炭素14年代測定の問題ではなく、その基準となる土器編年の時空的位置づけにも厳粛な再考を促しており、今後の大きな課題である。

今治平野では今治新都市開発に伴い、近見山南麓の丘陵部と地溝帯を挟んだ南に位置する日高丘陵で発掘調査が行われ、丘陵性集落の一部が調査されている。特に近見山南麓の同一丘陵では阿方頭王Ⅶ〜Ⅻ遺跡が調査され､丘陵裾部に形成された段状遺構や竪穴建物が検出されている(愛媛138)。それぞれの遺跡はほぼ中期後半(伊予東部Ⅳ様式)に限定でき、一つの居住領域を形成しているものとして理解できる。ただ､各遺跡の調査区は遺構の集中する箇所に限定しているため、本来は何らかの空間を構成していたはずの丘陵陵線上や谷部は調査対象外となっており、丘陵全体がどのような空間構造であったのか、それを把握する機会を失ったことは残念である。

以上のように東予地域では、2000年代に入ると各遺跡や遺構・遺物の資料的評価に重点が置かれる分析報告が目立つようになる。そうした中でも、絶えず資料は蓄積され続けており、今治平野における集落動態の検討(柴田2008a)をはじめ、石器石材供給(小野2008)や磨製石器技術論(中2008)などのように各個別資料を体系的に把握する研究が試みられる。

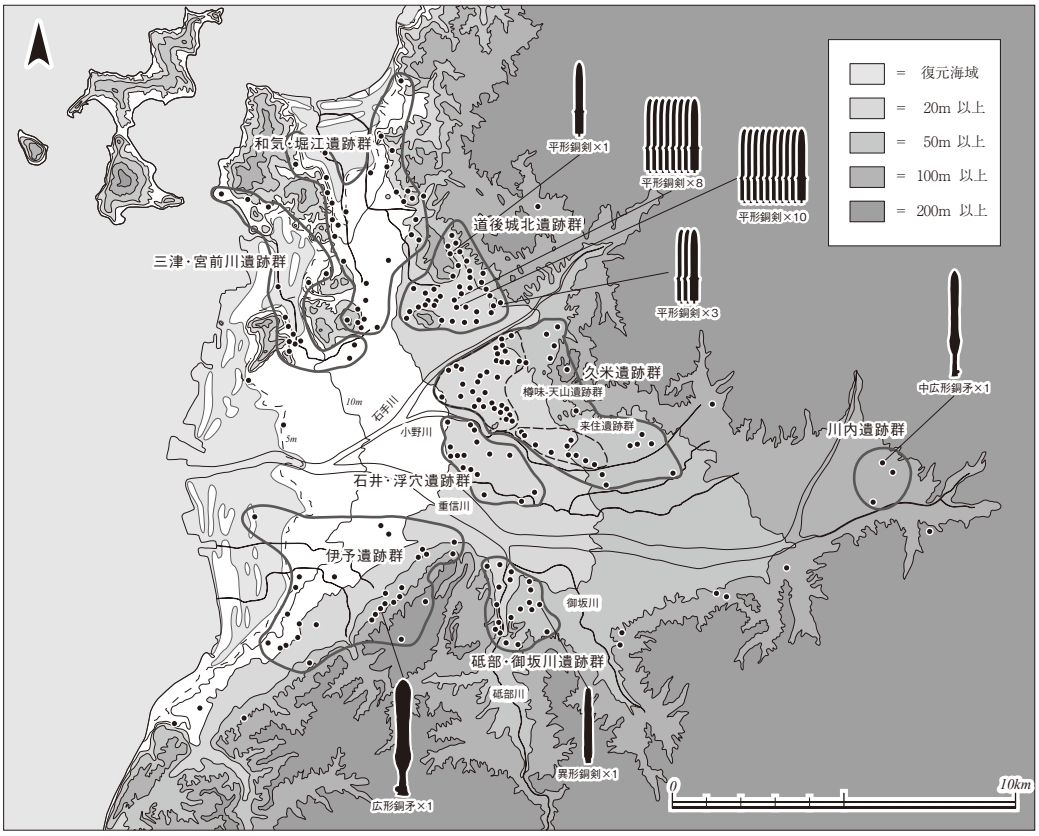
2006年には今治市朝倉下経田遺跡(未報告)において平形銅剣の埋納坑が検出された。これは、東予地域の弥生時代研究において新たな階梯へと昇華するエポックメーキングな事象として捉えることができる。

３　中予（愛媛県中部）地域

愛媛県の弥生時代研究は、中予地方なかでも松山平野の遺跡調査を中心に研究が進められてきた。松山平野は北東から流下する石手川と東から西に流下する重信川によって形成された複合扇状地性平野であり、徐々に調査遺跡が増えつつあった1990年代初頭に松山平野内の遺跡分布が整理され、下條（下條1991）によって６つの遺跡群が設定された。その後の調査によっても当時設定された遺跡群の大枠は変わることなく、それ以降増加した松山平野内の遺跡を整理した柴田（柴田2008b）によって８つの遺跡群が抽出されている。相違部分は柴田が下條のいう久米遺跡群を細分し、新たに石井・浮穴遺跡群を設定している点であり、それ以外は遺跡群の名称の違いはあるが遺跡群のまとまり自体が大きく変わるものではない。ここでは、遺跡群の名称が異なる点については前に下條、後ろに柴田の名称を示し、以下に、下條／柴田の設定した遺跡群ごとに当センターでこれまで調査された主要な遺跡をふりかえってみる。なお松山平野内で当センターが調査した遺跡は限定的で、必要に応じて他調査機関の調査遺跡も取り上げることとする。

砥部遺跡群／砥部・御坂川遺跡群

愛媛県として中予地方の埋蔵文化財発掘に関わった最初は、当センターが発足以前の1973～1977年に愛媛県教育委員会が調査した愛媛県営総合運動公園関連埋蔵文化財調査（県1979a）である。西野Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、谷田Ⅲ・Ⅳ遺跡、釈迦面山遺跡で中期後半の集落および西野Ⅱ遺跡では前期の土壙墓群を調査した。またその後も、愛媛県教育委員会で1980～1981年土壇原遺跡群（未



第２図　松山平野の弥生時代遺跡と遺跡群（柴田2008より引用）

報告）を調査し、砥部川流域に展開する弥生時代後期の集落と墓域を検出している。当センターが発足してからは1978～1980年の国道33号線関連調査（愛媛2・7）があり、拾町Ⅱ遺跡で後期後半の集落、水満田遺跡で後期後半の壺棺墓群などが調査された。これらの調査は松山平野南部の砥部周辺の大規模開発に伴うもので、松山平野の南側の砥部川、御坂川が形成した河岸段丘上に展開する遺跡群に内包される。その後も高尾田遺跡Ⅱ（愛媛28）、麻生小学校南遺跡（愛媛43）などが調査され、この地域には愛媛県および当センターが中予地方の弥生遺跡として最初期に調査した遺跡が点在しており、報告書の内容に乏しいところもあるが遺跡群として弥生時代前期から後期を通じて継続的な集落の存在が明らかにされた点は一つの成果である。一方、調査以外の研究成果として2008年に当センターと愛媛県生涯学習センターの共同企画展示で「弥生・古墳時代の土壇原遺跡群」として、約30年ぶりに土壇原遺跡の再整理と遺物の公開が実現した。これまで未公開であった弥生時代後期後半～古墳時代初頭にかけての土壇原Ⅵ遺跡の土壙墓群と土壇原Ⅻ遺跡の集落の内容が公開されたことは大きい。

道後城北遺跡群

松山平野北東部の石手川右岸に位置し、石手川右岸扇状地上から北部の丘陵の谷部に広がる。松山平野の中でも遺跡密度が高く平形銅剣が集中する地域であり、1990年代にいちはやく下條によって文京遺跡を核とする道後城北遺跡群の評価が与えられた（下條1991）。

1980年～1990年前半には、この地域で県民文化会館周辺の開発に伴う道後今市遺跡（県1985b、愛媛53）、総合社会福祉会館に伴う持田町３丁目遺跡（愛媛58）、松山第２合同庁舎に伴う若草町Ⅱ遺跡（愛媛60）といった県有施設建設に関わる比較的大規模な発掘調査が続いた。

持田町３丁目遺跡では前期中頃～末の壺棺墓、木棺墓、土壙墓が確認され、縦列配置をとる土壙墓群の配置や磨製石剣や小壺、管玉などの副葬品配置や副葬品の内容など弥生時代前期の墓の構造が具体的に明らかになった。墓に副葬されていた磨製石剣は所属時期を明らかに出来る数少ない資料であり、下條（下條1994）によって展開される有柄式磨製石剣の型式的変遷を論じる上でも重要な資料を提供した。

若草町Ⅱ遺跡では、弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居や周溝状遺構、土器が大量に出土した大溝が確認されている。残念ながら概要報告書しか刊行されておらず、遺構の性格について詳細なところは明らかでない。また、未整理の遺物も大量にあり、当該期の在地系土器と外来系土器の共伴関係や時期的な問題について検討すべき問題がたくさんあるが、資料が提示されていないため取り扱いが難しい遺跡であることは否めない。

また2000年以降には、道後周辺の都市計画道路整備に伴う土居窪遺跡２次・祝谷畑中遺跡（愛媛101）、道後町遺跡Ⅱ（愛媛121）が調査された。祝谷畑中遺跡では前期中葉～中期中葉の大溝や竪穴住居が確認され、文京遺跡出現以前に道後城北遺跡群の中でも祝谷地区で遺跡が顕在化することが明らかになった。また、道後町遺跡Ⅱと岩崎遺跡（松山市1998）は隣接する位置にあるが、岩崎遺跡では前期末～中期初頭の貯蔵穴群を囲む２条の環濠が検出され、道後町遺跡Ⅱでも貯蔵穴が同様に確認されるなど道後地区にも前期末～中期初頭の遺構が確認されるようになってきた。

一方、道後城北遺跡群については中期後葉～後期前葉の文京遺跡（愛媛大学1990・1991・2004・2005、松山市1976）の存在を抜きには語れない。道後城北遺跡群の文京遺跡はこの時期に平野内の遺跡群の中でも中核となって機能した構造が想定されている。中期後葉に突如として出現した文京遺跡は中枢区、集住区といった階層に基づいた機能配置がなされ、鉄器、鉄素材や威信材の獲得には北部九州との能動的交流が働いていた（下條2006）と考えられ、松山平野では文京遺跡の分析を中心に集落構成の分析や土器の生産と供給問題など、集落論が展開される動きにある（柴田2008、田崎2006）。

砥部遺跡群／砥部・御坂川遺跡群および道後城北遺跡群では当センターの関わる調査も比較的多く存在するが、その他の遺跡群での主な調査としては次のものがある。1990年半ば以降には道路建設や整備に伴う調査が続き、大規模なものとしては四国縦貫自動車道路建設に伴う井門Ⅰ遺跡（愛媛75）、新松山空港道路建設に伴う斎院・古照遺跡（愛媛67）、一般国道196号松山北条バイパス建設に伴う平田七反地遺跡（愛媛86）、県道湯山高縄北条線改良に伴う大相院遺跡（愛媛114）が調査された。

石井・浮穴遺跡群

下條の設定した遺跡群の空白地域で、柴田は久米遺跡群の南側の小野川と重信川に挟まれた低地部に西石井遺跡、東石井遺跡、北井門遺跡といった石井・浮穴遺跡群を設定する。当センターの調査遺跡では井門Ⅰ遺跡があり、断面形状が逆台形の細溝に土器を多数並べ入れている状況が確認された。2007年度以降、当センターが調査した北井門遺跡でも土器が多量に入れられた溝や流路を検出しており、弥生時代後期後半以降、松山平野では集落で溝や廃棄した住居内に、あるいは明確な掘り込みを持たない土器溜まりとして土器を多量に投棄する事例が多く確認されている。

和気遺跡群／和気・堀江遺跡群

松山平野北部に位置し北側が斎灘に面す。当センター調査遺跡では平田七反地遺跡があり、弥生時代終末～古墳時代初頭の溝に大量の土器を投棄した状況が確認された。松山平野内においても当該期の遺跡が徐々に確認されてきており、遺跡の立地の違いによる外来系土器の入り方が注目され再度検討すべき遺跡である。

三津遺跡群／三津・宮前川遺跡群

和気遺跡群と丘陵を挟んで南西に位置し、西側が海に開く。県埋文センターの調査遺跡では宮前川遺跡（愛媛18）、斎院・古照遺跡がある。斎院・古照遺跡では古墳時代前期の竪穴住居や壺棺墓、大量の土器を塚状に廃棄した遺構などが確認されている。出土遺物量が多く遺物全ての整理が出来ていないことは残念であるが、掲載資料からみても出土土器に占める畿内系や山陰系土器など外来系土器の比率は内陸の遺跡よりも多くみられる。宮前川遺跡、斎院・古照遺跡については、梅木が山陰系土器の分析を通して県内で山陰系土器の最多出土数を数え、海上や河川交通の利便性の良さを指摘しているように（梅木2008）、臨海部に立地する集落の性格を考慮すべきと思われる。またト骨や刻骨、骨鏃、釣針など骨角器の残りも良く、さらなる遺物の分析の必要性を感じる。

松山平野と高縄山系を挟んで北に位置する北条平野についてはまだ調査遺跡が少ないが、本センターで調査した大相院遺跡についてふれておく。大相院遺跡は弥生時代後期後半から古墳時代初頭の集落で20棟以上の竪穴住居が検出されており集落の構成や変遷が分析できる良好な遺跡である。また、土坑や自然流路に多量に投棄された弥生時代終末から古墳時代初頭期の土器や破砕された斜縁獣帯鏡、小型重圏文鏡などの遺物も注目され、この地域における中核的な集落の様相を呈している。

最後に中予における弥生時代研究史のなかで、中予地域の評価に関わる研究について主なものについてふれておく。下條によって松山平野の弥生文化が評価され西部瀬戸内地域という文化圏が設定された(下條1991)ことは大きく、その後土器研究では梅木による伊予中部地域編年(梅木2000)が提示され、弥生時代後期には複合口縁壺が西部瀬戸内地域を中心に展開することが示された。松村も弥生時代後期に中予地方で発展する大型器台について、西部瀬戸内地域に展開することを明らかにした (松村2008)。また弥生時代中期～後期の分銅形土製品についても、西部瀬戸内型(梅木2006、谷若1989)の文化圏の存在が指摘されている。中予地方の土器研究における課題として一つあえて挙げるならば、当センターが弥生時代終末～古墳時代前期にかけての重要遺跡を数多く調査しながら十分に整理および評価が出来ていないことであり、今後総体的に再整理され明らかにされることを望む。

４　南予(愛媛県南部)地域

南予の弥生時代研究については、しばらく本格的な発掘調査がなくその研究は停滞気味であった。状況が大きく変わり始めたのは1990年代以降で、南予の中でもとくに宇和盆地を有する西予市内における調査研究成果が近年めざましい。1990年代になって宇和町(現西予市)教育委員会が行った上井遺跡の発掘調査に続いて、当センターが上井遺跡(愛媛77)の発掘調査を行い、溝に廃棄された多量の弥生時代後期後半の土器の出土をみた。南予ではまとまった量の一時期の資料が調査で確認された例はそれまでになく、これが南予における弥生時代遺跡の本格調査の始まりといえる。溝に投棄された遺物は甕のほか壺や高杯、器台が目立ち、出土状況は弥生時代後期後半に中予の集落でみられる多量の土器投棄の状況と共通する。これまで南予の土器編年については採集資料などの不安定な資料によるところが大きかったが、遺構に伴う一時期の土器様相を提示することが出来、豊後や中予の土器との関わりを指摘したことは、その後の弥生後期土器研究に繋がる成果であった。

もうひとつ大きな契機となったのは1995年に愛媛大学考古学研究室が行った岩木赤坂遺跡で、以後本格的に宇和の弥生時代研究が始まったといえる。岩木赤坂遺跡では古墳の盛土中に弥生時代前期～古墳初頭までの土器を包含していた。当時資料的に恵まれない中で、宇和盆地における弥生時代前期～古墳初頭期の土器編年が形作られた(下條1999)ことはその後の南予地方の弥生研究にとっても大きい。とくに土器研究の成果として、弥生時代中期の「西南四国型甕」の提唱(柴田1998、2000)に代表されるような南予の土器文化圏の存在が示されるようになったことは大きな成果である。「西南四国型甕」は、かつて「村島式」や「岩木式」と称された四国西南部に分

布する独自の甕で、縄文時代晩期の突帯文土器にその祖形が求められる。これについて型式学的展開や時間的位置づけが検討され(岡崎1999)、土器文化が議論されるところにまで到達した(柴田2000b、下條1999)。そして、弥生時代後期の土器については、中予や豊後との関係を示す複合口縁壺や大型器台の存在が示され、また古墳初頭期における在地土器と外来系土器の入り方についても新たな成果を上げている(下條1999)。下條による編年の中で後期土器については資料的制限により間隙があったが、その後、調査による資料が充実したことにより、後期土器編年が組まれている(高木2008)。また、岩木赤坂遺跡の調査以降も、愛媛大学考古学研究室と西予市教育委員会による共同学術調査が継続的に行われている。

一方、宇和盆地以外での調査例は少ないが、当センターの調査した大洲市の底なし田Ⅱ遺跡(愛媛99)でも西南四国型甕の出土があり、その研究において基準資料と成りうる重要な資料を提示している。同じく大洲市所在の元城跡(愛媛99)では標高約120mに位置する曲輪から凹線文土器が出土している。遺構は検出されていないものの、丘陵上での遺跡の存在も推定され、南予地方への凹線文土器の到達を示していると評価できる。

宇和島市では海岸に平地が少なく、これまで弥生時代の生活遺構は確認されておらず、表採資料も丘陵尾根部に所在する拝鷹山貝塚が知られるのみであった。近年、拝鷹山貝塚(村上編2005)では本格的な発掘調査が行われ包含層から土器と石器、貝殻が出土し、丘陵頂部に所在する長松寺城跡(愛媛134)でも盛土中から土器と石器の出土をみている。両遺跡の出土土器はわずかで時期や文化系統について課題が多いが弥生時代中期～後期のものとされ、共通して石器には嘴状礫器があり、宇和海に面し入り江と半島が複雑に入り組んだ地理的な環境に規制された生業のあり方を示していると考えられる。

南予では、近年ようやく発掘調査に基づく資料が蓄積され、南予の地域色が評価されるようになってきたといえる。近年大学が調査した宇和盆地の数々の弥生遺跡については報告が待たれるところであるが、それによって今後南予の中でも宇和弥生文化の特性が明らかにされるであろう。

5　まとめ

以上、県埋文センターが歩んできた弥生時代遺跡の調査を地域と調査履歴を中心に概観した。各地域によって調査頻度に偏りが認められるものの蓄積された調査事例は着実に弥生時代研究の基礎となっていることは間違いない。ただ、一抹の不安を覚えるのは、昨今の調査や刊行された報告書に質の高低が大きくなっていることである。こうした現象は当センターが発足して30年を経過した現在、調査や報告書作成の慣習化が質的低下を招いているものと思われ、今後看過することができない大きな問題に発展する可能性がある。多岐亡羊の時であるからこそ、初心を忘れず、各遺跡の歴史的評価を堅実に行っていきたい。

(2009年3月31日)

参考文献

梅木謙一2000「伊予中部地域」『弥生土器の様式と編年－四国編－』 木耳社

梅木謙一2006「分銅形土製品からみた基盤交流圏－出土の意義と地域間交流について－」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』 日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会

梅木謙一2008「伊予の山陰系土器」『地域・文化の考古学－下條信行先生退任記念論文集－』

愛媛大学埋蔵文化財調査室1990『文京遺跡第８・９・11次調査』 愛媛大学埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

愛媛大学埋蔵文化財調査室1991『文京遺跡第10次調査』 愛媛大学埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

愛媛大学埋蔵文化財調査室2004『文京遺跡Ⅲ－文京遺跡13次調査－』 愛媛大学埋蔵文化財調査報告書Ⅻ

愛媛大学埋蔵文化財調査室2005『文京遺跡Ⅳ－文京遺跡20次・23次調査－』 愛媛大学埋蔵文化財調査報告書XⅣ

岡崎壮一1999「第Ⅴ章　1. 南予地方における西南四国型甕の一考察」『岩木赤坂遺跡』 宇和町教育委員会

小野倫良2008「今治平野出土石庖丁の石材とその産出地」『地域･文化の考古学－下條信行先生退任記念論文集－』

柴田昌児1998「第６章第３節　南予地域における弥生土器の地域色－保内町出土弥生土器を中心に－」『保内町の遺跡　遺跡詳細分布調査報告書』 愛媛県西宇和郡保内町教育委員会

柴田昌児2000a「伊予東部地域」『弥生土器の様式と編年－四国編－』 木耳社

柴田昌児2000b「四国西南部における弥生文化の成立過程－西南四国型甕の成立と背景－」『突帯文と遠賀川』 土器持寄会論文集刊行会

柴田昌児2002「瀬戸内海燧灘南岸の弥生集落その１－中期後半丘陵性集落の動態－」『環瀬戸内海の考古学』 古代吉備研究会

柴田昌児2004「高地性集落と山住みの集落」『考古資料大観10遺構編』 小学館

柴田昌児2006「中・西部瀬戸内の高地性集落と山住みの集落－特に燧灘～伊予灘・安芸灘沿岸域を中心として－」『古代文化』58（Ⅱ）

柴田昌児2007「西部瀬戸内と芸予諸島周辺域における海人集団の動態」『古墳時代の海人集団を再検討する－「海の生産用具」から20年－』 第56回埋蔵文化財研究集会発表要旨集　埋蔵文化財研究会。

柴田昌児2008a「今治平野における弥生社会の展開－その１－」『地域･文化の考古学－下條信行先生退任記念論文集－』

柴田昌児2008b「松山平野」『弥生時代の考古学８　集落からよむ弥生社会』 同成社

下條信行1991「松山平野と道後城北の弥生文化－西瀬戸内の対外交流－」『松山大学構内遺跡－第２次調査－』 松山市教育委員会

下條信行1994「瀬戸内海の有柄式磨製石剣の諸問題」「社会科学研究」第28号

下條信行1999「第Ⅴ章　6. 岩木赤坂遺跡出土の土器編年と宇和の文化」『岩木赤坂遺跡』 宇和町教育委員会

下條信行2006「瀬戸内世界の社会と交通」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』 日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会

高木邦宏2008「愛媛県南予地域における弥生時代後期の土器編年」『地域・文化の考古学－下條信行先生退任記念論文集－』

田崎博之2006「四国／瀬戸内における弥生集落－愛媛県文京遺跡の密集型大規模集落、北部九州との比較－」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』 日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会

谷若倫郎1989「分銅形土製品にみる地域相－西部瀬戸内出土品を中心として－」『花園史学』第10号

谷若倫郎2002「古墳時代後期～終末期における瀬戸内臨海集落の成立事情－来島海峡二面する糸大谷・糸山古墳群の評価をめぐって－」『四国とその周辺の考古学』 犬飼徹夫先生古稀記念論集刊行会

中　勇樹2008「弥生時代における片刃石斧の変遷と技法について－西日本を中心に－」『地域･文化の考古学－下條信行先生退任記念論文集－』

中間研志1987「松菊里型住居－我国稲作受容期における竪穴住居の研究－」『東アジアの考古と歴史』 同朋出版社

春成秀爾2006「弥生時代の年代問題」『弥生時代の新年代』 新弥生時代のはじまり第１巻、雄山閣

藤尾慎一郎2004「韓国・九州・四国の実年代」『弥生時代の実年代』 学生社
藤尾慎一郎・今村峯雄・西本豊弘2006「弥生時代の開始年代」『弥生時代の新年代』 新弥生時代のはじまり第１巻、雄山閣
松村さを里2008「西部瀬戸内における弥生時代器台の展開について－伊予地方を中心に－」『愛媛県今治市大西町妙見山１号墳－西部瀬戸内における初期前方後円墳の研究－』 愛媛大学考古学研究室
松山市教育委員会／㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1998『岩崎遺跡』
松山市教育委員会／㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1991『祝谷六丁場遺跡』
松山市教育委員会・愛媛大学1976『文京遺跡』
村上恭通編2005『拝鷹山貝塚Ⅰ－第一次・第二次調査概要報告－』 愛媛大学法文学部考古学研究室・宇和島市教育委員会
村上恭通2007『古代国家成立過程と鉄器生産』 青木書店

第４章　古墳時代

山内英樹

１　はじめに

愛媛県における古墳時代研究については、古くから墳墓研究が先行する形で、近年になり集落研究が検討され始め、ようやく両者の複合的研究が端緒についたところであると認識している。また、四国内および西日本的にみても個別研究において立ち遅れが目立つ地域でもあるが、換言すれば今後の研究次第では飛躍的に発展するフィールドでもある。

本稿では愛媛県内における古墳時代史について、当センターでの成果を中心にしながら、発掘調査、報告書、論考、普及啓発活動にテーマを分け、今後の学問的展望および諸課題について若干触れることとしたい。

２　発掘調査

⑴ 墳墓・生産遺跡

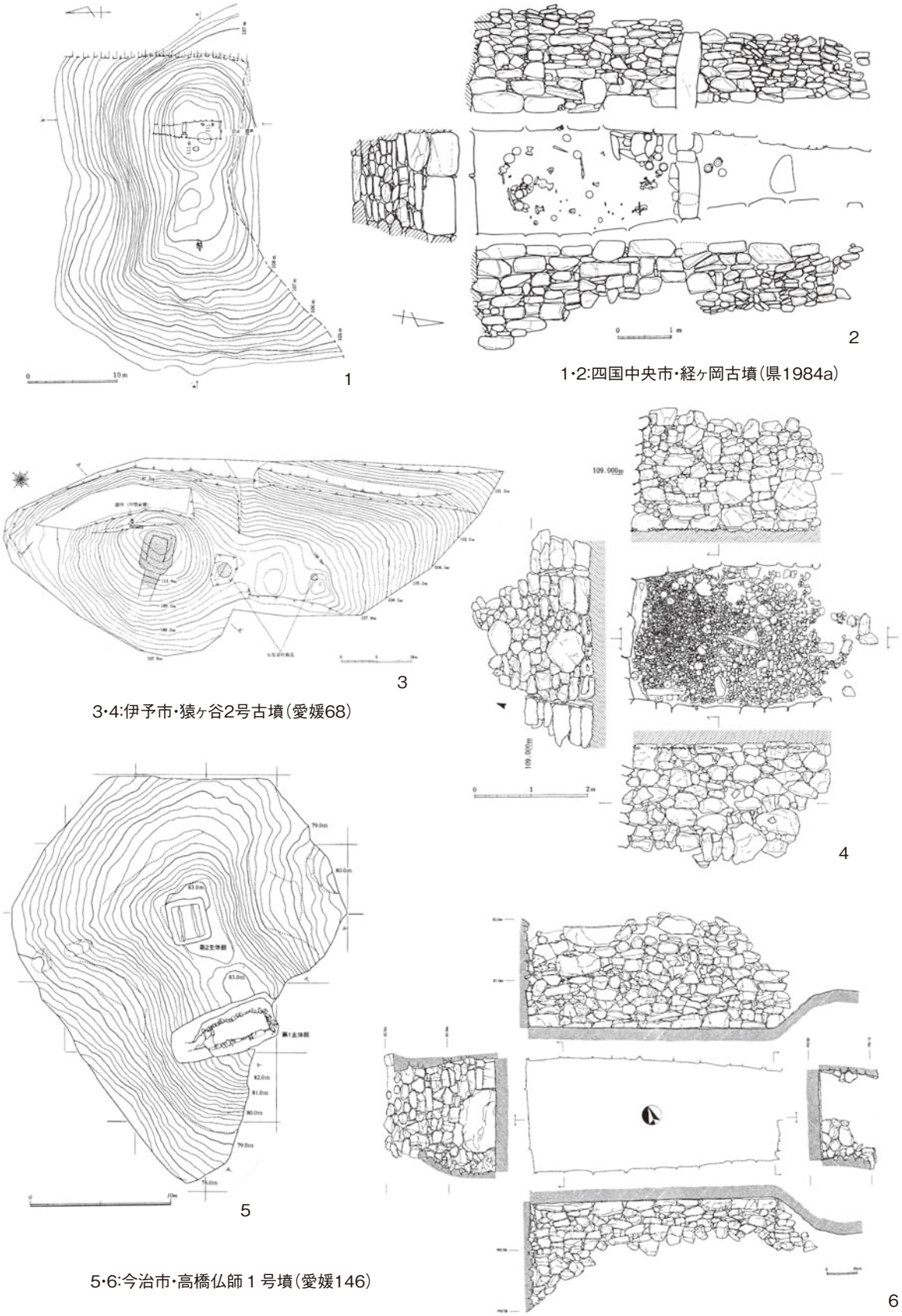
明治期には古墳内部の遺物が発見された事例が多く認められる。主なものとしては、松山市・波賀部神社古墳で石材採集中に発見された石室（横穴式石室か）および須恵器をはじめとする一連の遺物や、春宮神社の氏子が中心となって発掘を行ったことが「御陵墓記録」にも残っている、四国中央市・東宮山古墳（調査の翌年に陵墓参考地に指定）などが挙げられる。また、大正・昭和初期には新聞記事にも古墳発見の話題がのぼる場合があったようである。

戦後、愛媛県および各市町村教育委員会による古墳の発掘調査が、徐々にではあるが散見されるようになる。特に1960年代の今治市・唐子台丘陵の一連の発掘調査では、三角縁神獣鏡や銅鏃などの出土で知られる国分古墳や雉之尾古墳、さらには治平谷古墳群などが確認されている。

愛媛県教育委員会としては、昭和41年（1966）に今治市・相の谷１号墳の緊急発掘が実施され、県内最大の前方後円墳であることが明らかになった（県1966・1967）。また、愛媛県総合運動公園および動物園建設や住宅建設に伴う砥部地域の大規模発掘調査により、多くの古墳群（土壇原古墳群・大下田古墳群など）が発掘調査の対象となり、古墳時代後期から終末期の墳墓の具体相が明らかになった（県1969・1982a）。また、一連の谷田遺跡群の調査では、須恵器・埴輪併焼窯や工房などが確認され、墳墓と集落を繋ぐ生産遺跡の様相も明らかになった（県1982b）。

当センターの設立以降、1970～80年代は、先述した砥部地域における一連の発掘調査（城ノ向古墳群・大下田南古墳群・土壇原古墳群など）を引き続き実施し、更なる墳墓資料の蓄積があった（愛媛1・12）。

さらに、この頃から四国横断自動車道の建設に伴い、これまで本格的な発掘調査の少なかった東予地域で、新規の古墳調査が相次いだことは注目されよう。特に、四国最大級の終末期古墳である向山古墳に代表される四国中央市（旧川之江市・伊予三島市・土居町）では、経ヶ岡古墳や



第１図　愛媛県内の後期前方後円墳

(縮尺任意)

四ッ手山古墳(県1984a)、さらには東塚穴窪古墳群の調査が実施され(愛媛30)、数多くの成果を収めている。特に経ヶ岡古墳では、古墳時代後期の中規模前方後円墳を全面調査できる機会に恵まれ、墳丘規模や埋葬主体である横穴式石室の様相、さらには副葬品として「ｆ」字形鏡板付轡などに代表される金銅装馬具や胡籙(ころく)など、豊富かつ上位階層(地域首長)の存在を窺わせる遺物が出土している。東予地域では首長墳の具体像を知ることのできる、最初の本格的な発掘調査と評価出来よう。

中予地域では、北条地域でゴルフ場建設に伴う小山田古墳群の調査が挙げられよう(愛媛35)。丘陵上に展開した古墳時代中期～後期を中心とした墓域(横穴式石室・箱式石棺)が明らかとなり、特に箱式石棺では人骨の遺存が良好で、貴重な事例として注目されよう。また松山市域では、完形鏡を副葬品として持つ前期古墳である朝日谷２号墳のほかに(松山市教委・市埋文1998)、砥部地域での水満田古墳群(愛媛27)、伊予市・上三谷古墳群の調査があり(愛媛21・29)、過去の調査事例とあわせて、松山平野南部の後期首長墓の展開を把握する糸口を掴んだともいえよう。

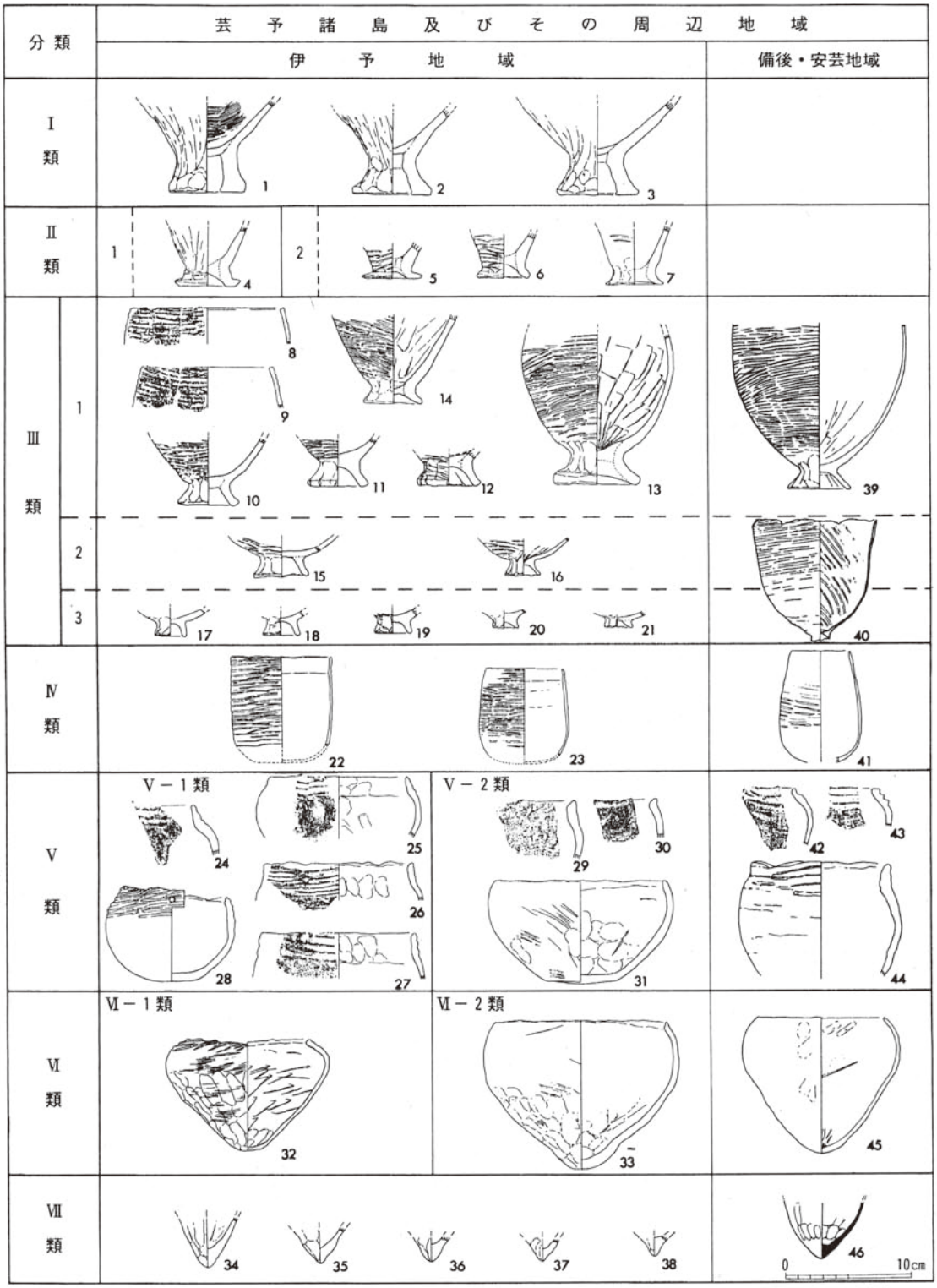
90年代に入ると、松山市では葉佐池古墳での未盗掘の石室発見など(松山市教委2003)、開発事業の増加に伴い墳墓調査もその数を増す。四国縦貫自動車道も中・南予が中心となり、松山平野南部の丘陵部に展開する古墳調査が幾つか見られるようになる。その代表格として伊予市・猿ヶ谷2号墳が挙げられよう(愛媛68)。経ヶ岡古墳と共通する金銅装馬具をはじめとした豊富な副葬品は、先述した松山平野南部の首長墓展開を考える上で、大変貴重な調査成果である。また、墳丘封土より出土の陶質土器は、同時期の在地生産品とされる「市場南組窯系須恵器」と共に、松山平野の特異性を示す大きな発見でもあった。

砥部地域では他に、えひめこどもの城建設に伴う調査で、新たに須恵器・埴輪の併焼窯が確認され(西野春日谷窯跡)、古墳時代後期における一大生産地であることを改めて証明した貴重な成果である(愛媛72)。

東予地域における90年代も、今治市(旧大西町)での愛媛大学考古学研究室を中心とした妙見山１号墳の一連の発掘調査をはじめ(今治市教委ほか2008)、数多くの墳墓調査がみられた。今治道路の発掘調査では、古墳時代中期の所産とされる長沢１号墳や二の谷２号墳、後期の群集墳である旦古墳群がみられる。特に竪穴系の石室構造である長沢１号墳と、造出し付き円墳である二の谷２号墳は、これまで県内では希薄とされていた同時期の墳墓様相について新知見を提供しており、朝倉地域に展開する同時期の中型円墳(樹之本古墳・根上がり松古墳)との関連性も注目されよう(愛媛87)。また、島嶼部では今治市(旧大三島町)・多々羅遺跡で、製塩炉の発見があった。県内での具体的な製塩炉の発見は初見であり、瀬戸内海における塩生産を考える上では欠くことのできない遺跡である(愛媛52)。

道前平野でも同様に、今治小松自動車道の建設に伴い、大規模な発掘調査が行われている。西条市(旧小松町)・大久保１号墳は、中山川の河岸段丘上に立地し、平地部に展開する初期前方後円墳として注目される(愛媛94)。北井門遺跡の前方後方墳や、若草町遺跡２次調査での大型円形周溝などとともに(愛媛60)、平地部の前期古墳立地を再検討する契機ともなった。

2000年代に入り、開発行為自体の減少で発掘調査も併行して減少傾向にある中、県内では史跡



1～3：椋ノ原清水遺跡　4：亀ヶ浦1遺跡包含層　8～12・17～21・24～27・29・30・34～38：多々羅遺跡
5～7：亀ヶ浦Ⅰ遺跡ＳＩ－04　13：松木遺跡包含層　14：亀ヶ浦Ⅰ遺跡ＰＯ９ベルト　15：火内Ⅰ遺跡ＳＸ－02
16：火内Ⅰ遺跡包含層（Ⅲ層）　22：火内Ⅰ遺跡包含層　23：火内Ⅰ遺跡ＳＩ－03　28：糸山遺跡
31：糸大谷遺跡ＳＤ－02　32：岩ヶ峯古墳　33：糸大谷遺跡ＳＤ－02上層　39・41～45：満越遺跡
40：大浜広畠遺跡　46：小馬取遺跡

第２図　芸予諸島および周辺地域の製塩土器分類・編年（愛媛52）

整備を目指した古墳調査が実施されるようになる。特に調査事例の少なかった南予地域では、西予市(旧宇和町)の一連の調査(笠置峠古墳・岩木赤坂古墳・河内奥ナルタキ古墳群など)に代表されるように、地道な成果が蓄積されている。

今治市域では、今治新都市開発に伴う大規模な発掘調査が、当センターと今治市教育委員会で実施され、これまで不明瞭であった今治平野北部の墳墓展開が明らかになった。特に前期古墳では、破鏡(高橋仏師４号墳)や完形鏡(別名一本松古墳)、さらには豊富な鉄製品の副葬(高橋仏師１号墳・主体部２)、中期古墳では石製模造品を所有する墳墓の存在(高地栗谷４号墳)、そして後期古墳には小～中型前方後円墳(高地栗谷１号墳・高橋仏師１号墳)や群集墳の展開など、その調査成果は多岐にわたる(愛媛130・146)。

⑵集落遺跡

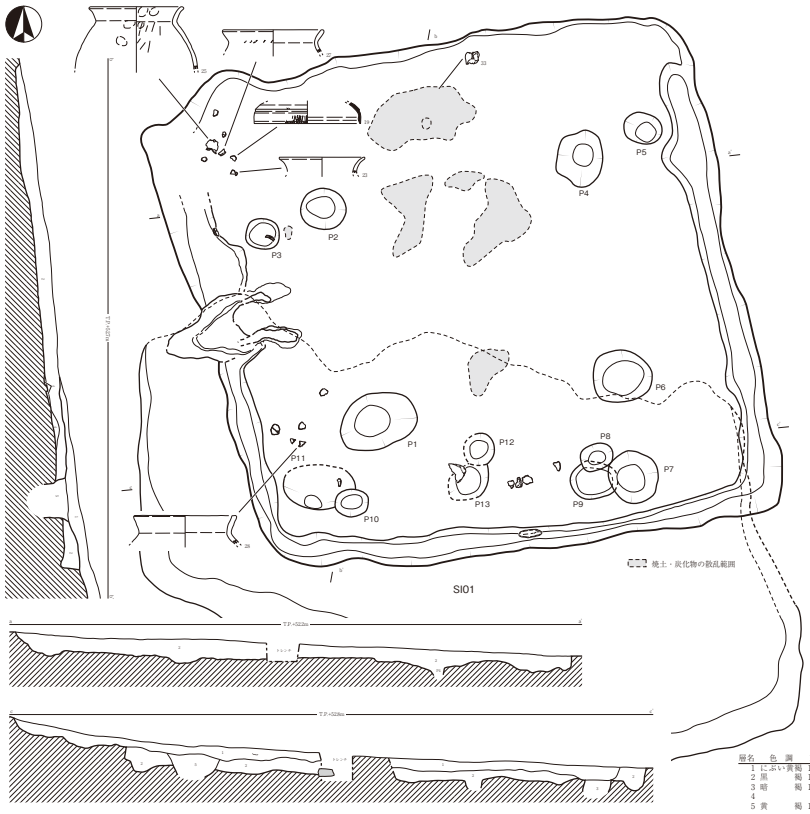
墳墓の調査に遅れて、道路建設や住宅開発の増加が著しい80年代あたりから、古墳時代の集落遺跡の調査が目立つようになる。特に初期は、開発が集中する松山市域での調査事例が多い。宮前川遺跡では古墳時代初頭の集落遺跡が確認されており、在地の土器に加え、他地域からの搬入土器が多く、当時の流通やその後の土器研究に与えた影響は大きい(愛媛18)。

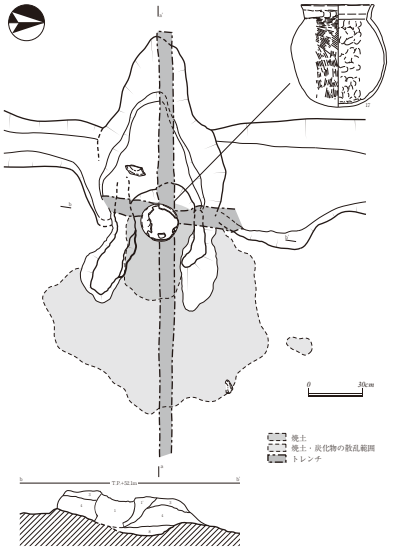
90年代に入り、松山平野でも幾つかのエリアで集落の密集が認められるようになり、竪穴住居の調査事例が飛躍的に増加する。樽味地域や久米地域では、古墳時代中・後期の造り付けカマドを有する竪穴住居が多く確認されるが、石井地域でも松山インター建設に伴う北井門遺跡の大規模発掘により、同時期の集落が密集して展開することがわかった。住居内からは陶質土器や「市場南組窯系須恵器」などの出土が目立ち、中核的な集落であったことが窺える好資料である。

東予地域では、90年代から2000年代にかけて、今治市域での調査事例が目立つ。松木広田遺跡では、古墳時代初頭から前期にかけての遺構・遺物が認められ、特に鍛冶作業を示す事例は、同時期の鉄器生産を示す貴重な発見であった(今治市教委2002a)。また、今治新都市関連の調査でも古墳時代全般にわたる竪穴住居が確認されており、狭小な谷奥に展開する高地スゴ谷Ⅰ遺跡や(愛媛130)、高橋地区一帯に広がる遺跡群で(高橋山崎・湯ノ窪・徳蔵寺遺跡など)、集中的な集落の展開が明らかになった(今治市教委2002b・2004・2005)。さらに、矢田大坪遺跡では、古墳時代後期の住居内より鉄鉗が出土し、鉄器製作(または関連作業)を示す直接的な資料として注目されるところである(愛媛142)。

今治平野周辺部では、まず朝倉地域が注目される。古くは朝倉南甲遺跡で古墳時代初頭の竪穴住居が検出され、弥生時代より継続的な集落経営の在り方を示す資料として注目されてきたが(愛媛17)、近年、今治道路の建設に伴う発掘調査で、古墳時代後期の竪穴住居群が確認されており(朝倉下・下経田遺跡)、周囲に展開する後期群集墳との関係が注目される。また、海浜部では、糸大谷遺跡で古墳時代後期～終末期の竪穴住居や墳墓などの遺構や、製塩土器や各種漁撈具の出土がみられ、同時期における「臨海集落」の様子が浮かび上がっている(愛媛63)。

道前平野では、西条市(旧東予市)での道路建設に伴う発掘調査において、古墳時代後期の集落群が明らかになった。特に長網遺跡群や旦之上遺跡群では、遺存状態の良好な造り付けカマドが検出されており、東予地区の集落研究を活性化させた意義は大きい(愛媛119・140)。

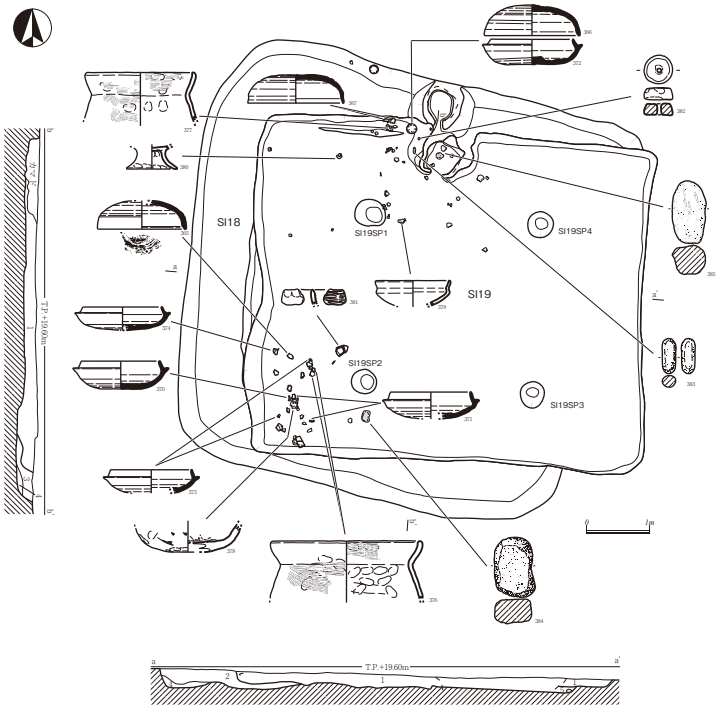


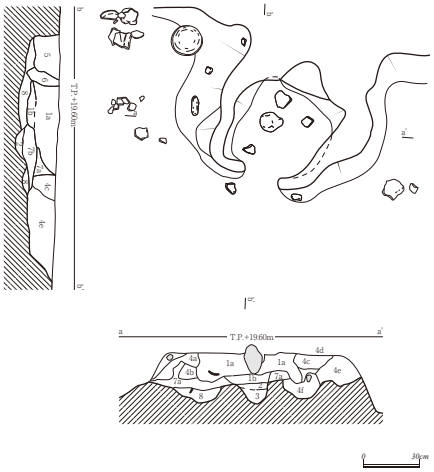


層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	にぶい黄褐	10YR4/3	礫混じり細砂	弱	疎	
2	黄褐	2.5YR5/3	大礫混じり粗砂	弱	疎	長石を多く含む
3	灰褐	5YR4/2	細砂	弱	密	焼土が多量に、炭化物が少量混じる
4	黄褐	5YR5/3	細砂	中	密	炭化物が混じる
5	黄褐	2.5Y5/4	礫混じり細砂	弱	密	炭化物が混じる(撹乱埋土)
6	灰黄褐	10YR5/2	細礫混じり細砂	弱	密	
7	明赤褐	2.5YR5/6	細砂	弱	密	焼土層。火床
8	灰黄褐	10YR4/2	礫混じり細砂	弱	密	黒褐色土が斑状に混じる。周壁溝埋土

層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	にぶい黄褐	10YR4/3	小礫混じり細砂	弱	極密	黄褐色土(地山土)ブロック・小礫・炭化物が混じる。SI01埋土
2	黒褐	10YR3/2	小礫混じり細砂	弱	極密	黄褐色土(地山土)ブロック・小礫・炭化物が混じる。SI02埋土
3	暗褐	10YR3/4	細礫混じり細砂	なし	極密	SI02埋土
4		焼土				SI02埋土
5	黄褐	10YR5/6	小礫混じり細砂	弱	密	礫を多量に含む。黄褐色土(地山土)ブロックが混じる。SP58埋土

・高地スゴ谷Ⅰ遺跡・SI02(愛媛130)





層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1a	暗赤褐	5YR3/2	細砂	弱	密	灰層
1b	暗褐	7.5Y3/4	細砂	なし	極密	灰層
2	にぶい赤褐	5YR4/3	細砂	なし	密	
3	暗褐	7.5YR3/4	細砂	弱	密	
4a	にぶい褐	7.5YR5/4	細砂	なし	極密	しまりが強い
4b	褐	7.5YR4/3	細砂	なし	極密	
4c	褐	7.5YR4/3	細砂	なし	密	焼土を含まない
4d	褐	7.5YR4/3	細砂	なし	極密	4cより暗色
4e	褐	7.5YR4/3	細砂	なし	極密	4cより赤色
4f	褐	7.5YR4/3	細砂	なし	極密	4dより黄味強い
5	暗褐	7.5YR3/4	細砂	弱	極密	
6	褐	7.5YR4/3	粗砂混じり細砂	なし	密	
7a	暗赤褐	5YR3/6	細砂	弱	密	焼土を多く含む
7b	暗褐	7.5YR3/4	細砂	なし	密	焼土を多く含む
8	褐	7.5YR4/3	細砂	なし	密	

層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
1	にぶい黄褐	10YR4/3	細砂	弱	極密	SI19埋土、黄褐色・黒褐色土等のブロック状混入多数
2	暗褐	10YR3/3	粗砂混じり細砂	なし	密	SI18埋土
3	黒褐	10YR2/3	細砂	なし	密	SI18埋土
4	にぶい黄褐	10YR4/3	細砂	なし	密	SI18埋土
5	にぶい黄褐	10YR5/4	細砂	なし	密	SI18埋土

・長網Ⅰ遺跡２次・SI18・19(愛媛140)

第３図　竪穴住居(建物)の調査事例

(縮尺任意)

３　報告書

これまで、愛媛県教育委員会や松山市、今治市をはじめとする各市町村で、古墳時代関係の発掘調査報告書が多く刊行されてきたが、初期の報告書では墳墓の報告が圧倒的に多く、集落については発掘調査の盛んになる80～90年代に増加する傾向がある。ここ10年を例にとると、愛媛大学考古学研究室・今治市教育委員会の『妙見山１号墳』や松山市埋蔵文化財センターの『朝日谷２号墳』や後期古墳・集落の一連の報告書などが挙げられよう。当センターでは県道および高速道路関連、さらに公団による大規模開発に伴い、注目される報告書が刊行されている。以下に幾つか紹介しておきたい。

『大久保遺跡・大久保１号墳』では、調査時に確認された葺石の転落状況や、二重口縁壺の出土状況、さらに墳丘の築造企画（前方部短小・撥形）や前方部の陸橋の存在などを詳細に分析し、大和地方にその端緒があるとされる「纏向型前方後円墳」の波及形態と論じている（愛媛94）。その点的な波及については、今後さらに地域内で議論される必要があるが、愛媛県における出現期古墳を考える上では必要不可欠な報告である。

西条市（旧東予市）・長網遺跡を分析した２つの報告書では、道前平野北部の後期集落群について、各住居の説明に加え、住居の構造分析を各属性に分けて説明し、小グループごとの特性と居住空間の在り方を考察している（愛媛118・140）。また、一般集落における小鍛冶の様相を、住居内出土の鉄滓などの重量分析を通して抽出しようと試みている。限られた調査範囲での論考だけに、種々の資料的制約はあるものの、分析の方向性は、今後の東予地域における集落研究に大きく寄与しているものと評価したい。

『多々羅製塩遺跡』は、これまで備讃瀬戸地域で先行的に研究が進んでいた製塩土器研究を、西部瀬戸内で飛躍的に発展させる報告となった（愛媛52）。製塩土器の製作手法や形態的特徴を分類し、共伴遺物との組み合わせなどを参考に、当地域の製塩土器編年を確立した。さらに画期となる社会的背景や他地域への搬入など、西日本レベルで愛媛県の製塩土器研究が語ることのできる契機となった。同じく海浜部に所在する『糸大谷遺跡』とともに、集落内での出土状況と併せて再読したい報告書である。

今治新都市関連では、『別名一本松古墳ほか』の報告書を挙げておきたい（愛媛146）。これまで同平野では、前期古墳をはじめとした論考は幾つかみられたが、具体的な調査成果に基づく通史的検討は希薄であったため、本報告書では、まとめとして今治平野複数年にわたる大規模調査の成果をもとに、今治平野北西部の古墳時代史を丘陵上に展開する墳墓の展開から捉えようと試みている。周辺での集落遺跡の調査成果を待って、さらに複合的な地域像を描く必要があろうが、個別具体的な成果を通史として還元する必要性を提示した労作といえよう。

４　論考

各種研究会や学会などで、愛媛県内を対象とした発表や諸論考が紹介されている。また、在野の研究者で組織する遺跡刊行会では、『遺跡』を継続的に刊行し、古墳時代関連の特集も多い。さらに、地方誌としては日本有数の歴史がある『伊予史談』でも、県内資料の紹介が多く掲載さ

れており、黎明期の伊予古墳研究を大きく支えるものであった。

愛媛県内の古墳時代を対象とした論考は、通史的な研究と個別の遺物研究がみられ、前者では古墳時代首長墳や前期古墳・後期古墳の系譜・系統を捉える試みであり、後者は埋葬施設・副葬品を対象としたものである。[(1)]

当センターでは、平成12年(2000)より『紀要愛媛』を刊行しており、職員の研鑽および県内資料の再評価を含めた論考発表の場を設けている。古墳時代関連の報告は決して多くないが、注目すべき論考を幾つか紹介したい。

岡田敏彦「愛媛県における首長墳素描」では、これまで県内で「首長墳」と呼称されてきた墳墓資料について、律令期の伊予国(郡・郷)の単位に当てはめ、各小地域の「首長墳」展開を説明しようとした論考である(岡田2001)。近年調査された今治平野などの墳墓資料を含め、さらに具体的な検討が期待されるが、県内を総合的に概観したことは評価されよう。

山内英樹「伊予の埴輪編年」では、これまで一貫して取り組んできた県内埴輪の基礎的研究を基に、埴輪資料の型式学的研究を行い、編年資料としての埴輪研究へ昇華させたものである(山内2008)。資料数の少ない時期もあり、今後更に他地域との比較検討の必要があるものの、個別資料から伊予の古墳時代像に迫ろうという可能性を提示した論考であろう。

小笠原啓二・山内英樹「須恵器に残る痕跡について－坏蓋口縁端部の『刻目状圧痕』の観察－」は、古墳時代の発掘調査や整理作業で目に留まった痕跡について、県内での集成作業や製作工程の復元を行う中で、その痕跡が残る理由について検討した論考である(小笠原・山内2005)。整理作業での遺物観察視点や、地道な資料蓄積の必要性を問うたものとも言えよう。

5　普及啓発活動

発掘調査および、それに基づく成果などを還元するため、近年は県内各地で速報展示や現地説明会などの催しが開催されている。古墳時代、とりわけ墳墓の調査は一般の方々の注目度が高く、出土品や埋葬施設などに興味・関心が集まる傾向がある。

当センターでは、県内各地の調査を担当するというメリットを生かし、おもに東・中予の公民館や資料館での講座への講師派遣をはじめ、現地説明会では多くの方々の参加を頂いている。また、発掘現場周辺の小・中学生による発掘体験や、各資料館・教育委員会との共催で特別展示や遺物展示会を行っている。

ここで古墳時代関連の注目される事例を紹介しておきたい。愛媛県生涯学習センターとの共同企画展示『弥生・古墳時代の土壇原遺跡群－生涯学習センター付近で見つかった墳墓と副葬品－』は、発掘調査がなされているにも関わらず詳細な報告がなされなかった同遺跡について、はじめてその全体像を公開する機会であった(2008年実施)。特に古墳時代全般の墳墓様相や県内唯一の埴輪棺をはじめとする特殊な遺構・遺物は、同古墳群の特異性を一層際立たせるものとして、数十年経過して改めて評価された意義ある展示であったと思われる。

センターの企画展『時代のものさし－古墳時代－』では(2007年実施)、愛媛の古墳時代を小・中学生にも理解できるように、展示方法や模型などを用いながら紹介する試みを行った。課題点

も多いものの、どのような視点で展示を行うべきかを考える良い機会であった。

6　今後に向けて　－学問的展望と諸課題－

以上、当センターでの成果を中心に、愛媛県の古墳時代を振り返ってみた。当然のことながら、各市町や愛媛大学・愛媛県歴史文化博物館をはじめとする研究機関、さらには地元の郷土史会・研究者の長年の努力があって、はじめて現在の到達点があるものと再認識させられる。しかし、他の時代研究と同様、愛媛県の古墳時代研究にも課題が山積しているのが現状でもあろう。そこで最後に、今後の学問的展望および課題への取り組みについて列記したい。

愛媛県の古墳時代、とりわけ墳墓については、『遺跡』での集成作業でも明らかなように、他県と比較しても一定量存在する。しかし、その調査自体は簡単な石室(埋葬主体)図面と地形測量図のみの作成で終了することが多く、墳丘の構築過程や墳裾などの情報が欠落する場合が少なくない。行政の発掘調査で時間的制約もあるが、当センターも含め、明確な目的意識を持った発掘調査を心掛ける必要があろう。必要な情報が「存在しない」のではなく、「見落としている」可能性の方が強いと筆者は考える。

また、古墳時代の調査では、集落遺跡を除き新規古墳を調査する機会には恵まれない場合が多い。しかし、これまでに蓄積された調査資料を再検討すれば、明らかになる情報もまた少なくない。過去の調査をただ批判するのではなく、それを「生かす」努力が必要である。つまり資料再検討の必要性を強調しておきたい。一例としては、県内最大の前方後円墳である今治市・相の谷１号墳の再評価(冨田ほか2008)のように、地道ではあるが着実な成果の積み重ねが、長期的な視点に立てば大切である。調査関係者は肝に銘じておく必要があろう。

さらに愛媛県の古墳時代研究では、冒頭でも触れたように集落研究が大きく立ち後れている。墳墓資料は、古墳時代社会のごく一部を表しているに過ぎないため、同時期の生活・社会を把握するには、集落の構造や群単位の把握などの諸情報が必要である。また、そのための編年基準である土器研究、特に須恵器出現以前の古式土師器の編年研究は、時期決定の曖昧になりがちな古墳時代前半期を検討する上では急務といえよう。

このように概観しても、課題が山積していることは明らかである。今こそ原点に立ち返り、一つの遺構・遺物に対し真摯に向かい合い、厚みのある時代研究を蓄積することが肝要であろう。県内研究者の一人として、筆者も今後、伊予の古墳時代研究に光を当てる試みを続けてゆきたい。

(2009年3月30日)

註

(1)　近年報告された主なものとしては、前者に、前方後円墳の分析からその展開や地域的特質を論じた長井数秋(長井1998)・村上恭通(村上2003)・冨田尚夫(2000)、出現期古墳について論じた柴田昌児(柴田2006)、松山平野南部の後期首長墓の系譜関係を考察した冨田(冨田2003)、後者では横穴式石室の集成および各平野の構造的特徴を紹介した栗田茂敏(栗田1992)、「市場南組窯系須恵器」の分析を試みた山之内志郎(山之内2004)や三吉秀充(三吉2003)などの諸論考を挙げておきたい。

参考文献（報告書は紙幅の都合上割愛させていただいた。）

今治市教育委員会2002a『高橋湯ノ窪遺跡－第３次調査－』
今治市教育委員会2002b『松木広田遺跡（松木遺跡群）Ⅰ』
今治市教育委員会2004『高橋山崎遺跡Ⅰ－第１～８調査区－』
今治市教育委員会2005『高橋徳蔵寺遺跡Ⅰ－第１～４調査区－』
今治市教育委員会・愛媛大学考古学研究室2008『愛媛県今治市大西町・妙見山１号墳』
岡田敏彦2001「愛媛県における首長墳素描」『紀要愛媛』 第２号、㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
小笠原啓二・山内英樹2005「須恵器に残る痕跡について－坏蓋口縁端部の『刻目状圧痕』 の観察－」『紀要愛媛』 第5号、㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
栗田茂敏1992「愛媛県」『四国における横穴式石室の展開』 古代学協会四国支部第４回シンポジウム
柴田昌児2006「伊予における出現期古墳の様相」『地域社会と考古学－四国・瀬戸内－』 日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会
冨田尚夫2000「愛媛県における前方後円墳」『前方後円墳を考える』 古代学研究会四国支部第14回大会
冨田尚夫2003「松山平野南部における古墳時代後期首長墓の系譜」『研究紀要』 第８号、愛媛県歴史文化博物館
冨田尚夫ほか2008『今治市相の谷１号墳出土遺物』 愛媛県歴史文化博物館
長井数秋1998「愛媛県内の前方後円（方）墳集成」『伊豫史談』311、伊豫史談会
松山市教育委員会2003『愛媛県松山市・葉佐池古墳』
松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1998『朝日谷２号墳』
三吉秀充2003「伊予出土陶質土器に関する基礎的研究」『古文化談叢』 第49集、古文化研究会
村上恭通2003「四国西部における前方後円墳の展開」『前方後円墳築造周縁地域における古墳時代社会の多様性』 第６回九州前方後円墳研究会
山内英樹2008「伊予の埴輪編年」『紀要愛媛』 第８号、㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
山之内志郎2004「愛媛県内出土の渡来系遺物－出作・市場南組窯型須恵器の型式分類と分布－」『東山古墳群 Ⅱ－３次調査・６次調査－』 、㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第５章　古　　代

中野良一

１　はじめに

古代の遺跡は年々増加しているが、年代推定の根拠となりうる土器について、その多くは複合的に形成された遺跡から他の時代の遺物に混在して出土することにより、古代の生活があったと推定できる程度の遺跡が多いのが実情であり、決して古代単独の遺跡数が多いわけではない。しかし、そのなかにあって古代の検証を行うのに極めて重要な資料を提供している遺跡がある。ここではこれらの遺跡から明らかにできた伊予の古代の様相について、いくつかの項目に分けて概観し成果をまとめる。

２　土器研究について

前時代の土器種に比べてさらに多くの種類の土器が出土するのも古代を通じての特徴である。特に後半期は豊富な搬入品に代表され、それらを軸にした年代基準の作成が行われている。しかし、前半に限ってみれば遺跡の数が少ない影響もあり、年代基準は定まってはいない。

いつから古代と区分するのか明確な解答を持たないが、少なくとも7世紀の集落遺跡については、初頭の遺跡は比較的多く認められるが、半ばから後半にかけての遺跡は極めて少ないといえる。すなわち、多くの集落は初頭頃で一旦廃絶する傾向にあり、次に出現するのは7世紀後半頃となっている。7世紀の半ばに突然人間がいなくなったはずもなく、それは何らかの強制的要因に絡む集落移動の結果であると考えられるが、このような状況については、律令期に向けて集落の再編成が行われた結果であると推測すると同時に、この時期の土器編年の不確立も要因の一つと指摘されている（山内2005）。以上のことから県内においては、現時点では概ね7世紀第４四半期以降の時期を対象とするのが資料的には妥当であろう。

土器編年については基準となる供膳形態の生産遺跡の調査事例として、8世紀の尾土居窯跡（愛媛44）や市場南組窯跡（愛媛82）、通谷池第４号窯跡や千足第１号窯跡（砥部町）なども調査が行われている。また、小田川流域（松山市）でも窯跡が検出されているが、この時期の基準となる編年は平城宮の編年などを援用しているのが実情である。8世紀の赤色塗彩土師器や多角形の脚部を有する高杯などの出土もみられるが、9世紀前半までの編年は確立していない。一方、生産遺跡の一つの瓦窯の調査としては、8世紀前半と推定されている県指定史跡のかわらがはな窯跡と、同じ丘陵斜面の上位に構築されていた３基の窯跡がある（愛媛89）。高速道路工事中に発見された窯であり大半は破壊されていたが、窯体から検出した炭化材の放射性炭素年代測定の結果は7世紀後半を指し、熱残留磁気法による測定でも7世紀後半の年代を示している。出土した重弧文軒平瓦は特に今治の国分寺供給瓦と成形技法や形態が類似しており、胎土分析の結果でも同じグループ内にあることが判明した。かわらがはな窯跡で検出されている18基の窯は、少なくとも7世紀

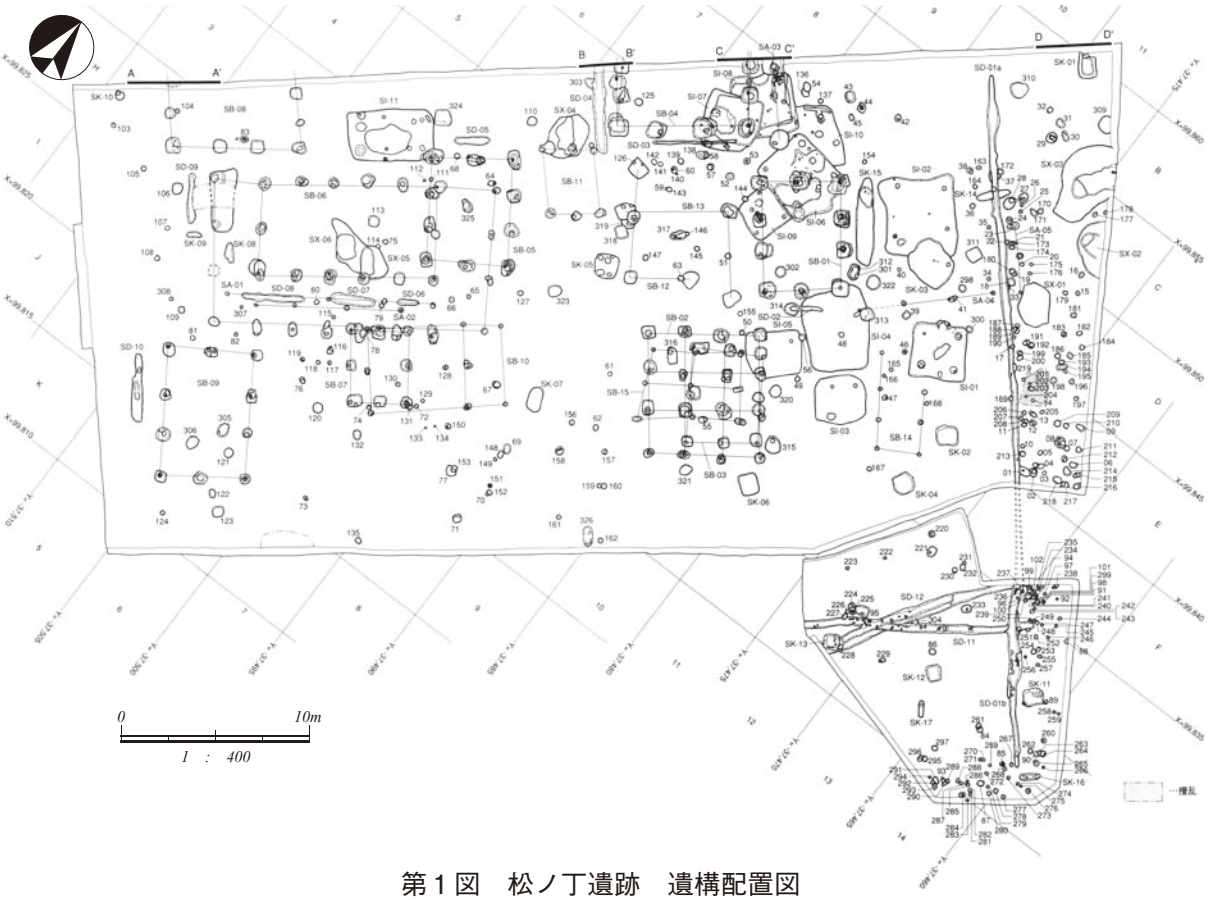
後半から8世紀前半までの操業期間が想定できることが明らかになった。

古代後期の9世紀以降の土器編年は、共伴する搬入土器から年代を推定することができる。それは畿内産黒色土器や緑釉・灰釉などの施釉陶器、京都篠窯の須恵器(特に鉢)、出土量は少ないが越州窯の青磁などである。また、須恵器では杯や皿類が多くなるが、ほぼ10世紀初頭には消滅する傾向にある。これらを多く出土する遺跡としては、松山平野では岩崎遺跡・樽味四反地遺跡(松山市)などに比較的多くの緑釉陶器がみられ、今治平野では糸大谷遺跡(愛媛63)、阿方春岡遺跡(愛媛88)、別名端谷Ⅰ遺跡・別名寺谷Ⅰ遺跡(愛媛139)、八町1号遺跡・四村額ケ内遺跡(今治市)などがあり、道前平野では幸の木遺跡(愛媛102)が挙げられる。特に糸大谷・八町1号遺跡では緑釉陶器が多く、阿方春岡遺跡では緑釉陶器より灰釉陶器が多く出土しており、極めて特異な状況である。緑釉陶器は9世紀後半から10世紀初頭頃の京都産が大半を占め、次に近江産、僅かに東濃産がみられる。明確に周防・長門産と判断できるものは出土していない。灰釉陶器は9世紀後半の黒笹90号窯のものが最も多く、次に10世紀の折戸53号窯、僅かに黒笹14号窯のものもみられる。緑釉・灰釉ともに9世紀後半から10世紀初頭に搬入のピークがあることが明らかである。同時に搬入されたものとして黒色土器がある。内面黒色のA類と内外面とも黒色処理を施すB類があり、出土するのは圧倒的にA類の椀が多いが、畿内生産と断定できる薄手で丁寧な磨きを施した椀は少なく、むしろ厚く磨きも粗雑で胎土も異なった製品が多い。このことから黒色土器椀の生産がすでに在地で行われていたことを指していると考えられ、搬入品に限られている緑釉・灰釉とは全く違った使われ方が想定でき、黒色土器の生産体制としては、在地の土師器工人を再編して製作にあたらせた可能性が考えられる。また、黒色処理を施さない在地土師器椀は10世紀の段階から出土してくるが、主流はA類椀で松山平野では12世紀半ばには土師器椀が主流となるが、今治平野や道前平野では13世紀初頭までA類椀がみられる。ここに国衙を背景とした今治平野における土器生産体制の保守的性格が読み取れる。土師器杯については10世紀前後から円盤高台をもつ器種が出現し主流となる。

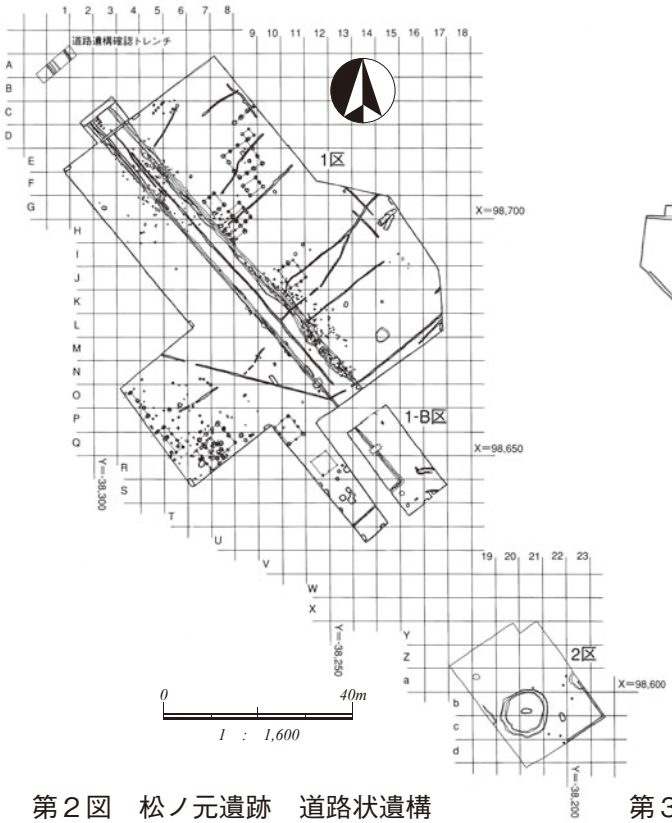
以上のように相対的な土器編年については、古代前期の様相をまとめた業績はほとんど見当たらない。一方、後期については様相の把握はかなり進んでいるが、系統性の精査など課題は残されているといえる。

3　建物遺構と道前平野の官衙関連施設について

古墳時代の建物は主にカマドを有する竪穴住居である。道前平野北端の長網遺跡群や旦之上遺跡(愛媛118)では、6世紀中葉から7世紀初頭の各住居の位置関係からみて、2～3棟の「世帯」としての単位を読み取っている。また、この遺跡の調査範囲の中では明確に掘立柱建物が伴っていることは確認されなかったが、セット関係としては想定されるとした。先述したとおり7世紀半ばの遺構空白期を経て、8世紀から9世紀にかけての建物は一気に掘立柱建物に変化している。ただし、松ノ丁遺跡や大開遺跡(愛媛117・144)では依然として竪穴住居が認められるが、これは特異な事例である。近隣に所在する松の元遺跡では官道の可能性の高い道路遺構が検出されており、道路の縁辺部には官衙関連集団と想定される人々の建物群があり、この地域が一般的ではな



第１図　松ノ丁遺跡　遺構配置図



第２図　松ノ元遺跡　道路状遺構

第３図　周敷郡衙関連施設の復元（久枝Ⅱ遺跡）

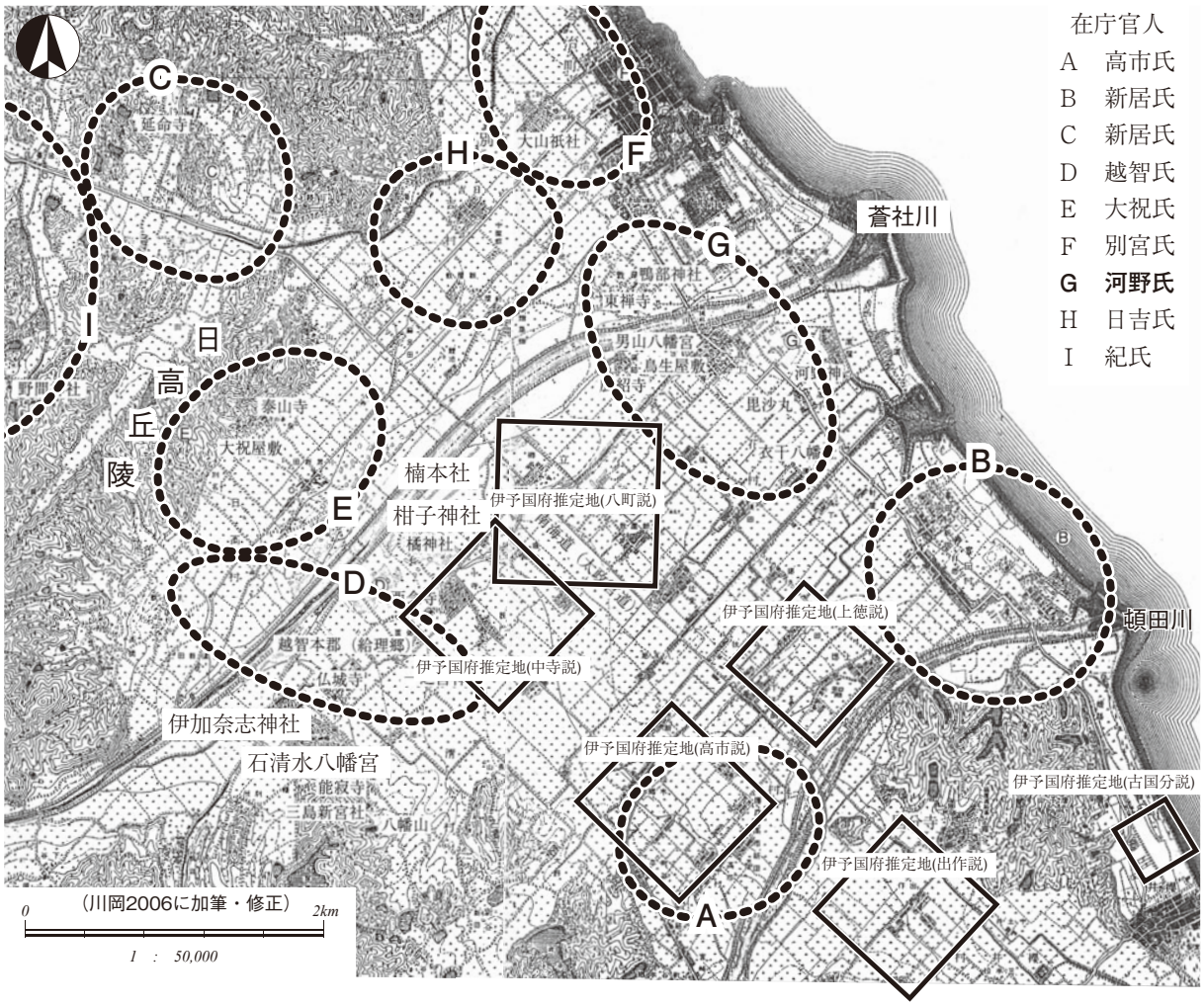
い特殊性を持っていることが明らかになっている。ただ、その建物はすべて掘立柱建物であるにもかかわらず、両遺跡では竪穴住居を持っていることでさらに特殊性が際立っていることから、ここの居住者は特別な集団であったことが想定される。その集団について想像をたくましくすれば、『続日本紀』記載の神亀二年(725)に陸奥国の俘囚144人が伊予に配流となった事実がある。当時の陸奥国では竪穴住居が一般的であったとされ、また、松ノ丁遺跡では県内では過去に全く出土事例のなかった8世紀の黒色土器が三点出土(ただし、三点とも東北地方の黒色土器の搬入品ではなく、生産地は不明である)している。このような遺跡の在り方と歴史的事象が合致している可能性も視野に入れておく必要がある。

この道前平野には官衙関連施設の可能性を強く指摘されている久枝Ⅱ遺跡(愛媛122)が存在する。遺跡は7世紀後半から8世紀第４四半期まで連綿と継続されるが、特に8世紀第２～第３四半期は安定した「コ」の字型配置の掘立柱建物群があり、周敷郡衙の郡庁もしくは館と捉えられている。また、大開遺跡でも「コ」の字型配置の掘立柱建物が検出されている(柴田2005)。さらに、近隣には円面硯や施釉陶器・赤色塗彩土器・石帯などを出土する久枝遺跡や幸の木遺跡などの、明らかに一般集落ではない遺跡群が随所にみられる地域でもある。

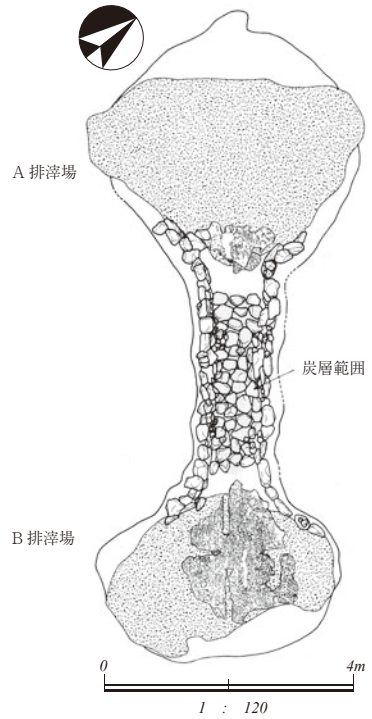
４　今治平野の国府関連遺跡について

伊予の国府が越智郡に設置されていたことは『和名抄』により知られる。現在推定地説には上徳説・町谷説・出作説・古国分説・八町説・中寺説などがあり、決着を見ていない。1981年から３カ年の予定で始まった伊予国府跡確認調査(愛媛県教育委員会)では、上徳説の地域で調査が行われたが、国府を決定付ける成果は得られなかった。その後、八町説と中寺説の交差する地域で国道196号バイパス工事に先立つ発掘調査が実施され、7世紀～9世紀にかけての須恵器や土師器、9世紀後半から10世紀前半の施釉陶器、10世紀後半～11世紀にかけての京都篠窯の須恵器鉢、12世紀～13世紀にかけての貿易陶磁器などが大量に出土した(愛媛31)。また、隣接する八町１号遺跡では石帯や墨書土器(「金」)、円面硯・風字硯なども出土しており、まさしく近隣に国府の存在を想起させる遺物群である。このような遺物組成を持つ遺跡は、さらに石清水八幡神社や伊加奈志神社の鎮座する丘陵の前面まで範囲を広げている(愛媛71)。ただし、遺構については掘立柱建物跡の一部は検出されているが、国府関連施設と認定できる規模や様態のものは明らかになっていない。

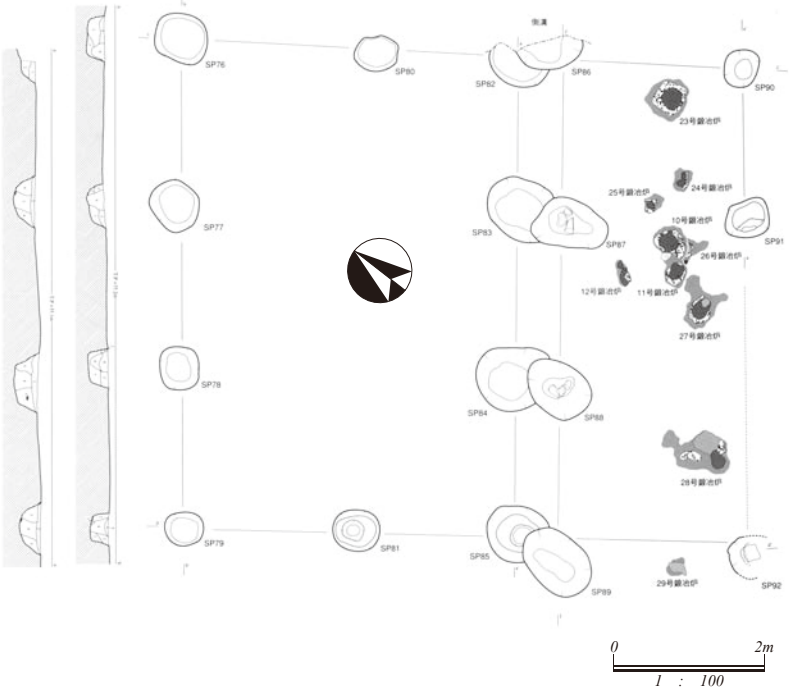
蒼社川右岸に広がるこれら古代遺跡群は、現在のところ国府との関連で捉えられる要素が最も多い地域となっており、特に八町遺跡の周辺については国府域の中であろうと推定した(中野1995)。しかし、遺物論から国府への展開には同調しないとし、この地を「津」としてとらえる考えも提示されている(谷若1998)。この場合の「津」が国府津を指すとすると、河口から3㎞も上流に最も重要な津を設置するものだろうかという単純な疑問がわく。また、豊富な質量の遺物をもたらすものが津であるという考え方は、遺物論から津論への展開にすぎない。顕著な遺構が見いだせないままの推論には限界があるが、文献史学からの指摘として蒼社川の河口付近に対する見解が示されている。それは、後の伊予国守護で12世紀後半頃に在庁官人として台頭してくる



第４図　今治平野における国府推定地と在庁官人の勢力分布図



第５図　高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡　製鉄炉平面図



第６図　別名寺谷Ⅰ遺跡　鍛冶炉

河野氏が、この蒼社川の河口部を生活の拠点として活動していたというものである(川岡2006)。内陸部への人の移動や物流の玄関である河口は極めて重要な箇所であることに異論はないであろう。国府が成立し律令的機能が発揮されていた最盛期の時代からは下るが、河口付近を河野氏が領有していたという事実は、律令体制が弛緩した後も依然としてこの地が重視されていたことの表れと考えられ、国府津は河口付近にあった可能性が最も高いものと解釈できるであろう。

さらに国府所在地を推定する史料として、安芸国楽音寺所蔵の大般若波羅密多経の奥書がある。楽音寺経は応安・応永・文政・慶応の時代の経巻で、特に応永銘経は453帖と残存数が多い。応永銘経の施入年代は応永25年(1418)で、施入先は伊与府中越智郡柑子女御である。「柑子女御」とは今治市八町に所在する樟本神社の境内にある柑子神社と考えられ、巻第171巻首部の墨書書入れに「柑子女御國廳」や「府邊鎮」などがあることから、樟本神社は国府の近在もしくは関係の深い神社であるとみている(白井2000)。

以上のように、蒼社川右岸域の八町から四村にかけての地域に国府があった可能性の高いことが考えられるようになってきたが、周辺域ではどのような調査成果があるのか概観してみよう。八町遺跡から約1㎞西に日高丘陵がのびているが、蒼社川方向に開口する谷部には多くの古代遺跡が存在している。主要な遺跡は北から別名端谷Ⅰ遺跡・別名寺谷Ⅰ遺跡、高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡、高橋徳蔵寺遺跡、高橋山崎遺跡、高橋板敷Ⅰ遺跡(今治市)などで、いずれも7世紀後半から10世紀の時間幅の中で営まれた遺跡である。高橋徳蔵寺遺跡を除き遺構に製鉄炉や鍛冶炉が検出されていることが共通する。特に高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡では両側に排滓場をもつ長方形箱形炉が一基検出されており、簀巻状羽口が出土していることから官営製鉄炉の可能性が指摘されている。他の鍛冶炉はいずれも小型であるが、別名寺谷Ⅰ遺跡では直径30㎝程度の円形炉が一部重複するものの列状に29基検出されている。その内9基は掘立柱建物の内部に造られている。高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡以外の遺跡では、赤色塗彩土師器、円面硯、風字硯、施釉陶器、墨書土器、越州窯青磁など官的性格を有すると考えられる遺物が多数出土している。また、別名端谷Ⅰ遺跡では「倉正私印」と読める銅印も出土している。このように国府を望む日高丘陵の谷部には鍛冶を中心とした工房が存在していることが明らかとなったが、これらの工房は製鉄を行う高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡付近を中心として国府造営とともに計画的に配され、別名寺谷Ⅰ遺跡の状況などから10世紀まで継続して営まれていたことが想定できる。

国府推定域から約3㎞北東に離れたところに位置する阿方牛ノ江地区でも、7～10世紀にかけての遺跡が集中している。阿方牛ノ江Ⅱ～Ⅳ遺跡(愛媛130)では、微高地上や谷部に7世紀後半から9世紀にかけての掘立柱建物群が検出されている。隣接する阿方春岡遺跡では、8～9世紀の下層遺構と9世紀後半～10世紀前半の上層遺構があり、上層遺構からは「コ」字型の溝を有する掘立柱建物が検出されている。また、10世紀を前後する時期の施釉陶器が大量に出土しており、ここでは灰釉陶器が緑釉陶器の数を上回る特異な状況を呈している。報告書ではこの遺跡について在地豪族(あるいは役人)の施設(居宅)の可能性を指摘している。

来島海峡に面した開析谷に糸大谷遺跡が存在する。幾度かの断絶はあるが縄文時代後期から江戸時代までの長きにわたる生活が営まれている。古代では8世紀代の須恵器、9世紀後半から10

世紀の施釉陶器・黒色土器・越州窯青磁などが出土している。遺構では柱穴などは多数検出されているが建物としてうまく結びついていない。施釉陶器などの量が多いことや荘園の一画であることから、ここで生活した集団は「職人」的海民(供祭人・神人)の可能性も指摘されている。

5　その他の古代遺跡

道前平野や今治平野ほどまとまりはないものの、古代の遺構や遺物を出土する遺跡は、松山平野やその周辺地域に多数発見されている。松山平野の久米官衙遺跡群では7世紀代の回廊状遺構や政庁、寺院跡などが検出された。特に回廊状遺構は斉明天皇が道後の湯に行幸された時の「石湯行宮」ではないかと推定された(松原1990)が、「石湯行宮」=道後温泉と結論付ける立場から、天皇の健康状態も加味すると来住台地では温泉との距離が離れすぎていることなどを理由に否定する見解も提出されている(白石2007)。

道後温泉にほど近い岩崎遺跡では、8世紀の方形区画溝が検出され、土馬も出土している。その他、7～8世紀代の須恵器や畿内産土師器、9世紀後半から10世紀の施釉陶器なども出土している。また、隣接する湯築城の調査では石帯も出土している。城内の一角は内代廃寺跡と考えられ、湯ノ町廃寺も存在していたことからこの地域が温泉郡と関連付けられるであろう。

松山市北端の大相院遺跡・別府遺跡(愛媛114)では円面硯や赤色塗彩土師器が出土している。調査事例の少ない南予地方では、西予市宇和町岩木の上井遺跡(愛媛77)でも同様の出土遺物があるが、宇和郡は石野・岩城・三間・立間の四郷から成り石野に郡衙が置かれていたとされる。なお上井遺跡に隣接して岩木廃寺があったとされ、瓦の出土もみられる。

6　おわりに

古代という時代の考古学的理解は、先述してきたように国家主導の律令体制の下にある国府・官衙などとの関連が強調される、非一般的性格の遺跡を通して行われるのが現状であろう。具体的には遺構の在り方、つまりは掘立柱建物の規模や構造または配置からみた機能、さらに官道の復元による駅家などの比定であるが、その背景には土地制度としての計画的条里制の施行があった。遺物では主に都の識字階層が使用・消費する非日常的使用目的の土器類をメルクマールとした特殊性の抽出にある。これらの成果について体系的整理作業はまだ始まったばかりであろう。地域的には道前平野と今治平野、松山平野の来住台地での成果が大きいが、個々の遺跡の概要が明らかになってはいるが、地域内における連関については大雑把な構図が描けているにすぎない。その他の地域では、古代の遺物の出土はあるが遺構との解釈により遺跡の機能が論じられているものはほとんどないといってよいであろう。遺物における特殊性が官的機能や寺社に結びつくとの表面的理解は自然であるが、古代における一般的集落の様相を知ることができる遺跡は逆に極めて少ない。それは遺物の中に非日常的なものが僅かであっても含まれていることにより、特殊性が強調される傾向にあるからではないだろうか。個々の特殊な遺物がどのような場面で使用されたのか、どのような施設で使用されるものなのかについて、実は県内ではほとんど研究が行われていないのが現状であろう。『延喜式』などの文献から土器の色に注目し、使用目的の限定化

を論じた研究成果(梅川2001)などの援用が有効であろうか。一般的か否かという個々の遺跡の位置付けは、中央集権的制度との関わりの中で人々の生活が各地方にどのように浸透していったのかを知る上でも重要である。もちろん一般的か官的かという二極化がすべてではないが、今までに報告されている古代遺跡について遺構・遺物はもとより、地理的要件も加味したうえでの細かな分析を行い、その結果を総合した解釈が必要であろう。

(2009年5月25日)

参考文献

今治市教育委員会1995『八町1号遺跡－2次調査区－』

今治市教育委員会1997『四村額ケ内遺跡発掘調査報告書』

今治市教育委員会2007『高橋佐夜ノ谷遺跡』

今治市教育委員会2008『高橋板敷Ⅰ・Ⅱ遺跡』

梅川光隆2001『平安京の土器　その様式と色彩の文化史』 真陽社

川岡勉2006「中世の伊予府中と在地諸勢力」『中世の地域権力と西国社会』 清文堂

柴田昌児2005「久枝Ⅱ遺跡周敷郡衙関連施設の検討」『久枝遺跡・久枝Ⅱ遺跡・本郷Ⅰ遺跡』 自然科学分析・考察編愛媛県埋蔵文化財調査センター

白井比佐雄2000「安芸国楽音寺所蔵大般若波羅密多経の奥書等について」『研究紀要』第5号　広島県立歴史博物館

白石成二2007「「熟田津の石湯行宮」の所在について」『ソーシアル・リサーチ』第32号　ソーシアル・リサーチ研究会

谷若倫朗2000「伊予国古代官衙研究の現状と課題」『古代文化』第52巻第6号　古代學協會

砥部町教育委員会1992『砥部町内埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ

中野良一1995「出土土器からみた伊予国府推定地説」『八町1号遺跡－2次調査区－』 今治市教育委員会

松原弘宣1990「伊予久米評の成立と回廊状遺構」『日本歴史』第504号、吉川弘文館

松山市教育委員会1998『小野川流域の遺跡』Ⅱ

松山市教育委員会1999『岩崎遺跡』

山内英樹2005「古墳時代後期の居住領域－東予玉川線の竪穴住居からみた予察－」『福成寺遺跡・旦之上遺跡』(第2分冊)愛媛県埋蔵文化財調査センター

第６章　中　　世

中野良一　柴田圭子　松村さを里

１　はじめに

愛媛県内における中世遺跡の調査はすでに数百遺跡を数え、当センターにおいても毎年のように調査対象となっている。その嚆矢と言えるのは1980年代に実施された松環古照遺跡（松山市）、八町遺跡、見近島城跡（今治市）等の調査であろう。

松環古照遺跡では中世前期の集落や中世後期の館の可能性のある区画、中世墓などが検出され（愛媛41）、八町遺跡では国府との関わりが考えられる平安時代から鎌倉時代前半を中心とした集落が調査され（愛媛15・31）、和泉型瓦器椀や貿易陶磁器などが多く出土した。見近島城跡は芸予諸島の小島であるが、戦国時代の海浜集落から膨大な量の遺物が出土し（愛媛10）、海賊関係の遺跡として注目された。以上のように、伊予の各地域において様々な特徴を有する中世遺跡が分布していることは初期の事例によって予測可能であった。

そして、1980年代末から開始された湯築城跡の発掘調査は、当センターに遺跡保存と緊急発掘の是非という深刻な問題を突きつけるとともに、学術調査としての高度な質と県民への情報公開、全国へ向けた情報発信といった新たな要求への対応を迫るものとなった。結果として、それらへの対応と同時並行で中世考古学の多様な研究が行われるようになり、遺跡調査に真摯に取り組む姿勢が伊予の中世考古学研究を育む素地となった。また、1970年代後半以降日本中世土器研究会や日本貿易陶磁研究会、織豊期城郭研究会等、中世考古学を対象とした多くの研究会が生まれ定例会を開催したことは、研究を深化させる原動力となったのは無論であるが、全国の研究者間の交流促進や情報収集、意見交換の場として機能し、そこに参加し成果を持ち帰ることにより各遺跡の調査内容を吟味し、充実させていくことに役立った。

伊予の中世考古学研究は、遺跡調査を契機として各分野に波及しており、本項では調査対象となった遺跡を紹介しつつ、それを核として形成発展した研究に言及することとしたい。また、現時点での研究は、様相がやや不明確な南北朝期をはさんで、平安時代後半から鎌倉時代を対象とする中世前期と、室町時代から戦国時代を対象とする中世後期に分かれて議論されることが多く、それ自体を大きな問題点と認識しつつも、今回は中世前期と後期に項目を分けて論じたい。

また、湯築城跡の整備にともなって当センターが資料館運営を担った時期があり、これも伊予の中世考古学において重要な足跡と認識し、最後に普及啓発活動について項目を設けた。（柴田）

２　調査事例と研究

（１）中世前期の遺跡と研究

この時期の遺跡は1970年代から開始された国道33号砥部道路（拾町遺跡・水満田遺跡・三角遺跡）（愛媛７）、国道11号松山東道路（来住遺跡・久米窪田遺跡）（愛媛５・９）、国道196号松山外環状

道路(松環古照遺跡・大峰が台地区)(愛媛60)や今治道路(片山内福間遺跡・八町遺跡)(愛媛15・31)など国道バイパス建設に伴う調査として、主に平野部において広範囲な展開をみせる集落遺跡に道路という大規模なトレンチを入れる形で実施された。

土器編年研究

これらの遺跡の調査により、まず土器の編年的研究がスタートした。松山平野では松環古照遺跡を中心とする周辺の古照遺跡群、今治平野では八町遺跡が代表的な遺跡となる。両遺跡は遺物の出土状態に廃棄における一括性の高さが認められる遺構があり、加えて出土の種類や量が豊富であったことにより、それまで全く手が付けられていなかった土器編年の基準資料となった。

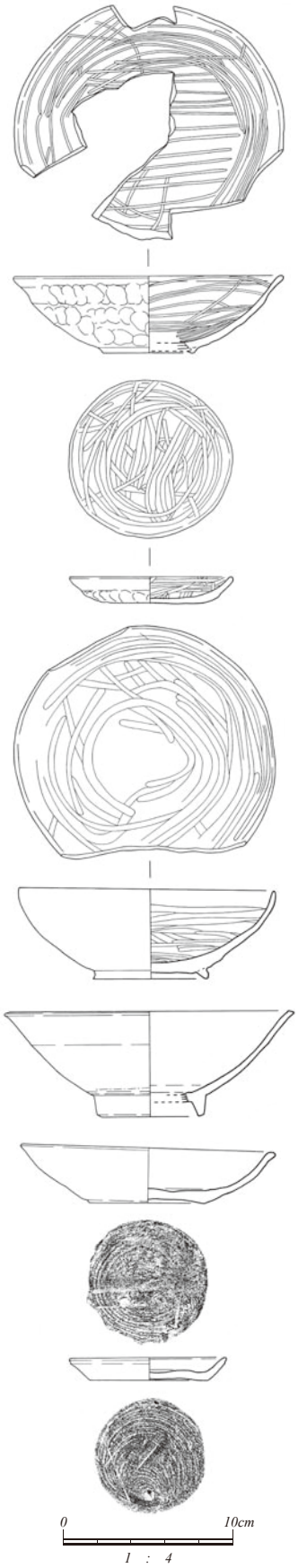
ここで年代基準の柱となったのは畿内生産と考えられ、当時広く西日本各地や鎌倉・北陸などでも出土が確認され始めていた瓦器椀である。瓦器椀については上牧遺跡(大阪府高槻市)の報告書(橋本1980)で楠葉・大和・和泉・丹波・紀伊の５型式が設定され、日本中世土器研究会において瓦器椀以外の製品も含めた生産地や暦年代についての研究も公表された。この成果の中で特に和泉型と楠葉型の年代観を援用することによって、伊予における古代末から鎌倉期までの土器編年試案が出された(中野1988)。さらに松山平野のより細かな編年案も提示された(栗田1993)。その後、土器研究は在地土師器椀や貿易陶磁器の共伴関係について関心がはらわれ詳細な検討が行われたが、当初空白期であった11世紀から12世紀前半については、楠葉型瓦器椀や篠の鉢など年代が明らかな製品は出土しているが、それらと一括性の高い在地土器に恵まれず、現在に至っても空白期を埋めきれていない。また、在地生産の土師器椀については11世紀後半頃から内面黒色の椀から黒色処理を施さない椀への移行がみられ、12世紀のなかば頃からはこの椀が主流を占めていることが明らか(特に松山平野で顕著であるが、今治平野は内面黒色が残る)となるが、それらもやがて12世紀後半には和泉型瓦器椀に淘汰されていく状況がみられる。そして13世紀の前半には在地生産の土師器椀はほとんど姿を消す。一方、皿や杯については、12世紀には椀・杯・皿・小皿という食器のセット関係が完全に固まっていたことは明らかであるが、どこまで遡るのかについては11世紀を前後するあたりという推定の域を出ておらず、未だ確定していない。

編年研究は主に椀・杯・皿などの供膳具を中心として行われ、鍋や甕などの煮炊具については付属的に行われていたにすぎなかった。2006年に行われた日本中世土器研究会のテーマが「土製煮炊具の諸様相」であり、これを契機に中予・東予の編年を体系的にまとめた(中野2007b)。

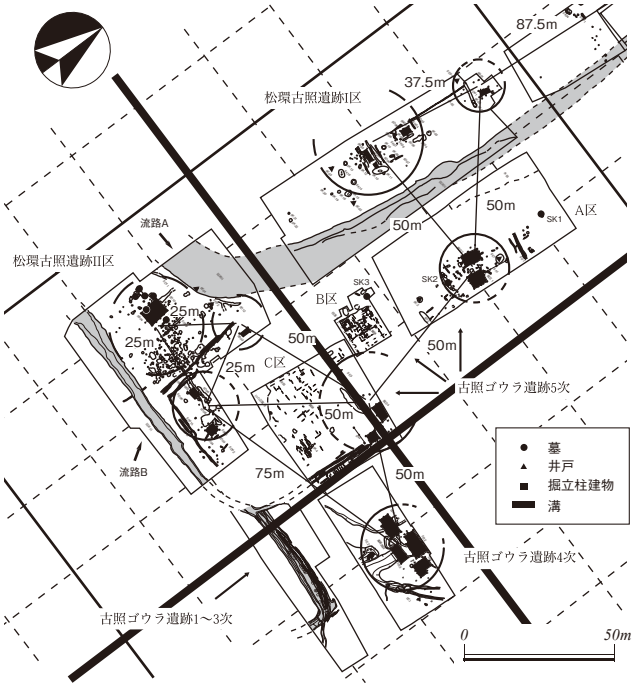
また資料の多寡は調査件数に比例するため調査事例が極端に少ない南予では、中世前期における独自の編年は組まれていないのが現状であり、南予の研究の遅れが目立っている。しかし、中世前期に限れば瓦器椀の出土の有無をポイントに大まかな時期認定が可能であり、このことはほぼ全県域で共通しているとの見通しがある。

集落研究

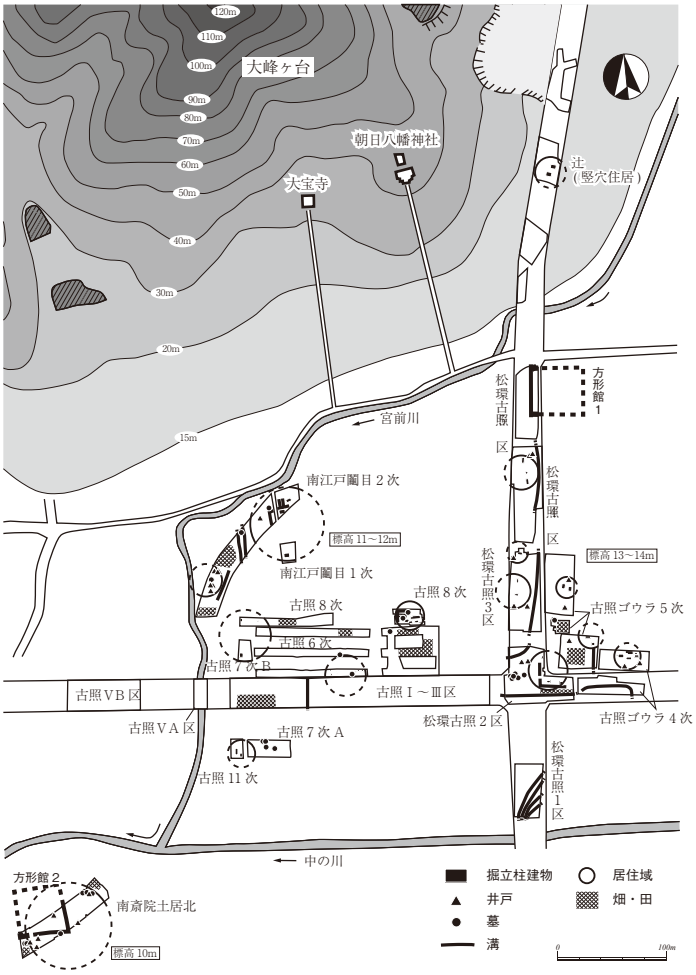
遺跡の年代を決定づける土器編年の研究に遅れていたが、建物などの居住遺構の検出事例が増加するにつれ、集落(村落)の構造にも関心がはらわれるようになる。特に松山平野西部の南江戸地区ではおよそ500m四方のなかで多くの箇所の調査が行われ、古照遺跡・松環古照遺跡・南江戸鬮目遺跡などの各調査区遺構全体図をつなぎ合わせると集落の様相がみえてくる。年代的には



第１図　南江戸鬮目遺跡２次出土土器



第２図　松環古照・古照ゴウラ遺跡



第３図　南江戸地区 集落概観図

12世紀半ばから13世紀前半に営まれた生活痕跡がみられる遺跡が多い。ここでは掘立柱建物を中心とした居住エリアは互いに一定の距離(25m～50m)を隔てたいわゆる散居形態であり、集住形態をとっていない。建物敷地内には小溝による区画をもつ２～３棟の掘立柱建物が建っているのが標準的だが、４～５棟の大型建物が建てられている区域もあり、恐らく居住者の階層差が現れていると考えられる。建物以外に井戸や土坑墓などが検出されているが、井戸は素掘り＋曲物と石組み＋曲物という構造のものが多い。土坑墓は一基単独と数基がまとまっているものがあり、敷地内に埋葬するいわゆる屋敷墓の様相がみられる。これに対して旧土居町の医王寺Ⅱ遺跡(愛媛)では、居住域の背後の丘陵斜面部に集中して土坑墓が掘られており、県内における最も古い参り墓の可能性も考えられる。居住地の周囲には水田や畑が検出されているが南江戸地区全域には方格地割(条里地割)がみられ、地区内の東西南北方向に流れる主要流路はこのラインに整合している状況が認められる。このことから南江戸地区にみられる方格地割は12世紀代には成立していたことを示していると考えられる。

以上のような南江戸地区の集落の在り方は、平田七反地遺跡(愛媛86)や馬越遺跡(今治市)および近隣の馬越和多地遺跡(愛媛131)などでもほぼ同じ状況が確認されていることから、中世前期集落のモデルとして評価できるものである。ただし、各村落の領域を区画する境界については、どのような遺構を持って境界と認定するのか見出せておらず今後の大きな課題である。　(中野)

⑵中世後期の遺跡と研究

ここでは南北朝期以降、戦国時代末期までの遺跡を対象とし、研究史を総括的に述べる手段としていくつかの研究分野に沿って代表的な遺跡を取り上げ、項目を立ててまとめる。それは第一に湯築城跡と周辺遺跡の調査、第二に芸予諸島の調査、第三に南予の山城の調査、第四に東予地方の集落の調査である。各項目において、調査成果を簡潔に述べ、そこから派生した研究や課題について触れる。

湯築城跡と周辺遺跡の調査

写真１　湯築城跡全景

湯築城跡(松山市・写真１)は室町時代に伊予国守護となった河野氏の居城であり、二重の堀と土塁をともなう平山城である。発掘調査(1988－2002)は、当初開発に伴う緊急調査であったが、遺跡の保存運動による中断、保存の方針が決定して以降の学術調査に変わっての再開、遺跡を活かした整備の実施、国史跡への指定、次項で述べる資料館運営による普及啓発活動など、当センターが関わった遺跡では特殊な経過を辿ったことも特筆に値する。全面的な発掘調査の対象は平地部の一部だが、湯築城跡が二重堀を備える形態に変化したのは16世紀前半であること、それ以降廃城までに４段階の変遷があり16世紀中頃に大規模な火災にあっていること、城内が使用目的によって区画され家臣

の居住区を備えていたことなどが判明し、土師質土器や備前焼、貿易陶磁器などの出土遺物は25万点にのぼった。これらの調査成果は、事実報告と遺構・遺物に関する考察によって構成した報告書５冊にまとめられ(愛媛66・83・100)、湯築城跡研究の核となっている。

湯築城跡の発掘調査を契機に議論されることとなった論点は多岐に渡り、伊予の中世考古学と中世史における大きな画期となった。以下、その主要なものを紹介する。

発掘調査によって城主である河野氏に関する文献研究が活発となり、発掘調査成果を盛り込む形で論じられるようになった。外堀と土塁の築造年代とその背景の指摘や、従来織豊期以降と考えられていた湯築城跡の外堀の築造時期が天文年間に遡り、家臣の居住区の存在が明らかになったことで惣構えとも評価され、16世紀中頃の火災の背景が「天文伊予の乱」にあることなどが指摘されたが(川岡1992)、惣構えについては各地で発掘調査が進み戦国時代の城館の多様性が知られるようになるにつれ、湯築城の形態もその中で理解されるようになり、火災の年代や背景に関しては現在も考古学と文献史学の間での議論が続いている。また、ほぼ同時期に調査が進んだ周辺地域の守護館との比較検討が幾度か行われ(湯築城資料館2003・中国・四国地区城館調査検討会2008)、庭園の存在や土師質土器の大量出土、貿易陶磁器の奢侈品などの共通点と、城館の形態や土塁の有無などの相違点が明らかになりつつある。出土遺物に関しては、火災層から備前焼や貿易陶磁器が大量に出土し、編年において基準資料として位置づけられたほか(柴田2001a・b)、戦国時代の広域流通を具体的に論じる上で大きな課題を与えた。また、層位的に把握された土器群は、これまで様相が明らかでなかった中世後期における在地土器の編年の定点となっている。ほかにも、湯築城跡から出土した瓦(第４図)が、高知県中村城跡等の出土瓦と同笵であったことから、長宗我部氏の四国統一が湯築城に及んでいたのかが議論されている(中野2007a)。

近年では湯築城周辺も含めた議論が行われている。湯築城跡の城下に関してはルイス・フロイスの『日本史』に記載があることから、文献史側からその存在と内容について紹介されていた(川岡1992)が、実際に湯築城跡西側に隣接する道後町遺跡において、湯築城跡とほぼ同時期の遺構や遺物が豊富に出土し(愛媛97・121)、その後城下として評価されるに至った(松村2007)。また、当該遺跡からは一町四方の方形区画を構成する溝(SD3)が検出され、湯築城が外堀によって拡張する前の政庁の可能性が指摘されている(日和佐2002)。さらに南斎院土居北遺跡では一辺約50mの堀で囲まれた館が検出され、河野氏家臣垣生氏の居館の可能性もあり(中野2004)、今後は湯築城周辺も含めた変遷過程や、河野氏を取り巻く家臣の遺跡も見据えて伊予の戦国時代像を構築することが求められている。

芸予諸島の調査と海城、海賊研究

芸予諸島において中世後期の遺跡が本格的に調査されたのは見近島城跡(今治市)を嚆矢とする。見近島は、芸予諸島大島と伯方島の間にある小島で、西瀬戸自動車道工事のため事前調査(1980－1981)が実施された。検出された遺構は掘立柱建物を中心とする海浜集落の様相でありながら、貿易陶磁器や備前焼が戦国大名の城館跡と比較しても質、量ともに遜色がないほど出土した(愛媛10・第５図)。この成果は調査時に海賊関連の遺跡と認識されつつも、海賊に関する研究の少なさから正当に評価されることはなかった。後に姫内城跡(愛媛56・73)や愛媛県教育委員会

によって実施された芸予諸島を中心とした遺跡調査(愛媛県教育委員会2002)によって、海城と呼称される遺跡の調査が急速に進展し、一般には村上水軍という名称で知られる海賊の多様な活動のうち、見近島城跡は特に流通分野を顕著に示す事例として評価できるようになった(柴田2003)。さらに現在、今治市教育委員会が取り組む能島城跡の調査(国史跡・今治市教育委員会2006・2007)により、海賊の本拠であった海城の実態が徐々に明らかになりつつある。海賊研究は、中世後期の伊予の歴史を語る上で欠かすことの出来ない分野であり、前項で述べた河野氏と湯築城との関わりも深く、考古学調査による今後の進展が期待される。

南予地方の山城調査

南予地方に延伸する高速道路等の建設にともなって、山城の調査が多く実施されている。

元城跡(大洲市)は内子・五十崎低地から大洲盆地へ至る入り口に立地し、調査の結果、切岸下の横堀に連続竪堀が取り付き、背後を連続堀切で遮断する構造であることが明らかとなった(愛媛99・第6図)。このような構造を持つ城郭は伊予においてはごく少数しか認められず、土佐の長宗我部氏が伊予に侵攻し自らの重要城郭に採用していた技術を元城にも用いたものと推定されている。

また三間盆地に所在する正徳ヶ森城跡(愛媛124)、角ヶ谷城跡(愛媛128・135)の調査が実施され、岩倉城跡の調査が継続している。調査は城郭全体には及ばないが、小地域に密集する山城の実態が明らかになりつつある。これらの城郭はいずれも宇和郡を治めた西園寺氏の旗下有馬殿(今城氏)に関わる可能性が高く、同じく西園寺氏や土佐一条氏との関係も深い河原渕殿の城郭とされる河後森城跡(国史跡)も松野町教育委員会によって継続的に調査が行われており(松野町教育委員会1999)、西園寺氏関係の城郭の実態が一部明らかになろうとしている。

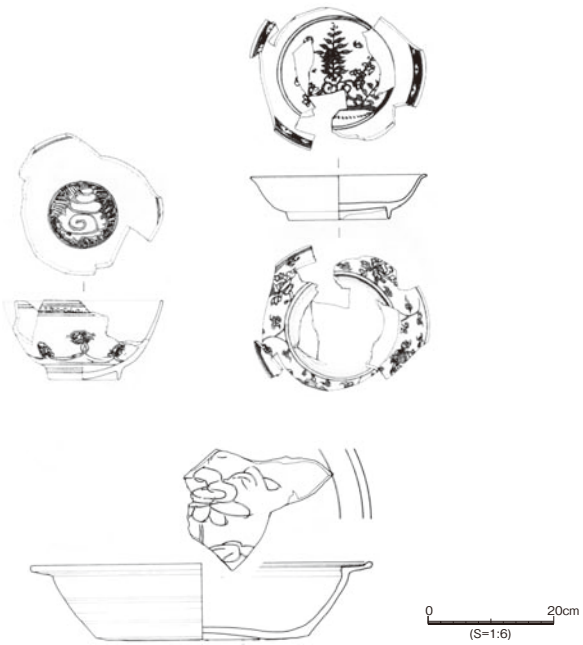
一方、熱田城跡と長松寺城跡(宇和島市・愛媛134)では、15世紀には廃絶した小規模な単郭の城の調査が実施され、「村の城」と呼称される村落に付随する施設ではないかと推定されている。

南予地方は戦国末期に土佐一条氏や長宗我部氏の侵攻を受け、伊予の中でも激しい戦闘の行われた地域である。当地方の山城は直接その影響を受けている遺跡であり、その推移や技術の解明は課題である。また、南予地方はこれまで遺跡調査が比較的少なかったこともあり、在地土器の様相も不明瞭な面が多い。ただし、河後森城跡や県内では唯一の山岳寺院の本格的な調査が実施されている等妙寺旧境内(鬼北町教育委員会2007・2008)など、現在展開している各市町村の調査成果も合わせて、今後解明すべき課題は多い。

東予地方の集落調査

県内における中世後期の集落に関しては、調査研究が多くなく様相が未だ不明瞭と言わざるを得ない。そのような中、比較的まとまった面積の調査が行われた例として、久枝遺跡(西条市)を挙げることができる。久枝遺跡は周桑平野の沖積低地の微高地上に立地し、溝によって区画された中に掘立柱建物が検出された(愛媛122)。集落内を区画する溝は、一部遡るものもあるがおおむね14世紀前半から15世紀後半まで機能していたと考えられ、そのうち15世紀代に構築されたとみられる33棟の掘立柱建物の変遷が考察されている。当該集落は、調査対象地で4つの区画に分かれ、各区画は比較的均質で、土師質土器の供膳具が少なく木製品を主体としていた可能性があ

第４図　湯築城跡出土瓦



第５図　見近島城跡出土貿易陶磁器

第６図　元城跡検出遺構（部分）

る。また、ある程度の経済力を有し、喫茶などの嗜好品を生活に取り込んでいたことが指摘され、沖積低地における集村化した村落として位置づけられている（柴田昌2005）。

久枝遺跡と類似した集落遺跡は、松山平野においても樽味遺跡（愛媛大学1993）で確認できる。中世後期の集落遺跡は大畑遺跡（愛媛120）や千足遺跡（愛媛125）など調査例が徐々に増加している。今後伊予の中世後期の集落の立地、遺構・遺物の特徴や消長を明らかにしつつ集落論を展開することが急務となっている。

また、登畑遺跡（今治市・愛媛69）では、多くの粘土採掘坑とみられる土坑や、大量の瓦質土器煮炊具、あるいは鋳型が出土し、生産遺構は未発見であるが土器生産や鋳造に関わる集落であることが推定されている。生産に関しても遺構が多くないことから研究が進展しておらず、今後の資料の増加に期待したい分野である。（柴田）

３　普及啓発活動

湯築城跡は発掘調査の結果その重要性が見直され、その後県民の声によって保存と成果の公開が行われるようになった県内の埋蔵文化財のなかでも特異な経緯をもって史跡となった遺跡である。平成14年４月から平成18年３月まで、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターは愛媛県の委託を受け、道後公園湯築城跡の管理運営および普及啓発活動を行ってきたが、平成18年４月からは指定管理者制度の下で当センターは管理運営を離れることとなった。発掘調査から復元整備、資料館のオープン準備、資料館活動そして史跡の普及啓発まで、当センターが埋蔵文化財の活用に主体的に関わったのはこれが唯一であるともいえ、大きな意義をもつ。

資料館の普及啓発活動の中でも、学術的な成果を公開する場としてシンポジウムと企画展を位置づけ毎年１回開催してきたが、これが管理運営に携わった４年間、そして将来にわたっても当センターが独自の活動を広くアピールする大きな機会であっただろう。

第１回目シンポジウムは平成14年９月20日に湯築城跡が国史跡に指定されたことを記念して、平成14年10月27日に「湯築城跡シンポジウム　再発見！湯築城の価値と魅力」を開催した。スライドによる湯築城跡発掘調査の成果報告を行い、小野正敏氏、山内譲氏による講演の後、下條信行氏をコーディネーターとして講師と地元代表者を交えたパネルディスカッションを行った。湯築城の変遷や陶磁器の流通について議論され、今後の湯築城跡の活用が話し合われた。そして、史跡の活用というテーマがこの後に続くシンポジウムにも繋がっていくことになる。第２回目３回目のシンポジウムでは、県内外の城館調査の報告や各地での史跡の活用方策などが議論された。平成15年11月16日開催の「湯築城シンポジウム　湯築城をとりまく西瀬戸内の戦国群像～河野氏・大内氏・大友氏の活躍とその遺跡～」では、古賀信幸氏、坂本嘉弘氏、松村さを里が三氏の遺跡を紹介し、柴田圭子の進行により討論を行い、館や出土遺物の特徴が議論された。平成16年11月28日開催の「湯築城跡シンポジウム　中世城館の新しいすがたを求めて－能島城跡・河後森城跡・湯築城跡－」では、千田嘉弘氏の講演と県内で国史跡となっている三城跡について中川和氏、高山剛氏、松村さを里が研究成果を報告し、柴田圭子の進行による討論では各城跡の特徴を再検討した。また、各遺跡で行われている活動を紹介し、研究成果を発信することや遺跡について学ぶことを通じて遺跡をより魅力的な場所として活かすことの必要性を確認した。

企画展では、湯築城や河野氏の歴史と関わりのある中世遺跡を、近年の研究成果をもとに紹介し、資料館が新たに中世遺跡を評価し成果を公開する場ともなった。

平成15年度には企画展「湯築城周辺の遺跡展～みえはじめた城下のすがた～」で、当時発掘調査中であった道後町遺跡を中心に、湯築城周辺に広がる道後今市遺跡の調査成果について紹介した。道後今市遺跡にみる12～15世紀の農村集落が点在するようすや、道後町遺跡にみる15世紀代の方形区画溝の掘削から16世紀の城下町形成という変化を湯築城の歴史とともに明らかにした。平成16年度「河野氏と海賊衆」では、芸予諸島に存在する甘崎城跡、来島城跡、姫内城跡の海城調査成果を紹介し、海賊衆村上氏の歴史と海城の分布、河野氏と来島村上氏のつながりなど近年の研究成果を公開した。平成17年度「河野通信－源平の争乱を生きぬいた武者－」では、文献資料に残る河野通信の活躍の軌跡を中心に、湯築城以前の河野氏の本拠地に焦点を当て風早郡河野

郷に所在する大相院遺跡の調査を紹介した。

また、毎年夏に開催した親子で学べる湯築城講座では、湯築城と河野氏、中世をキーワードに小学生親子を対象にして普及啓発を行った。湯築城内の見学や、中世のくらし体験として中世の双六や羽子板、天秤棒担ぎ、石臼引き、ヤリガンナ引き、小袖、直垂、甲冑の着付け体験の他、湯築城の模型作りも好評であった。

振り返ってみると、湯築城跡は当センターが10数年をかけて発掘調査を行ってきた遺跡で、中世考古学および中世史研究に与えた影響も大きく、県内では城館研究や河野氏研究がそれを契機に大きく進展した。その研究成果の蓄積をもとにシンポジウムや企画展を重ね、湯築城跡の発掘を行った当センターだからこそ公開できる遺跡の情報もありそれらを発信する責務があると感じながら、資料館の普及啓発に携わってきた。オープンした当初、湯築城跡の発掘調査の情報や出土遺物の内容は広く一般的にはあまり知られていなかったが、資料館の普及啓発活動を通じて徐々に理解されてきたと感じており、指定管理者制度へ移行するまでの４年間であったが、当センターの責務を果たしてきたのではないかと思う。（松村）

４　まとめ

時代を通じての大きな研究の柱は土器編年と集落（山城・城館も含む）であったといっても過言ではない。これらの研究によって当時の人々が使用していた物質の種類や量、居住していた建物の規模や構造などが明らかになり、それらを総合しさらに流通や集落の変遷や構造論にまで及ぼうとしている。しかし、柱となった二つのテーマに内在されている解釈のための基礎条件が完全に解明され共通の理解を得ているわけではなく、まだまだ様々な問題点を内包していることも事実である。各遺跡の調査から得られた情報をもとに伊予の中世社会構造の復元を目指すとき、そこにはまたまだ多くの解決しなければならない課題が存在する。ここでは、それらの中から大きく二つの点について指摘を行い、今後の研究の方向性を述べまとめとする。

一つには「在地」研究に対する課題である。土器研究や集落研究はともに在地を扱った研究に違いはないが、在地という用語に対する明確な概念規定を前提としていないため、得られた解釈の影響範囲や連関が極めて曖昧である。文献史学の研究においては、「鎌倉期の史料に「在地」という言葉が、村落的レベルを越える概念として使用された事例は見当たらない。」（田村1995）とされる。「随近在地」という用語にみられる極めて限られた領域内研究の積み重ねから、様々に導き出された普遍性と特殊性を根幹とした解釈の重要性を考える。ただし、土器における細かな分類や系譜・系統の設定は、この在地定義のための考古学的方法論であることも承知しているが、狭義の在地（本質的在地）を知らずして広義の在地（中央に対する地方）は解明されないはずであり、狭義の在地に特化した研究の積み重ねが今後も必要であろう。

次に文献史学との連携である。この分野との関係を研究の中に公に取り入れた契機は湯築城の調査であった。それは主に両者の研究によって導き出された事象の対比という形で行われ、いくつかの整合を得た反面、不整合に終わっている事象も多い。互いの資（史）料の援用に対してはご都合主義であるなどの批判もあるが、先ずは積極的に成果を取り入れるべきと考える。両者の目

指す当時の社会復元において、考古は物質そのものや動きを中心媒体とし、文献では文書や絵図を媒体としている。一見その手法はまったく別の方法論であるかのように思えるが、実は類似している側面が多いのではないのだろうか。それは物質や文書はすでに構築された人的関係や社会的仕組みから、複雑に営まれ実践された結果として残存していることからも明らかである。しかし、どちらもすべてのものが残されているのではなく、全体からすれば極一部でしかないものから、およそ総体を見通そうとしている。それゆえ見通しの精度を上げるためには両者の間に積極的な対比が必要なのである。互いの研究の中で現在蓄積されている資(史)料の対比はまだ始まったばかりといえるであろう。新しい中世史研究を構築するためには、これからの研究成果は互いの見解をとおした結果として提出されることが望ましい。それはすなわち、まずシェーマを交換することを指す。（中野）

（2009年5月7日）

参考文献

今治市教育委員会2006『史跡　能島城跡』

今治市教育委員会2007『史跡　能島城跡』

愛媛県教育委員会2002『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書－埋蔵文化財編－』

愛媛大学埋蔵文化財調査室1993『樽味遺跡Ⅱ』

川岡　勉1992『河野氏の歴史と道後湯築城』 青葉書店

鬼北町教育委員会2007『等妙寺旧境内』

鬼北町教育委員会2008『等妙寺旧境内』

栗田正芳1994「道後平野の回転台土師器について」『中近世土器の基礎研究』Ⅸ　日本中世土器研究会

柴田圭子2001a「伊予の中世備前焼⑵－湯築城跡出土資料の特徴と編年的位置づけ－」『紀要愛媛』第２号　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

柴田圭子2001b「16世紀中葉の輸入陶磁器の再評価－中国・四国地方の遺跡を中心に－」『中世土器研究論集－中世土器研究会20周年記念論集－』 日本中世土器研究会

柴田圭子2003「瀬戸内海における海賊の世界」『戦国時代の考古学』 高志書院

柴田昌児2005「久枝遺跡に展開した区画溝を有する中世後期集落について」『久枝遺跡　久枝Ⅱ遺跡　本郷Ⅰ遺跡』 ㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

田村憲美1995「在地」『日本中世史研究事典』 東京堂出版

中国・四国地区城館調査検討会2008『発掘された戦国期の平地居館』

中野良一1989「愛媛県の古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ　日本中世土器研究会

中野良一2004「南江戸地区の中世集落」『南斎院土居北遺跡　南江戸鬮目遺跡（２次調査）』

中野良一2007a「湯築城出土瓦の研究視点－特に大手側から出土した瓦について－」『河野氏と湯築城をとりまく諸問題』 伊予の遺跡と中世史研究会

中野良一2007b「中世伊予国の煮炊具について」『紀要愛媛』第７号

橋本久和1980『上牧遺跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会

日和佐宣正2002「伊予における地域権力の本拠」『中世城郭研究』第16号　中世城郭研究会

松野町教育委員会1999『史跡　河後森城跡－現在までの調査と成果－』

松村さを里2007「遺跡からみた湯築城下－道後町遺跡の調査から－」『河野氏と湯築城をとりまく諸問題』 伊予の遺跡と中世史研究会

湯築城資料館2003『湯築城をとりまく西瀬戸の戦国群像』

第７章　近　　世

土井光一郎

１　はじめに

愛媛県下で今までに刊行された県内の発掘調査報告書等に近世の遺構、遺物の記載がある遺跡を抽出したところ240箇所を数える。（兵藤2008）更に内容を精査し表採や包含層出土の遺物のみ掲載の85遺跡を除外すると実に近世関連報告は全体の65％の遺跡で何らかの報告がなされている。刊行された報告書より県内の近世遺跡の調査動向は、昭和55年（1980）を皮切りに平成４年（1992）までの12年間は１年あたり２～４件で、平成５年（1993）から増加傾向に転じ平成６年（1994）に14件とピークを迎えて平成10年（1998）までの４年間は、年次でかなり調査件数にばらつきが見られる様になる。

平成11年（1999）から平成18年（2006）までの８年間は、ほぼ年間11件を数え調査件数が安定する様になり、近年、特に松山市教育委員会文化財課（以下松山市教委）・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下松山市埋文）による近世遺跡のデータが日々拡充されてきている状況である。

２　近世とは

近世の概念は漠然としており、各調査員でまちまちであり一概に17～19世紀代とされているものを私見であるが、定義付けしてみたい。

近世とは国史大辞典によると、「安土桃山時代（織田・豊臣時代と江戸時代（徳川時代）とを合わせた時代名称であって、織田信長が京都に進出して、中央政権への道を歩み始めた永禄11年（1568）から、江戸幕府滅亡して明治維新が開始される慶応３年（1867）までの約300年を、ふつう近世とよんでいる。」とされているが、愛媛県というよりも四国においては、永禄11年（1568）は中世末期のただ中に有り、讃岐では細川氏の支配地域が三好氏の侵攻に晒され、伊予では南予の西園寺氏が大友氏より侵攻を受け、阿波では細川氏の庇護下にあった阿波公方足利義栄が永禄11年（1568）２月に将軍職宣下を受けるが、上洛せずに14代将軍として着任した。その年の９月には13代将軍義輝の弟義昭を奉じた織田信長の上洛によって失脚。この後、織田氏によって細川氏・三好氏は政治的、軍事的にも壊滅的打撃を受け阿波・讃岐の統治権が乱れ、長宗我部氏の侵攻を誘発する引き鉄となる。土佐では長宗我部氏が国内統一に奔走していた時期である。

土佐一国を統一完遂した長宗我部氏が天正12年（1584）には、細川氏・三好氏の衰退に乗じて阿波・讃岐をほぼ手中に収め、四国統一を目指すべく伊予国の河野氏・西園寺氏連合と対峙する状況であったが、翌天正13年（1585）に豊臣秀吉の四国征伐によってその情勢が一転する。

四国征伐を受けて豊臣秀吉に降伏した長宗我部氏は旧領の土佐国を安堵されるものの、阿波、讃岐は没収。伊予の河野氏・西園寺氏は排除され、領主不在となった領地にこの四国征伐での功

績の認められた武将がそれぞれ入封されるが、折しも文禄・慶長の外征によって新封領主不在の中、刀狩りや太閤検地や一国一城令等の施策を進捗させて旧体制である土豪的知行支配を排除し、幕府を中心とする領地内における入封大名権限の集中・強化につとめた事によって、中世という旧体制は政治的・経済的に終焉を迎えたと考えられる。更に、関ヶ原の合戦の賞罰で長宗我部氏が排除されて四国における旧在地勢力が駆逐され、四国の各地区に関ヶ原の合戦後の論功行賞で新たな大名が封ぜられる慶長13年(1608)が四国の近世の始まりと考える。

近世の終わりは文久3年(1864)の禁門の変に端を発する第1次長州征討で幕府の対応に佐幕と勤皇を支持する藩の対立が鮮明となり、慶応元年(1865) 第2次長州征討時には四国の諸藩の形勢はほぼ勤皇方に流れたが、高松藩・松山藩・徳島藩の三藩は、各藩主が幕府での役職や血縁親族関係のしがらみで佐幕側につかざるを得ず、慶応4年～明治2年の(1868 ～1869)戊辰戦争時も通じて高松藩と松山藩は佐幕を通し、徳島藩は戊辰戦争時になって新政府側についたが時遅く、三藩ともに朝敵として土佐藩や丸亀藩の占領を受けることとなり、城郭施設の破却整理や駐屯地設営などが占領軍の主導のもと行われ、明治2年の(1869)版籍奉還によって城郭等が国に接収される。これが名実共に近世(江戸時代)の終焉と考えられる。

よって、近世の終わりは明治維新ではなく、土佐藩や丸亀藩の占領が解かれて廃藩置県の施行される明治4年(1871)年を下限とするのが妥当と考えられ、近世は慶長13年(1608)～明治4年(1871)年までの263年間に該当するものと考える。これに基き本稿では17世紀～19世紀後半頃までの遺跡を対象とする。

3　愛媛県内の研究史

愛媛県に於ける近世考古学関連の研究史は陶磁史や生産史の一環として大正時代に須山正夫氏が伊豫史談で藩窯の東野焼について(須山1917)、続いて向井和平氏が砥部焼について発表したことを起点として(向井1925)、砥部焼を中心とした陶磁器史の流れは、ほぼ10年おきに細々とであるが紡がれてゆき、昭和40年代後半に砥部町教委や大内優徳氏に至り文献研究の面では大系付けられているが(砥部町教委1970) (大内1973)、窯体の発掘や遺物の調査等は皆無に近く考古学が補完的に機能していないのが現状である。また砥部焼を中心とした松山平野の焼き物については年々少しずつであるが研究されようになってきているが、近郊や東予・南予の近世期の小規模窯業跡については、県史や市町村史上で知られているのみで、全く調査等が手をつけられていないのが現状である。

愛媛県における近世遺跡の発掘の始まりは1980年の今治城の調査である(今治市教委1980)。特に目立ったものが無かったため周知度は低かった。1982年には当センターが砥部町において窯跡の調査を実施、「天〇辛夘　麻生焼」と書かれた皿が出土し、砥部焼の歴史に一石を投じることとなった(愛媛13)。また、1984年の松山城二の丸の発掘調査での大井戸遺構の発見によって二の丸庭園や松山城関連の書籍は数多く刊行されたが、遺構や遺物の研究等には結びつかずに近世の遺跡については2002年の愛媛県歴史博物館の企画展示で近世の考古学的調査成果が取り上げられるまで(石岡2002)、一顧だにされることはなかった。愛媛県歴史博物館の企画展示以降継続して

石岡氏が砥部焼をはじめ近世末期に伊予国で生産された陶磁器に関しての論考を数多く輩出するが(石岡2005・2006・2007)、その他の遺物や、遺構論的に考察を加えたものは松山城の家老屋敷部分を発掘調査した番町遺跡２次(兵藤2008)に至るまで皆無であった。

番町遺跡２次では、愛媛の刊行された報告書内から、今まで放置されていた近世にまつわる遺構・遺物の記載を抽出し遺跡の集成を行い(兵藤2008)、これが愛媛に於ける近世考古学研究の出発点ではないかと筆者は考える。本稿は兵藤氏の集成をベースに再精査し、報告されている内容はともあれ、県下には前述の通り相当数の近世遺跡が存在することが明らかとなった。以下、近年の成果と問題点を３点ほどに絞って紹介する。

４　近世城郭・城下町

近年、大手メディアの制作する大河ドラマが契機になったり、全国的な流れで各地に江戸期に築城された城が築城400年を迎える事を契機に城郭の整備事業を中心に実施され、城郭や城下町の発掘調査事例の増加を軸に近郊の集落や寺院、近世墓地に至るまで近世遺跡の発掘調査・研究が充実・増加傾向にある。

愛媛県下においては国指定・県指定史跡の近世城郭(松山城・今治城・大洲城・宇和島城)で発掘調査が実施されて県内では、各城の調査箇所で17カ所の遺跡が確認できる。

年報や概要報告で報告されている事例が多く、報告書の体裁を取って発行されているものは、松山城下の武家屋敷を対象とした松山市埋文の番町遺跡。当埋文の番町遺跡２次・県民館跡地・若草町遺跡Ⅱと、今治市教委による今治城の試掘関連２冊の６件しか無いのが現状である。

番町遺跡２次では、事実報告のみを脱して瓦や染付磁器等の出土遺物についての分類、分析を行い考察が加えられ、漆器や食物残滓である動物遺存体の分析を専門家に任せて報告を行っている(兵藤2008)。これは、当センターにとってはそれぞれの専門分野で最新の詳細なデーターが得られ、専門家側にも生の資料を分析する機会とデータの蓄積に寄与でき学際的相互にメリットの多い事象で今後活用推進してゆくべきではないだろうか。

特に遺物等についての理化学分析や、動物遺存体の分析については更に専門家の援用を促進させて、形態・法量分類では見えなかった事象についての心強いバックデータを集積してゆくことで、例えば、貝塚のように廃棄土坑における食物残滓の廃棄サイクルの発見や、近世在地系土器(陶磁器～土師器に至る)の胎土分析によってより詳細な土器の情報が得られるなど、他学問の援用で補強され、より精度の高い資料を得る必要性を感じる。

また、若草Ⅱ・県民館跡地の２遺跡を実際調査した筆者は、３冊の報告書と各城調査の年報や概要報告の遺構図・遺物実測図や写真を見ての感想であるが、遺物については各時期で石高・役職の多寡に関わらず日用雑器や赤絵の段重・西ノ岡焼・土人形等は一般流通品を用いていると考えられる。各武家屋敷毎で、形態や模様などはさほど大差が無いものに感じ、各々の趣味性や、階層性が垣間見られるのは茶道具や文具関係はもとより、特に大型～小型の皿に見られる。普段使いの物までには各々のこだわりは見られないが、その用途が接客を目的とするものに対しては使用したであろう“主”のセンスと経済力が現れている感を受ける。また、城下の役宅には、妻子

や使用人も含めて生活しており江戸時代における中流階級以上の生活の一側面を捉えることが可能である。武家屋敷跡の発掘調査件数が増えれば武士階級内での消費動向が若干なりとも把握できるのではと考えられる。城下町内の下級武士や町人居住区の調査に及べばさらに消費地での消費傾向が明らかとなり、遺物相の時期的変遷を追える可能性を秘めている。これを基に愛媛または各藩毎の遺物組成や編年などが組まれれば、近郊の村落などの小消費地における調査において大きく貢献することが考えられる。さらに、遺構論的には古絵図面に描き表されない城内外の給排水施設や塀の設置などにはある一定のルールが存在し各城とも何らかの共通項が有るように感じた。今後、近世城郭の調査が増えて詳細な報告書が刊行されることによって様々な切り口から考察を加えて研究を伸展させることを望むものである。

５　近世集落

集落としての調査事例は残念ながら見当たらないが、調査区内に近世の建物跡の一部や石列遺構をはじめとした遺跡は、現在の所10遺跡が確認されている。いずれの遺跡も掘立柱建造物の痕跡を各遺跡で数棟確認しているが、集落の調査と言える段階までには到達していないのが現状である。

また、この集落問題については中世期にも当てはまることであるが、一つの集落内に地位的・経済的格差により住居の大きさ、構造等が異なるものが混在するという点である。掘立柱建造物以外に束石を有した軽便な礎石建造物などもあり、近世の住居については、現存する古民家より村役人・町役人以上の階層に礎石建てや土台建てのものが確認できる。しかし、その他庶民の家の構造については時代劇や昔話などで、土間や一段高い床・畳敷きの家に住んでいるといった強烈なイメージがあるものの、実像ははっきりしていないのが現状であり、地域的・階層的格差の中で、各個の家・集落のあり方など400年という近い歴史の中に埋没して解らないことが多く存在する。

発掘調査件数の多い松山市埋文・松山市教委によっては2000年前後より松山平野北東部に位置する来住台地一帯のいくつもの遺跡で近世期の報告事例を積み重ね、ミクロな集落跡と言うよりも、田畑などの生産地（就業地）と居住区（散村）と葬地（墓地）との関係を示す近世期の近郊村落の景観復元の基礎資料を蓄積しつつあり、今後の調査研究に期待するものがある。

６　近世墓地

近世墓については、調査事例は1981年の松山市の調査が初見で（森1981）、現在の所50遺跡が確認されている。調査件数は当センターと松山市埋文・松山市教委が同数の18件を数え全体の72％を占める。当センターでは今治市の矢田平山近世墓で32基の墓坑を調査し、まとまった形での墓地の調査で考古資料的にも古人骨の資料的も高く評価を受けている遺跡である。それ以降の調査では近世墓は報告書に掲載される機会を失い、昨年、藤本清志氏の手によって宇和島正徳ヶ森城跡で報告されなかった近世墓群についての追加報告と県内の近世墓集成を行い（藤本2008）、愛媛の近世墓研究の端緒であると言える。

松山市埋文・松山市教委においても、近世墓・塚の調査事例が増え木製の箱棺や円筒形の早桶棺を用いて墓坑内に棺を正位に据えずに棺を横倒しにして埋葬する形態や、積石塚も近世墓の一形態であるという状況が明らかとなってきている(梅木謙一ほか2001・西尾幸則ほか1988ほか)。これらの事例は地域的な特色と捉えられ、調査の進展によっては近隣地域との比較によって更に墓地のありかたが明らかになると考えられる。

しかし、墓の構造的な解析は行われているものの墓地としての立地、すなわち地域的や集落・寺との関係までは追い切れていない。近郊の各地区毎で異なる檀家制度下における葬法の違い。城下町といった都市部における下級武士や町人等の葬法の違いや、各藩支配地における土器の編年などが進捗すれば葬法等の時期的変遷など、研究の余地は多く残っている。また、愛媛は山間部、海浜部、島嶼部と人の居住環境が多岐にわたり墓制のあり方も民俗地図等に載ってない単墓制や両墓制を採用した地域も発掘調査結果如何で明らかとなる可能性も考えられる。

また、近年2000年頃から、土居聡明氏をはじめ(土居2004)、清水真一氏、安岡道雄氏諸氏によって、南予地域一帯の石造物の調査が盛行し中世石造物の範疇に囚われず近世墓塔についても形式・石材についての調査研究がなされ、考古学とは別の角度から近世期の遺跡に対してのアプローチを行っている(保内町教育委員会1998・安岡道雄2004・宮田基継2005・清水真一2006ほか)。

近世墓地については、現在の墓地内に重複して存在し、石塔など表象施設が顕在していることから発掘調査をしなくても比較的調査がしやすい利点があり、南予地域一帯でのムーブメントは評価できる傾向と考える。

7　現状認識

近年の近世の遺跡の発掘については、「平成9年8月13日付け庁保記第182号文化庁次長通知」がベースとなって「平成10年9月29日付け庁保記第75号文化庁次長通知」で近世期・近現代期の遺跡に関しての一定の指針が与えられ、それを基に各都府県教育委員会で発掘調査や出土品の取り扱い基準が平成11年～13年の間に各々策定されている。それに基づいて発掘調査は実施されているのであるが、周辺近県では近世の遺跡についての調査・報告事例は増加傾向にあり、本県においても近世遺跡の調査が徐々にではあるが開始され始めている。

愛媛県は前述の通り、山間部・平野部・海浜部・島嶼部と多岐にわたる生活の場所が存在し、幕藩体制期には八藩体制下に天領が加わりモザイク状の支配体制が敷かれている上に、この八藩体制は地域を越えて藩の飛び地が複雑に交錯する状況下の中で、それぞれの独自色が存在していたことは想像に難くなく、愛媛独自の近世の地域史の実像はまだ欠片も見えてきてはいないのが現状であると考えられる。

8　小結

愛媛に於ける近世考古学については調査事例が少ない段階を卒業し、ようやく研究が産声を挙げたばかりの段階に入ったと考えられるが、資料の質・量的にはまだまだ不足な点が多く今後充

実した発掘調査成果が報告書によって公表されることを切望し、また、調査従事者として報告に微力ながら寄与したいと考える。

近世の遺跡の調査手法は、大きくは従来の中世以前の遺跡の調査と変わりないが、時代が現代に近いだけに時代劇や、歴史番組等のメディアから受容した映像を元にした時代性の思いこみを排除して、より調査対象物に対する意識と認識が重要であり、考古学以外の遺跡の所在する地域の歴史的な特性や文献・絵図・民俗資料等を補完して遺物や遺構を観察しなければ、誤った解釈のもとに破壊を招く危険性を大きく孕むものである。

また、寺院や墓地・個人住宅(旧家)など現在も個人所有者が介在し、素直に文化財として取り扱いにくい面も存在するなど、従来の遺跡を発掘するときよりも利権が煩雑で、他学問の援用のウエイトも大きく従来の考古学と相容れない面も存在することを認識するべきであろう。

また、受託事業をメインに据える団体での近世遺跡取り扱いの問題は、実際問題として個人の研鑽や力量で解決出来得る問題では無いと考える。「鶏が先か卵が先か」的話になるが、先ず収穫物を得るためにはそれなりの土壌づくりと種を蒔く必要があるのではないだろうか。

近世考古学の先進地である東京や関西から考古学的資料の報告の充実度や研究が遅れること20数年以上の開きがあり、この遅れは一朝一夕に埋まるものでもない。近世遺跡も組織的に調査を実施し、充実した調査・研究資料を一つ一つ蓄積することで、愛媛の近世遺跡データによって地域史の一端を明らかにすることが当センターに科せられた責務ではないかと考える次第である。

（2008年8月15日）

参考文献

須山正夫1917「瀬戸助焼に就いて」『伊豫史談』第11号　伊豫史談會

向井和平1925「砥部焼の沿革」『伊豫史談』第43号　伊豫史談會

曽我部一郎1934「陶匠　瀬戸助研究」『伊豫史談』第81号　伊豫史談會

寺内信一1935「砥部磁業史」『伊豫史談』第82号　伊豫史談會

愛媛県文化財保護協会1972「特集 伊予のやきもの」『愛媛の文化』12号　愛媛県文化財保護協会発行

大内優徳1973「伊予の陶磁」 雄山閣

吉田忠明1995『愛媛の焼き物ー愛媛県における近世の窯業』 愛媛文華館

岡田敏彦1997『近世窯業遺跡データベース集成－愛媛県』 国立歴史民俗博物館研究報告第73集

岡田敏彦2001『国産紀年銘土器・陶磁器データ集成　下巻－愛媛県』 国立歴史民俗博物館研究報告第89集

石岡ひとみ2006「伊予窯出土の青磁型皿」『研究紀要』第11号　愛媛県歴史博物館

石岡ひとみ2007「近世砥部焼磁器碗に関する基礎的研究－上原窯跡採集資料を中心として－」『研究紀要』第12号　愛媛県歴史博物館

今治市教育委員会1980『今治城跡発掘調査報告書』

藤本清志2008「正徳ヶ森城跡の近世墓出土遺物と県内の近世墓」『研究紀要』第８号　㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

森 光晴ほか1983『国道11号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』 松山市教育委員会

西尾幸則ほか1988『高月山古墳群調査報告書』 松山市教育委員会

田城武志ほか1992『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』 松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

田城武志ほか1999『松山市埋蔵文化財調査年報　11』 松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
梅木謙一ほか2001『小野地区の遺跡　北梅本悪社谷遺跡２次調査地・北梅本北池遺跡・北梅本太尺寺遺跡』 松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
梅木謙一ほか1993『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』 松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
栗田正芳ほか1994『桑原地区の遺跡Ⅱ』 松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
保内町教育委員会1998『保内町の遺跡１　遺跡詳細分布調査報告書』 保内町教育委員会
保内町教育委員会2003『保内町の遺跡２　遺跡詳細分布調査報告書』 保内町教育委員会
土居聡明2004『伊方の石造物調査報告書Ⅰ』 伊方町教育委員会、町見郷土館
大西英利2002「南宇和郡内近世暮塔の紀年銘の「年」の異字の事例」『よど』第３号、西南四国歴史文化研究会
羽藤明敏2002「曾根村庄屋青木家　古文書と墓石銘からの郷土史研究」『よど』第３号、西南四国歴史文化研究会
安岡道雄2004「南宇和に於ける初期駒形碑」『よど』第５号、西南四国歴史文化研究会
松浦郁郎2004「「千人塚」清良記　岡本城の戦い」『よど』第５号、西南四国歴史文化研究会
宮田基継2005「鄙びからの「石塔墓碑考」－石造墓碑の初歩的思考と学習－」『よど』第６号　西南四国歴史文化研究会
宮田基継2006「鄙びからの「石塔墓碑考」２－四国西南の寶印塔調査による一考察－」『よど』第７号　西南四国歴史文化研究会
安岡道雄2006「宇和島海の双式板碑」『よど』 第7号　西南四国歴史文化研究会
清水真一2006「日土町防川にある五輪塔について」『西四国考古学研究所　所報』第７号　西四国考古学研究所
清水真一2006「日土町防川にある五輪塔について⑵」『西四国考古学研究所　所報』第８号　西四国考古学研究所
清水真一2006「庄屋墓地の中の五輪塔」『西四国考古学研究所　所報』第11号　西四国考古学研究所
河野 茂・清水真一2006「保内町喜木城高所在の五輪塔」『八幡浜史談』第12号　八幡浜史談会
宮田基継2007「遺稿　鄙びからの「石塔墓碑考」３－西南四国の家型石塔ラントウ分布による一考察－」『よど』第８号　西南四国歴史文化研究会
安岡道雄2007「伊予の石祠型墓石を訪ねて」『よど』第８号、西南四国歴史文化研究会
羽藤明敏2007「宮野下物語　傘屋かんたつのルーツ　墓石銘からの「庄屋研究」」『よど』第８号、西南四国歴史文化研究会
清水真一2007「庄屋墓地の中の板碑⑴」『西四国考古学研究所　所報』第13号、西四国考古学研究所
清水真一2007「愛媛県八幡浜市牛名にある山本家墓地について」『西四国考古学研究所　所報』第18号、西四国考古学研究所
清水真一2007「南予に於ける江戸時代五輪塔の研究１」『西四国考古学研究所　所報』第23号、西四国考古学研究所
清水真一2007「南予に於ける江戸時代五輪塔の研究２」『西四国考古学研究所　所報』第24号、西四国考古学研究所
清水真一2008「南予に於ける江戸時代五輪塔の研究３」『西四国考古学研究所　所報』第25号、西四国考古学研究所
清水真一2008「南予に於ける江戸時代五輪塔の研究３の追加」『西四国考古学研究所　所報』第27号、西四国考古学研究所
清水真一2008「南予に於ける江戸時代五輪塔の研究４」『西四国考古学研究所　所報』第28号、西四国考古学研究所
清水真一2008「下波板碑の石材の採石地」『西四国考古学研究所　所報』第29号、西四国考古学研究所
清水真一2008「水ヶ浦薬師堂の中近世石造物の石材」『西四国考古学研究所　所報』第30号、西四国考古学研究所

第８章　近　　代

多田 仁　藤本清志

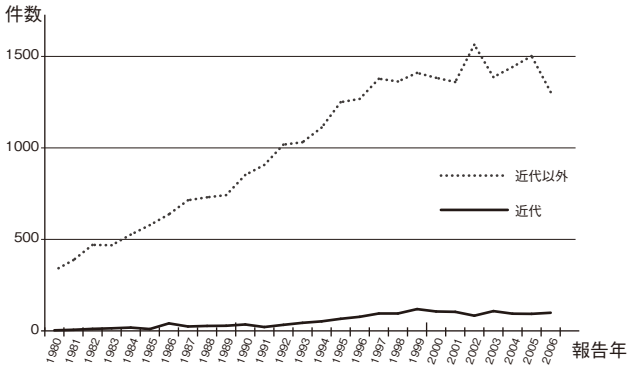
１　はじめに

1996年に始まった文化庁による近代遺跡の全国調査は、近代化遺産の指定・登録、さらにその保護を目標として各都道府県が主体となって開始され、本格的な調査が各地で具体化することになった。この調査は日本の近代化の過程を理解する上で重要な遺産の現状調査を目的としており、近年では近代化遺産全国一斉公開に伴うシンポジウムや展示会の開催など、近代化遺産に対する理解や普及啓発にむけた様々な取り組みが進められている。また、これ以前にも行政主導による協力者会議の設立や(1994年)、史跡名勝天然記念物指定基準の改正など(1995年)、近代遺跡の全国調査に向けた布石とも呼ぶべき諸準備が進行していた。

こうした一連の調査研究活動で、近代化遺産の重要性やその保護政策の必要性が議論され、1996年における登録文化財制度の導入や、地方公共団体を中心に設立された全国近代化遺産活用連絡協議会が発足したことは、近代化遺産の保護と活用に大きく貢献したと高く評価できるだろう。つまり、近代の遺跡を文化財の範疇として扱い、保護・活用していく考えに連動していると評してよいのである。

概略的な文化財政策の動向については前述したことに尽きるだろうが、考古学的な調査研究については、1980年代からその萌芽をみることができる。主要な研究事例を挙げると、当真嗣一氏によって沖縄から発信された戦跡考古学の提唱や、坂詰秀一氏による現代史考古学の提唱などがあるほか、欧米で発展した産業考古学(industrial archaeology)の考えは近世考古学の概念を生み出し、近世から明治・大正時代を対象とした産業関連遺構の調査を実現したのである(坂詰1987・2000、鈴木1988、当真1984)。また、全国的な調査動向としては、管見する限りでも1980年代後半になって一時的な増加をみるが、基本的には1990年代後半に増加傾向を見せ、現在ではほぼ一定の割合で推移している状況が考えられるだろう(第１図)。さらに大きな動きとしては、1998年の日本考古学協会沖縄大会における「戦争・戦跡の考古学」の分科会設定がある。これを坂詰氏は「日本の考古学が、近・現代をも対象にすることを宣言したわけである」と位置づけ、今後の課題として留意する必要性を強調している(坂詰2000)。

ここで愛媛県内の状況を振り返ると、詳細は後述するが、基本的には近代遺跡に関する調査研究に乏しく、継続的または発展的な調査研究が体系化されている



＊数値は愛媛県埋蔵文化財調査センター所蔵の報告書より調査

第１図　近代遺跡の報告件数

状況は看取できない。ただし、個別研究レベルでは池田宏信氏による戦時遺跡の調査、しまなみ海道の近代化遺産を網羅した大成経凡氏の著書、伊東孝氏による南予地域の調査など、近代遺跡の発見や検証などの試みは、その萌芽を感じさせるかのようである(池田2001、伊東2000、大成2005)。

以上のように、近代遺跡の調査はここ近年でその必要性が強調されるようになり、行政単位での調査も若干ではあるが増加傾向を示すようである。しかし、愛媛県の事例を見ても考えられるように、全国的には地域間で調査件数の差が生じていることが想起され、学問的評価を与える前提作業が不備な状態が続いている。また、近代考古学の調査研究は学史的にみて戦跡考古学の提唱が強く影響していることや、近代遺跡特有の地上資料や埋没資料という残存状況の差から生じる記載・観察法の手法的問題なども残る。行政主導で開始された近代化遺産の調査は意識の改革という点で高く評価できるものの、現場に立たされた調査機関または調査担当者の学問的な問題意識の形成に至ってないのが現状だろう。

こうした問題点を踏まえながら、本稿では愛媛県内の近代に関する調査成果を整理し、近代遺跡に対する取り組みと行政的立場での対応について考え、研究史から学ぶ考古学的成果の在り方についてその課題を示してみたい。

なお、近代の時間的範囲については、学史を鑑みて明治元年(1868)から第二次世界大戦終結年の昭和20年(1945)までとする。これは文化庁の近代遺跡調査実施要綱(1996年)に符合するほか、個別研究でも同じ設定を採用するものがあり(伊藤1994)、本稿でもこれを踏襲しておく。さらに時代呼称については、研究初期には第二次世界大戦中の遺跡について「現代史」または「近・現代史」という言葉が使用されているほか(坂詰1987ほか)、1868年の明治維新以降を「近現代」と呼ぶ考えもあるが(五十嵐・坂本1996)、ここでは考古学的成果を踏まえた時代呼称を将来的な課題とし、便宜的に「近代」と呼称しておきたい。そして、近代としての時間的な位置づけが可能な考古資料については、近代遺跡・近代遺構・近代遺物と呼んでおく。

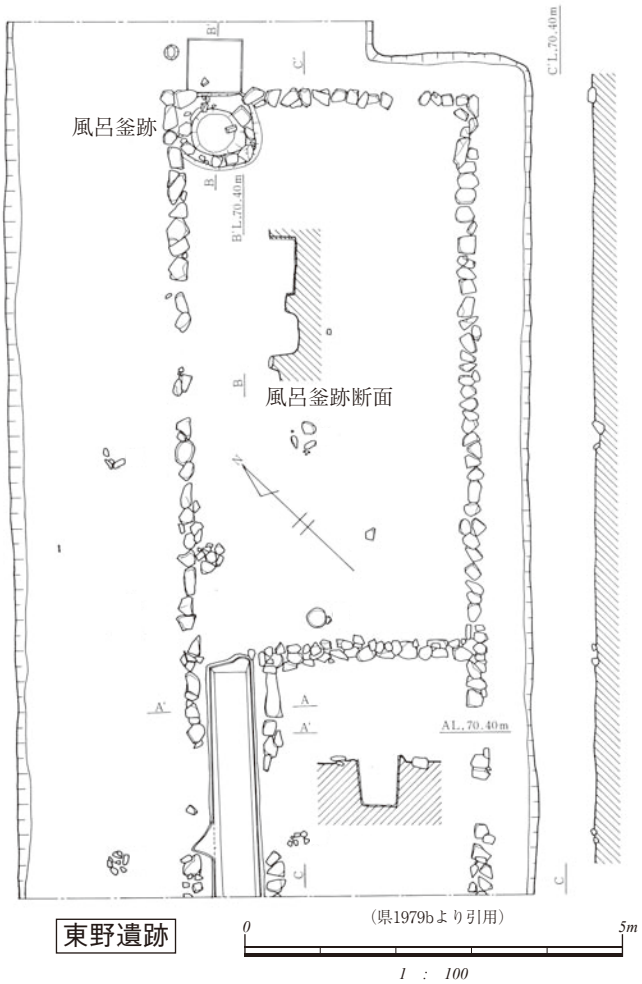
２　調査事例

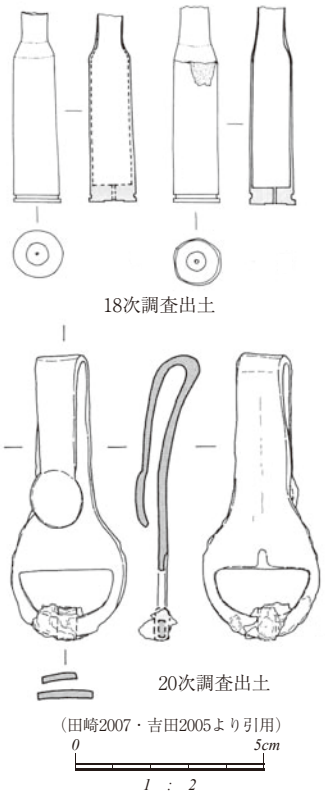
⑴ 戦時遺跡(第２図)

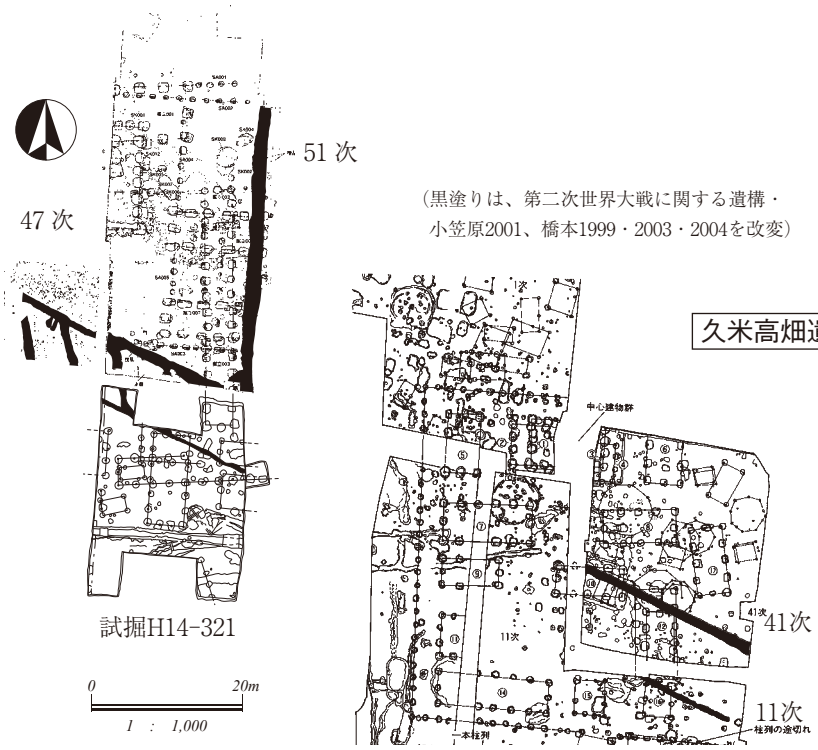
県内における戦時遺跡の発掘調査の初例は、1978年に調査が行われた東野遺跡であろう(県1979b)。調査区南端部に11m×4mにわたって礎石が並べられた状態で検出された。この礎石列は聞き込みの結果、満州移民農兵隊兵舎跡で６棟のうちの１棟と判明し、北角にある円形の掘り込みは風呂釜の跡と推定されている。

現在まで継続的に調査されている久米高畑遺跡群や文京遺跡では、陸軍松山西飛行場に関連すると推定される溝や、青銅製銃弾・薬莢、軍刀吊り金具などが出土している(橋本1999ほか、吉田2005ほか)。陸軍松山西飛行場関連の溝は未検出部分があるが、東西におよそ1㎞にわたって確認されており、誘導路や塹壕であると推測されている[(1)]。この他、文京遺跡では旧陸軍練兵場時代の演習用塹壕なども検出されている。

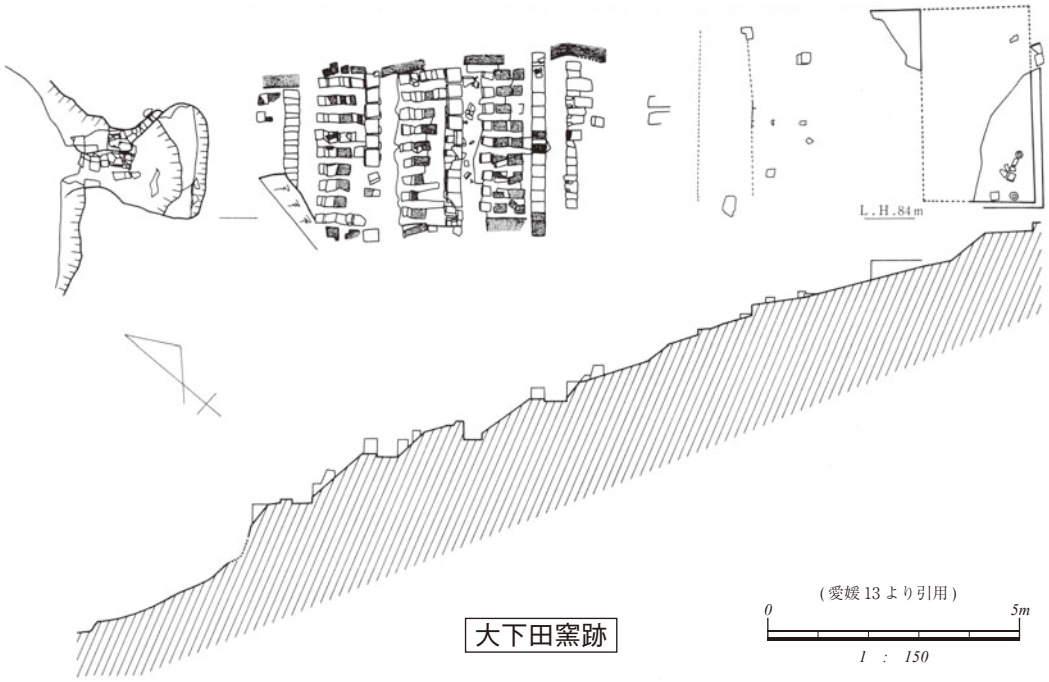
戦争の惨状が発掘調査によって確認された事例として松山城東郭跡がある(橋本2007)。ここで


風呂釜跡
風呂釜跡断面
C L.70.40m
B' L.70.40m
A L.70.40m
東野遺跡
（県1979bより引用）
0
5m
1 : 100


18次調査出土
20次調査出土
（田崎2007・吉田2005より引用）
0
5cm
1 : 2
文京遺跡


51 次
47 次
試掘H14-321
0
20m
1 : 1,000
（黒塗りは、第二次世界大戦に関する遺構・
小笠原2001、橋本1999・2003・2004を改変）
久米高畑遺跡群
中心建物群
41次
11次
本柱列
柱列の途切れ

第２図　県内の戦時遺跡

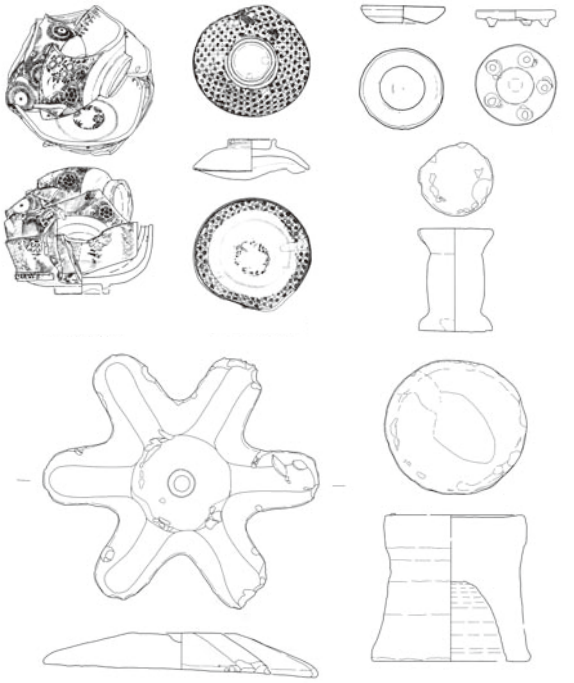


大下田窯跡

（愛媛 13 より引用）

0　5m

1 : 150

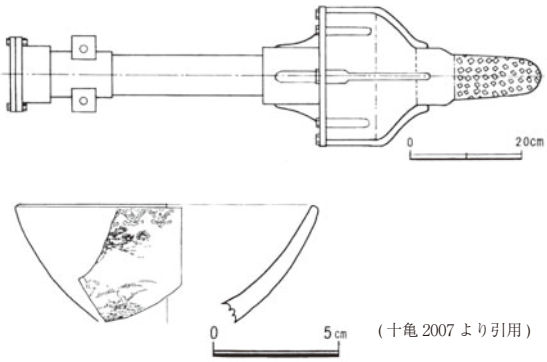


三間焼

（石岡 2005 より引用）

0　20cm

1 : 6



（十亀 2007 より引用）

女子岬精錬所跡

第３図　県内の産業遺跡

は昭和20年７月26日の松山空襲で焼け落ちた校舎の残骸や焼土・炭化物が、調査区南東端の石組溝中に堆積していることを確認している。

これらの他に詳細は不明であるが、大峰ヶ台遺跡第４次調査では径８ｍで正八角形コンクリート製の高角砲台座跡、県民館跡地では旧陸軍松山兵営や占領軍の関連施設が確認されている。（愛媛81、栗田1995）。また、長谷遺跡や岩子山西麓遺跡では防空壕が確認されている（愛媛33・67）。

調査当時は多くの戦時遺跡に対して明確な調査目的がなく撹乱として扱われたためか、詳細な記録もとられていなかったと思われ、報告書でも記述がほとんど確認できないのが現状である。

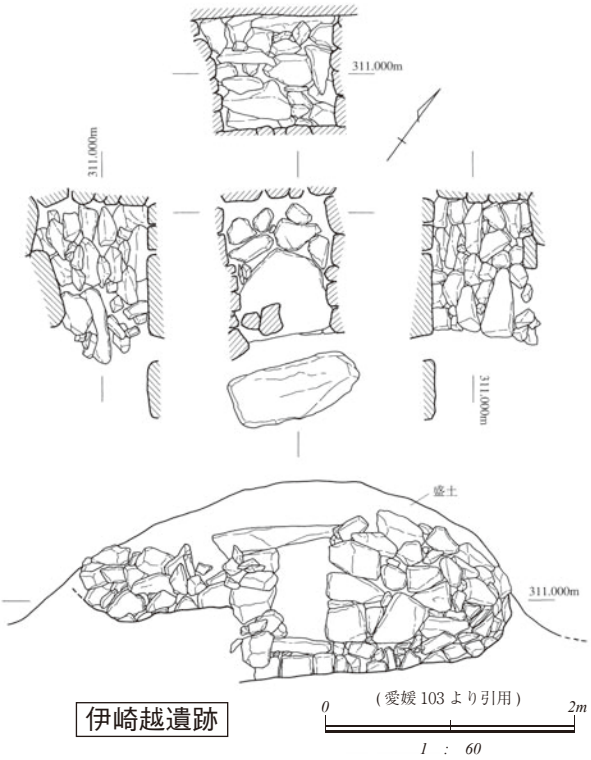
⑵ 産業遺跡（第３図）

近代窯跡は県内に約20基が知られており、発掘調査事例としては土壇原窯跡・大下田２号窯跡・志津川窯跡の３例、そして三間焼に関しては窯道具の研究報告が挙げられる（石岡2005、愛媛13、愛媛県史編さん委員会編1986、岡田1997、重信町教育委員会1988、長井1986）。大下田２号窯跡は、水平距離19ｍ、垂直距離11ｍ、９連９房の登窯で周辺からは赤色釉瓦が出土している。志津川窯跡の全体規模は約15ｍ程度と推定されており、西岡焼に類似する窯道具や陶片が確認されている。

鉱山関連の遺跡は、別子銅山と市之川鉱山が近代遺跡として詳細調査が実施されている（今井2002・2007、柳2002）。この他に女子岬精錬所跡では明治時代末期の遺物が採集・報告され、柳谷銅山製錬所跡では焼鉱窯の調査や吹床内残留物の分析報告が行われている（十亀2007、宮本・丸山1995・1996）。

⑶ 宗教遺跡（第４図）

宗教に関する事例として伊崎越遺跡では石造りの祠２基が調査されている（愛媛103）。ともに角礫の積み石と盛土によって覆われ、１号祠の規模は径約3.5ｍ、最大高約1.2ｍを測り、２号祠は径約3.0ｍ、最大高約1.0ｍである。



第４図　県内の宗教遺跡

３　研究の動向

本章では愛媛県内の近代遺跡に関する研究について、種別ごとにその動向を簡単に触れておきたい[(2)]。また、考古学的な調査研究以外においても、重視される諸研究については必要に応じて取り上げた。なお、調査事例については、戦時遺跡約10例、産業遺跡約10例、宗教遺跡１例を抽出することができた。

⑴ 戦時遺跡

県内でも戦時遺跡については古くから注視

されていたようで、1978年に確認された東野遺跡における満州移民農兵隊兵舎跡の場合、研究の黎明期にありながらの記録保存は高く評価できる。また、松山市教育委員会によって確認された陸軍松山西飛行場関連の遺構については、池田氏の成果で詳しく紹介されているためここでは詳細を割愛するが、聞き取りによる工法と考古学的記録との比定作業も可能となってこよう。

以上のように考古学的調査による戦時遺跡の詳細が次第に明らかになりつつあるが、一方では最も普遍的に存在したであろう防空壕や塹壕などの確認について、その記録が公開されていないものがあることなど、現状では資料蓄積に問題点を残すことも否めない。

各種遺物については、旧陸軍松山兵営練兵場跡地(文京遺跡)における銃弾や軍刀吊り金具の報告、さらに旧陸軍松山兵営跡地(松山城内)で陸軍航空機搭載用の機関銃が確認されるなど、具体的な資料が蓄積されつつある。これらの遺物は県内で詳細な研究がなされておらず、その型式学的研究についても今後の課題となるだろう。

考古学的調査以外には、池田氏による精力的な戦時遺跡の報告がある(池田2001)。氏は松山市域における戦争当時の施設が存在した場所について、聞き取りや文献などの調査によって詳細に把握している。さらに氏の研究は八幡浜市などにも拡大しており(愛媛新聞2008.8.13付)、一連の調査研究が高く評価できるばかりでなく、今後にも大きな期待が寄せられることになろう。

戦時中の様相を後世に伝えることを目的とした写真展や展示会も各地で行われているが、近年では愛媛県歴史文化博物館による「愛媛と戦争」と題する特別展が開催されている(平井2008)。展示では当時の生活用品や武器などが展示されたほか、戦意啓発を目的としたポスターや刊行物など、多くの分野にわたる遺品が公開された。この展示は歴史的事件ばかりでなく、戦時中の日常あるいは戦時政策に焦点をあてた展示として貴重なものであろう。もちろん、こうした展示が考古学的調査における補助的役割を果たすことは間違いない。

⑵ 産業遺跡

各種産業に関連する考古学的事例については、やはり窯業関連遺構と農業に関する遺構・遺物が目立つようである。窯業関連では土壇原窯跡・大下田２号窯跡・志津川窯跡が近代窯の代表的な遺跡として知られており、このうち大下田２号窯跡については瓦窯とされるものである。瓦窯に関連する遺構としては桑原田中遺跡３次調査における粘土採掘の可能性がある土坑があり、瓦窯研究の課題はまだ多く残されている(河野ほか1997)。

土壇原窯跡の陶磁器については、すでに長井数秋氏が伊万里焼の影響を受けながらも砥部焼の範疇を逸脱しないことを指摘している。さらに志津川窯跡の調査では、当地の代表的近世窯である西岡窯と関連をもつことが指摘されている(山本2001)。これは聞き取りや文献調査、窯道具や陶磁器の類似性から考証されている。

さらに、県内における近代窯の研究について、御荘焼と三間焼の研究を挙げることができる。御荘焼については現状で考古学的調査の事実は確認できないが、藤田儲三氏によって６ヵ所の窯跡が紹介され、各窯の詳細が述べられている(藤田1992)。三間焼の考古学的な調査については、中岡修也氏による採集遺物の紹介が始まりであろう(中岡1988)。後に石岡ひとみ氏による窯道具の集成・研究が行われており、三間焼資料の考古学的な事実記載が公開されている(石岡2005)。

また、近代における印判手をテーマとした展示が愛媛県歴史文化博物館で行われており、これに伴って県内の近代窯から出土した印判手関連の報告がなされた(石岡2006)。

これまでの近代陶磁器研究については、土壇原窯・西岡焼・御荘焼・三間焼などで砥部焼との関連が述べられており(石岡2006、藤田1992、山本2001ほか)、愛媛県全域で体系づけられた論証が実現する可能性も高く、今後の調査研究に期待できる分野である。

農業関係の遺構は、八町遺跡・南久米町遺跡４次調査地などで畝や鋤跡の報告があるほか、八倉宮ノ北Ⅱ遺跡で暗渠が報告されている(愛媛31、河野ほか2004、長井1991)。こうした農作業の痕跡は比較的多くの調査で確認されていると察するが、実際の発掘現場では撹乱として処理されることも多い。一つには埋没状況や遺物による時期認定の難しさが要因となっているのだろう。確かに考古学的手法による時期認定では限界があるのは否めず、近代史研究で通常のように行われている聞き取りなどの方法も補完的に用いる必要があろう。

重工業などに関するものでは、別子銅山や西宇和郡地域に所在する鉱山などの研究がある。別子銅山の研究は今井典子氏によって精力的に進められ、総延長約30㎞にわたる遺跡群の存在を明らかにしている。また、氏は銅山開発の経緯を第１～４期に時期区分しており、今後は遺物の詳細な検討が必要であることも述べている。西宇和郡では十亀幸雄氏による女子岬精錬所跡の詳細な報告がある。この精錬所は伊方町三崎精錬所を構成する一精錬所とされ、明治30年に開業しており、欧米からの近代化が進められた時期に操業されたことで知られている。氏は精錬遺構と共時性の高い陶磁器の報告も行っており、その遺物の年代は明治末であることから、精錬所操業中に残されたものと考えている。

さらに西宇和郡地域では、伊東氏による継続的な踏査が行われている(伊東2000)。氏は旧明浜町のセメント窯や旧保内町の柳谷鉱山と川之石選鉱場について紹介しているが、中でも柳谷鉱山に残される焼鉱窯の構築については、江戸時代からの技術を踏襲する可能性を明記している。ちなみに氏によれば西宇和地域は全盛期に約80ヶ所の銅山が存在したとされており、本地域の豊富な含銅鉱脈が背景にあることも示唆している。

また、近年では大成氏によって、芸予諸島地域の近代化遺産が紹介されているが、ここでは比較的目立ちやすい戦時遺跡や鉱山跡ばかりでなく、発電所や造船所、漆器店舗などにも目を向けている(大成2005)。今後の新たな視点として明記しておきたい。

⑶ 宗教遺跡

県内で管見できる唯一の宗教関係の調査事例である伊崎越遺跡では、２基の石造りの祠が調査されている。これらは明治時代以降における神社制度の整備過程で残されたもので、この地域での対応を示す現象として評価されている。調査は非破壊による実測作業が行われており、高速道路建設の直前に近隣の神社へ移築復元された。また、この周辺ではチャートあるいはその岩陰を利用した宗教関連遺構が散見でき、この地域の特徴として位置づけられている。

⑷ その他

近代における庶民の暮らしに関連する生活痕跡については、柱穴、廃棄土坑(ごみ穴)、石組などが報告されている(河野ほか1998、愛媛76、愛媛121ほか)。こうした遺構についても農業に関

する遺構で述べたように、撹乱などの扱いで処理されることが多いと考えられる。ただし、廃棄土坑（ごみ穴）の遺構は遺物量も豊富で、近代陶磁器の研究には有意性の高い資料として位置づけることができるばかりでなく、陶磁器以外の遺物についても量的な出土が見込まれるため、考古学的調査では積極的に取り組むべき分野であろう。

４　今後の課題

ここまで県内における近代遺跡の調査とその研究史について整理してきたが、ここでいくつかの問題点あるいは課題を導き出すことができる。まず、第１点目には近代遺跡の発掘調査に濃淡があること。そして第２点目には地上資料の扱いである。

まず第１点目の問題点は、近代遺構に関する報告のムラが考えられることである。先述したように、調査の段階で撹乱という扱いを受けた場合、断片的な調査記録を残すのみになる。つまり、発掘段階における調査者の選択が生じてしまうからであり（五十嵐・坂本1996）、発掘に従事する多くの担当調査員が経験していることと察する。そして、この背景には近代または現代まで埋蔵文化財とした場合の影響が、件数の増加・経費・人的問題などのように単純でないことを（杉本1995）、発掘調査に携わる担当者自身が心得ているからである。

しかし、冒頭でも述べたように、全国的には近代遺跡の調査も当然のように行われるようになってきた。さらに、近年の資料増加によって近代および現代資料をどのように考古学的資料として位置づけるかが問題視されており、これを「近現代考古学」と呼んで体系づけようとする動きもある（五十嵐・坂本1996）。考古学的調査を担当する行政機関も、この風潮を無視できない段階に来ていると理解すべきである。

危惧される問題の解消法については今後の課題としておくが、当面では調査を実施する遺構・遺物の選択も考慮しておく必要がある。また、発掘調査に取り掛かるまでに、周辺の歴史的な背景を調べておくことによって、近代遺跡の存在を予測することも必要であろう。もちろん、試掘調査においても近代遺構の存在を意識しておけば、その把握は比較的容易になるはずだ。さらに近代遺跡に対して有効な手段である聞き取り調査も不可欠となろう。こうした事前の下調べを発掘調査体系の一部として位置づければ、近代遺跡に対する調査法が自ずと導き出せるであろう。

第２点目の地上資料に関しては、破壊を受ける場合の対処を考慮しなければならないことや、良好な状態で後世に残す取り組みが必要となるだろう。このうち後世への近代化遺産として継承していく取り組みについては、既に文化庁が方向性を導き出しており、全国的には博物館などの機関でもその取り組みは進められていることだろう。

このことを考慮した時に考古学的手法が担える場面は、やはり破壊に伴う記録保存と呼ばれる対処法であろう。また、緊急的な記録保存を必要としない場合でも、調査研究を進める上での資料化を念頭に置く必要がある。考古学的手法による実測図化などは、写真記録以上の有効な記録手段を持ち、近代遺構の具体的な理解の補助として、その役割は大きなものと確信する。

ここで近年における県内の近代史に関する動向をみると、平成13・14年度に行われた愛媛県による「愛媛県近代化遺産等総合調査」では、伊東氏によって県内で約1,300ヵ所の近代化遺産が

抽出され、地域による分布差があることを指摘している(財団法人えひめ地域政策研究センター2003)。この報告は『愛媛温故紀行』として刊行されており、本書中には県内の近代化遺産リストが掲載されている。今後はこれを活用した詳細な研究が期待されるだろう。また、愛媛新聞誌上では第二次世界大戦当時の戦跡や出土品を紹介する「戦争を掘る」が12回に亘って連載されたほか(愛媛新聞社2008.7.15付ほか)、アメリカ軍による空爆の被害にあった松山市内においては、その犠牲者を供養する慰霊塔が築かれ、過去の出来事を風化させまいとする市民の献身的な活動もある(愛媛新聞2008.8.11付)。こうした供養塔などについては考古学的な位置づけは難しいが、歴史上の事件を記憶する地上資料として保存・活用する意義は高い。

図版１　向山戦争遺跡の現地説明会

四国内での近代遺跡に関する動向としては、2008年度に実施された高知県埋蔵文化財センターによる向山戦争遺跡の調査がある(図版１)。ここでは国道建設に伴う事前調査として約４ヵ月間の調査が行われており、太平洋戦争末期に旧日本軍が作戦行動として建設した交通壕や陣地遺構などが確認された。調査終了間際に行われた現地説明会では約400名の参加者を数えており、一般市民の強い関心を示す結果が出た。

以上のような動きの背景には、わずか60数年前の戦時状況さえ具体的な事実の把握が難しくなっている状況があるからで、今こそ行政主導の近代史をテーマとした歴史叙述が必要とされており、さらには個別レベルの調査・研究を体系的なものに昇華させることも課題となろう。

また、近代遺跡の発掘調査・研究・解釈については、冷徹な学術的考察が必要となるであろう。特に戦時遺跡の場合、歴史教育として有益な資料提示の側面は持つものの、イデオロギーや政治運動に都合のよい解釈が危惧されることも確かである。こうした遺跡の理解は歴史学的な評価を与えることが出発であり、郷土の成り立ちと日本の歴史を振り返り、今に至る歴史学的根拠を導き出すための学術的作業が不可欠となるであろう。

本稿では近代遺跡に関する調査研究などを振り返り、学史的評価を与えることに努めたつもりであるが､取り上げることのできなかった事例や文献が数多くあるのではないかと危惧している。この点は筆者らの力量不足にほかならない。数々のご批判・ご指導を仰ぎたい。

今回の集成にあたって、遺跡・資料見学や資料検索については多くの皆様からご協力を得た。以下に記して感謝申し上げたい。

石岡ひとみ　池田宏信　片岡大介　重松伸卓　出原恵三　土井光一郎　橋本雄一　(敬称略)

(2009年１月14日)

註

⑴　久米高畑遺跡群および松山城東郭跡については、橋本雄一氏のご教示を得た。

⑵　近代遺跡の分類については文化庁が1996年に提唱している（柳1999）。これは①鉱山、②エネルギー産業、③重工業、④軽工業、⑤交通・運輸・通信業、⑥商業・金融業、⑦農林水産業、⑧社会、⑨政治、⑩文化、⑪その他の11項目におよぶ「分野区分」で、現状では近代遺跡の分類法として最も詳細に提示された分類案であろう。その他には、五十嵐・坂本氏による「生産遺跡」、「公共的施設跡」、「集落遺跡」などの案、さらに戦跡遺跡に限定した分類案など、現状では様々な考えがある（五十嵐・坂本1996、伊藤1994）。本稿では明記したように４つの区分を用いているが、今後の調査によってはより細分化される可能性もある。今回はあくまでも便宜的なものであることを断わっておきたい。

参考文献

五十嵐彰・坂本宏児1996「近現代考古学の現状と課題」『考古学研究』43-2、考古学研究会

池田宏信2001『翔べなかった少年兵　松山海軍航空隊始末記』 晴耕雨読

石岡ひとみ2005『伊予陶磁器関係資料（三間焼窯道具）』 愛媛県歴史文化博物館

石岡ひとみ2006『近代えひめのやきもの　印判手のわん・さら・はち』 愛媛県歴史文化博物館

伊藤厚史1994「負の文化財」『文化財学論集』 文化財学論集刊行会

伊東 孝2000『日本の近代化遺産』 岩波新書

今井典子2002「16　別子銅山」『近代遺跡調査報告書　－鉱山－』 文化庁文化財部記念物課

今井典子2007「別子銅山」『考古学ジャーナル』562、ニュー・サイエンス社

愛媛県史編さん委員会編1986『愛媛県史　芸術・文化財』愛媛県

大成経凡2005『しまなみ海道の近代化遺産』 創風社出版

岡田敏彦1997「愛媛県」『国立歴史民俗博物館研究報告』73、国立歴史民俗博物館

財団法人えひめ地域政策研究センター2003「愛媛の近代化遺産を考える」『愛媛温故紀行』

坂詰秀一1987「現代史と考古学」『考古学ジャーナル』278、ニュー・サイエンス社

坂詰秀一2000「考古学と近・現代史」『季刊考古学』72、雄山閣

杉本 宏1995「戦争遺跡と埋蔵文化財」『考古学研究』42-1、考古学研究会

鈴木公雄1988『考古学入門』 東京大学出版会

十亀幸雄2007「伊方町女子岬製錬所跡」『西四国』所報19、西四国考古学研究所

当真嗣一1984「戦跡考古学のすすめ」『南島考古だより』30、沖縄考古学会

中岡修也1988「②三間焼」『三間町三間地区遺跡詳細分布調査報告書』 三間町教育委員会

長井数秋1986「26　土壇原窯跡」『愛媛県史　資料編　考古』 愛媛県

平井 誠2008『愛媛と戦争　伝えたい戦争の記憶・平和な未来へ』 愛媛県歴史文化博物館

藤田儲三1992「御荘焼の歴史」『史談』14

柳 雄太郎1999「近代遺跡の調査について」『月刊文化財』9、No.432、文化庁文化財保護部

柳 雄太郎2002『近代遺跡調査報告書　－鉱山－』 文化庁文化財部記念物課

山本典男2001『松山藩ゆかりの西岡焼』 重信町教育委員会

※参考文献は主要なものに限り、調査報告書は割愛した。

愛媛県関係刊行報告書一覧

第1表　愛媛県関係刊行報告書一覧1

発行年	シリーズ番号	書名	遺跡名	編集/発行
1966(昭和41)	1966	相の谷古墳発掘調査報告書	相の谷古墳	発行/愛媛県教育委員会
1967(昭和42)	1967	相の谷古墳発掘調査報告書　昭和42年３月	相の谷古墳	発行/愛媛県教育委員会
1969(昭和44)	1969	大下田第２号古墳発掘調査報告書	大下田第2号古墳	発行/愛媛県教育委員会
1977(昭和52)	1977	伊豫国真導廃寺跡発掘調査報告書	真導廃寺跡	編集/愛媛県教育委員会文化課・発行/愛媛県教育委員会
1979(昭和54)	1979a	愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ	西野Ⅰ遺跡　西野Ⅱ遺跡　西野Ⅲ遺跡 西野１号古墳　西野２号古墳	編集・発行/愛媛県教育委員会
1979(昭和54)	1979b	東野遺跡埋蔵文化財調査報告書	東野遺跡	編集・発行/愛媛県教育委員会
1979(昭和54)	1979c	溝辺遺跡埋蔵文化財調査報告書	溝辺遺跡	編集/愛媛県教育委員会　松山市教育委員会・発行/愛媛県教育委員会
1979(昭和54)	1979d	道後姫塚遺跡埋蔵文化財調査報告書	道後姫塚遺跡	編集・発行/愛媛県教育委員会
1979(昭和54)	第１集	城ノ向古墳群発掘調査報告書　一般県道大平・砥部線改良工事に伴う調査	城ノ向５号古墳　城ノ向６号古墳 城ノ向７号古墳	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1980(昭和55)	第２集	一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ	拾町Ⅱ遺跡　水満田遺跡　水満田古墳 三角Ⅰ遺跡　三角Ⅱ遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1980(昭和55)	1980	大三島・伯方島本四連絡道路(一般国道317号)埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ)	瀬山見張台　植松南遺跡 本興寺南遺跡　瀬戸奥古墳	編集/愛媛県教育委員会・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1980(昭和55)	第３集	大三島・伯方島本四連絡道路(一般国道317号)埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)	叶浦(B)遺跡　叶浦北遺跡 浜ノ上遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1981(昭和56)	第５集	一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ)	北久米遺跡　前川Ⅰ遺跡　前川Ⅱ遺跡 高畑Ⅰ遺跡　高畑Ⅱ遺跡　来住Ⅰ遺跡 来住Ⅱ遺跡　来住Ⅲ遺跡	編集/愛媛県教育委員会文化課・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1981(昭和56)	第５集	一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)	来住Ⅳ遺跡　来住Ⅴ遺跡　来住Ⅵ遺跡 久米窪田Ⅰ遺跡　久米窪田Ⅱ遺跡 久米窪田Ⅲ遺跡	編集/愛媛県教育委員会文化課・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1981(昭和56)	第６集	一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)	久米窪田Ⅳ遺跡　久米窪田Ⅴ遺跡	編集/愛媛県教育委員会文化課・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1981(昭和56)	第７集	一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)	長田遺跡　長田古墳　城ノ向遺跡 城ノ向古墳　宮内大畑遺跡 宮内大畑古墳	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1982(昭和57)	1982a	愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ	谷田Ⅰ遺跡　谷田Ⅱ遺跡(上野遺跡) 谷田Ⅲ遺跡　谷田Ⅳ遺跡 谷田１号古墳　古鎌山古墳	編集・発行/愛媛県教育委員会
1982(昭和57)	1982b	愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)	釈迦面山遺跡群(釈迦面山１号古墳 釈迦面山２号古墳　釈迦面山３号古墳 釈迦面山南遺跡)　釈迦面山遺跡 谷田Ⅴ遺跡 谷田Ⅵ遺跡(谷田１号・２号窯跡) 大下田古墳群(大下田３号A古墳 大下田３号B古墳　大下田４号古墳 大下田５号古墳　大下田６号古墳 大下田７号古墳　大下田８号古墳)	編集・発行/愛媛県教育委員会
1982(昭和57)	1982c	伊予国府跡確認調査概報(Ⅰ)	伊予国府跡	編集/愛媛県教育委員会文化振興局・発行/愛媛県教育委員会
1982(昭和57)	1982d	愛媛県立松山北高等学校遺跡　埋蔵文化財調査報告書	愛媛県立松山北高等学校遺跡	編集/愛媛県教育委員会文化振興局・発行/愛媛県教育委員会
1982(昭和57)	第９集	一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ)	平井遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1983(昭和58)	第10集	瀬戸内海大橋関連遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　見近島城跡	見近島城跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1983(昭和58)	第11集	瀬戸内海大橋関連遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅳ　大島・宮窪町	菅原１号墳　菅原２号墳　かずらこ遺跡 かずらこ(B)遺跡　不動遺跡 石寺遺跡　イタダミ遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1983(昭和58)	1983a	伊予国府跡確認調査概報(Ⅱ)	伊予国府跡	編集/愛媛県教育委員会文化振興局・発行/愛媛県教育委員会
1983(昭和58)	1983b	梶郷駄場遺跡調査報告書	梶郷駄場遺跡	編集/愛媛県教育委員会文化振興局・発行/愛媛県教育委員会
1983(昭和58)	1983c	北条市上難波南古墳群調査報告書	北条市上難波南古墳群	編集・発行/愛媛県教育委員会
1983(昭和58)	第12集	愛媛県総合運動公園(動物園)整備計画関連埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅰ)　大下田南古墳群	大下田南１号墳　大下田南２号墳 大下田南３号墳　大下田南４号墳 大下田南５号墳　大下田南６号墳 大下田南７号墳　大下田南８号墳 大下田南９号墳　大下田南10号墳 大下田南11号墳　大下田南12号墳 大下田南13号墳　大下田南14号墳 大下田南15号墳	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター

第2表　愛媛県関係刊行報告書一覧2

発行年	シリーズ番号	書名	遺跡名	編集/発行
1984(昭和59)	第13集	愛媛県総合運動公園(動物園)整備計画埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)　大下田古窯群・大下田弥生遺跡	大下田１号窯跡　大下田２号窯跡 大下田弥生遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1984(昭和59)	1984a	四国縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書	西ノ谷遺跡　丸山Ⅰ遺跡　丸山Ⅱ遺跡 与五郎塚古墳　藤谷池東遺跡 経ヶ岡古墳　四ツ手山遺跡 四ツ手山古墳　桜木石棺群	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1984(昭和59)	1984b	仏殿城跡 －埋蔵文化財確認調査報告書－	仏殿城跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1984(昭和59)	1984c	伊予国府跡確認調査概報(Ⅲ)	伊予国府跡	編集/愛媛県教育委員会文化振興局・発行/愛媛県教育委員会
1984(昭和59)	第15集	一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書Ⅰ	片山内福間遺跡　片山木谷遺跡 山路下平Ⅰ遺跡　山路下平Ⅱ遺跡 山路下平Ⅲ遺跡　片山１号墳 片山４号墳　片山７号墳	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1984(昭和59)	第16集	国道317号道路改良事業関連埋蔵文化財調査報告書　赤岸鼻遺跡	赤岸鼻遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1985(昭和60)	1985a	松山市・船ヶ谷遺跡　愛媛県青果農業共同組合連合会関連埋蔵文化財調査報告書	船ヶ谷遺跡	編集/愛媛県教育委員会文化振興局・発行/愛媛県教育委員会
1985(昭和60)	1985b	道後今市遺跡　愛媛県県民文化会館・愛媛県総合福祉センター建設に伴う埋蔵文化財調査報告書	道後今市遺跡Ⅰ区　道後今市遺跡Ⅱ区 道後今市遺跡Ⅲ区　道後今市遺跡Ⅳ区 道後今市遺跡Ⅴ区	編集/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター・発行/愛媛県教育委員会
1986(昭和61)	第17集	朝倉南甲遺跡　県営圃場整備事業(朝倉村南甲平林地区)関連埋蔵文化財調査報告書	朝倉南甲遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1986(昭和61)	第18集	宮前川遺跡　中小河川改修事業埋蔵文化財調査報告書	宮前川別府遺跡 宮前川北斎院遺跡西山地区 宮前川北斎院遺跡津田第Ⅰ地区 宮前川北斎院遺跡津田第Ⅱ地区 宮前川北斎院遺跡岸田地区	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1986(昭和61)	1986	昭和61年度　今治近見古墳群確認調査　成果報告書	今治近見古墳群	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1987(昭和62)	第21集	上三谷古墳群　県営圃場整備事業(伊予東地区上三谷工区)埋蔵文化財調査報告書	上三谷３号墳　上三谷４号墳 上三谷５号墳　上三谷６号墳 上三谷７号墳　上三谷石橋遺跡 上三谷Ａ墓地　上三谷Ｂ墓地	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1987(昭和62)	第22集	四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　高原10・11号古墳　轟城跡　深谷山石棺群　大小谷谷窯跡	高原10・11号古墳　轟城跡 深谷山石棺群　大小谷谷窯跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1987(昭和62)	第23集	朝倉高大寺遺跡　朝倉中力遺跡　朝倉下岡遺跡　県営圃場整備事業関連埋蔵文化財調査報告書	朝倉高大寺遺跡　朝倉中力遺跡 朝倉下岡遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1987(昭和62)	第20集	伊予国分尼寺跡　今治市桜井埋蔵文化財調査報告書	伊予国分尼寺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1987(昭和62)	1987	昭和61年度　西条市バイパス　埋蔵文化財調査概要報告書	牛の角遺跡　池の内遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1987(昭和62)	第25集	八堂山遺跡Ⅱ　四国電力株式会社特別高圧送電用鉄塔移設事業埋蔵文化財調査報告書	八堂山遺跡Ⅱ	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1988(昭和63)	第26集	お筆山古墳・耳金城跡　丹原総合公園埋蔵文化財調査報告書	お筆山１号墳　お筆山２号墳 耳金城跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1988(昭和63)	第27集	水満田古墳群(金毘羅山支群)　砥部町水満田古墳公園整備事業埋蔵文化財調査報告書	水満田古墳群(金毘羅山支群)	編集/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター・発行/砥部町
1988(昭和63)	第28集	高尾田遺跡Ⅱ　砥部町立麻生小学校校庭照明塔建設事業埋蔵文化財調査報告書	高尾田遺跡Ⅱ	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1988(昭和63)	第29集	上三谷古墳群Ⅱ　県営圃場整備事業(伊予東上三谷工区)埋蔵文化財調査報告書	塩塚古墳(上三谷１号墳) 上三谷２号墳　上三谷８号墳	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1988(昭和63)	第30集	四国横断自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　東塚穴窪古墳　柴生遺跡　馬立城跡	東塚穴窪１号墳　東塚穴窪２号墳 柴生遺跡　馬立城跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1989(平成1)	第31集	一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　八町遺跡　中寺州尾遺跡　松木遺跡	八町遺跡　中寺州尾遺跡　松木遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1989(平成1)	第32集	一般国道11号西条市バイパス埋蔵文化財調査報告書　池の内遺跡　牛の角遺跡　天神山遺跡　原八幡神社裏遺跡	池の内遺跡第Ⅰ地区 池の内遺跡第Ⅱ地区 池の内遺跡第Ⅲ地区 牛の角遺跡　天神山遺跡 原八幡神社裏遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1989(平成1)	第33集	一般県道「菅沢－松山線」埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　祝谷大地ヶ田遺跡　祝谷六丁場遺跡　丸山遺跡　長谷遺跡	祝谷大地ヶ田遺跡　祝谷六丁場遺跡 丸山遺跡　長谷遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1989(平成1)	1989	甦る埋蔵文化財　第３集　史跡法安寺跡	法安寺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター

第3表　愛媛県関係刊行報告書一覧3

発行年	シリーズ番号	書名	遺跡名	編集/発行
1990(平成2)	第34集	一般県道「菅沢－松山線」埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　丸山遺跡[丸山下]	丸山遺跡[丸山下]	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1990(平成2)	第35集	小山田Ⅱ遺跡・小山田支群　サンセットヒルズカントリークラブ鹿島建設に伴う発掘調査報告書	小山田Ⅱ遺跡　小山田１号箱式石棺 小山田支群　（小山田１号墳 小山田２号墳　小山田３号墳 小山田４号墳　小山田５号墳 小山田６号墳　小山田７号墳 小山田１号土坑墓）	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1990(平成2)	第36集	八堂山遺跡Ⅲ　西条市市民の森開発事業埋蔵文化財調査報告書	八堂山遺跡Ⅲ	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1990(平成2)	第37集	桑原住宅埋蔵文化財調査報告書　桑原稲葉遺跡	桑原稲葉遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1991(平成3)	第38集	四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書－Ⅲ－	医王寺Ⅰ遺跡　医王寺Ⅱ遺跡 医王寺Ⅲ遺跡　長命寺遺跡 平坂Ⅰ遺跡　平坂Ⅱ遺跡　小富士遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1991(平成3)	第39集	四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ	半田山遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1993(平成5)	第40集	県道「伊予－川内線」関連埋蔵文化財発掘調査報告書　平松遺跡　旗屋遺跡I	平松遺跡　旗屋遺跡Ⅰ	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1993(平成5)	第41集	一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　松環古照遺跡	松環古照遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1993(平成5)	第42集	愛媛県立今治南高等学校日高農場埋蔵文化財発掘調査報告書　黒田遺跡	黒田遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1993(平成5)	第43集	麻生小学校南遺跡埋蔵文化財調査報告書	麻生小学校南遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1994(平成6)	第45集	四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ　－小松町編I－　鶴来が元遺跡	鶴来が元遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1994(平成6)	第46集	四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ　小松町編Ⅱ　大日裏Ⅴ遺跡　大谷池東遺跡　妙口遺跡	大日裏Ⅴ遺跡　大谷池東遺跡 妙口遺跡　妙口裏の谷古墳	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1994(平成6)	第48集	四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ　川内町編　表川東遺跡　竹ノ鼻遺跡　永野五輪塔	表川東遺跡　竹ノ鼻遺跡 永野五輪塔	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1994(平成6)	第49集	北斎院地内遺跡(三次調査)　－宮中改第21号測の１(二)宮前川河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－	北斎院地内遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1994(平成6)	第50集	一般国道196号松山・北条バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　福角古墳・福角遺跡	福角古墳　福角遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1994(平成6)	第51集	一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　大峰ヶ台地区　南江戸桑田遺跡　辻遺跡　大峰ヶ台Ⅱ遺跡	南江戸桑田遺跡１次・２次 辻遺跡３次・４次　大峰ヶ台Ⅱ遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1994(平成6)	第52集	多々羅大橋関連埋蔵文化財発掘調査報告書　多々羅製塩遺跡	多々羅製塩遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1994(平成6)	第44集	四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　－西条市編－　横山城跡　船形遺跡　地蔵原遺跡　尾土居窯跡	横山城跡　船形遺跡　地蔵原遺跡 尾土居窯跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1994(平成6)	第47集	四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ　－丹原町編－　安養寺遺跡　宝ヶ口I遺跡　文台城跡　高月遺跡	安養寺遺跡　宝ヶ口I遺跡　文台城跡 高月遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1994(平成6)	第53集	道後今市遺跡Ⅹ　道後今市北郵政宿舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	道後今市遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1995(平成7)	第54集	四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ　－小松町編Ⅲ－　明穂東岡遺跡　明穂I東岡東遺跡　明穂東岡Ⅱ遺跡　明穂中ノ岡Ⅲ遺跡	明穂東岡遺跡　明穂Ⅰ東岡東遺跡 明穂東岡Ⅱ遺跡　明穂中ノ岡Ⅲ遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1995(平成7)	第55集	愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書２	松山北高等学校遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1995(平成7)	第56集	姫内城跡１　－来島大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　第１集－	姫内城跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1995(平成7)	第58集	持田町３丁目遺跡	持田町３丁目遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1995(平成7)	第57集	相の谷古墳群杉谷支群埋蔵文化財発掘調査報告書	相の谷古墳群　杉谷支群	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター

第4表　愛媛県関係刊行報告書一覧4

発行年	シリーズ番号	書名	遺跡名	編集/発行
1995(平成7)	第59集	四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ　－伊予市編Ⅰ－　長尾遺跡　上野Ⅱ遺跡　名護池Ⅰ遺跡　名護池Ⅱ遺跡　名護Ⅱ遺跡　兎渡護遺跡　本願寺下遺跡　福田寺裏山経塚　八幡南遺跡　稲荷経塚群　城山あまが谷経塚　市場南組窯跡	長尾遺跡　上野Ⅱ遺跡　名護池Ⅰ遺跡 名護池Ⅱ遺跡　名護Ⅱ遺跡 兎渡護遺跡　本願寺下遺跡 福田寺裏山経塚　八幡南遺跡 稲荷経塚群　城山 あまが谷経塚　市場南組窯跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1996(平成8)	第60集	若草町遺跡Ⅱ　松山第２合同庁舎建設工事に伴う埋蔵文化財調査概要報告書	若草町遺跡Ⅱ	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1996(平成8)	第63集	糸大谷遺跡　来島大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　第２集	糸大谷遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1996(平成8)	第61集	一般国道11号重信道路埋蔵文化財発掘調査報告書　竹ノ鼻遺跡　表川東遺跡　保免遺跡	竹ノ鼻遺跡　表川東遺跡　保免遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1996(平成8)	第62集	一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　親和園前地区(伝旧松山藩陣屋跡・朝美澤遺跡・朝美澤廃寺)　美沢地区(美沢遺跡)　衣山地区(衣山遺跡)	伝旧松山藩陣屋跡　朝美澤遺跡 朝美澤廃寺　美沢遺跡　衣山遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1997(平成9)	第64集	石手寺前遺跡　一般国道317号線石手寺前道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	石手寺前遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1997(平成9)	第65集	道後一万遺跡　都市計画道路東一万桑原線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	道後一万遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1998(平成10)	第68集	四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ　－伊予市編Ⅱ－　猿ヶ谷２号墳　上三谷原古墳　大人塚古墳　名護池古墳Ⅱ　原池遺跡　西香花遺跡　銘白遺跡　西香花塚　向山遺跡　兎渡護Ⅱ遺跡	猿ヶ谷２号墳　上三谷原古墳 大人塚古墳　名護池古墳Ⅱ　原池遺跡 西香花遺跡　銘白遺跡　西香花塚 向山遺跡　兎渡護Ⅱ遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1998(平成10)	第70集	火内遺跡・臥間遺跡　来島大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　第３集	火内遺跡　臥間遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1998(平成10)	第71集	四村日本遺跡　県道今治丹原線の建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　第１集	四村日本遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1998(平成10)	第72集	西野春日谷遺跡　通谷池２号墳　えひめこどもの城建設に伴う埋蔵文化財調査報告書	西野春日谷遺跡　通谷池２号墳	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1998(平成10)	第66集	湯築城跡　道後公園埋蔵文化財調査報告書第１分冊	湯築城跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1998(平成10)	第67集	斎院・古照　新松山空港道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書	古照遺跡　岩子山西麓遺跡 宮前川北斎院遺跡中津地区 宮前川北斎院遺跡岸田Ⅱ地区 斎院烏山遺跡(2次調査)　垣生山遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1998(平成10)	第69集	登畑遺跡　一般国道196号今治バイパス埋蔵文化財調査報告書Ⅲ	登畑遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1999(平成11)	第73集	糸山５号土坑墓　糸山ミカン谷遺跡　姫内城跡Ⅱ次	糸山５号土坑墓　糸山ミカン谷遺跡 姫内城跡Ⅱ次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1999(平成11)	第76集	旭方Ⅰ遺跡・旭方１号箱式石棺・柳内遺跡・宮ノ谷遺跡・大川遺跡・正法寺遺跡　来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　第５集	旭方Ⅰ遺跡　旭方１号箱式石棺 柳内遺跡　宮ノ谷遺跡　大川遺跡 正法寺遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1999(平成11)	第77集	上井遺跡　一般県道狭間上松葉線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書	上井遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1999(平成11)	第78集	鹿の子古墳群・新谷森ノ前遺跡　県道今治丹原線の建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第２集	鹿の子古墳群　新谷森ノ前遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1999(平成11)	第79集	馬島亀ヶ浦遺跡・馬島ハゼヶ浦遺跡　来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第４集	馬島亀ヶ浦遺跡　馬島ハゼヶ浦遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1999(平成11)	第74集	中駄場遺跡　平成10年度主要地方道宿毛津島線埋蔵文化財調査報告書	中駄馬遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1999(平成11)	第75集	井門Ⅰ遺跡・井門Ⅱ遺跡　四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XⅢ　－松山市編Ⅰ－	井門Ⅰ遺跡　井門Ⅱ遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
1999(平成11)	第80集	住吉神社跡　－一般県道鳥坂宇和線ふるさとづくり関連道路整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	住吉神社跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2000(平成12)	第81集	史跡「松山城跡」内　県民館跡地　愛媛県美術館の建設に伴う埋蔵文化財調査報告書	史跡「松山城跡」内・県民館跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2000(平成12)	第84集	阿方遺跡・矢田八反坪遺跡　来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　第６集	阿方遺跡　矢田八反坪遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター

第5表　愛媛県関係刊行報告書一覧5

発行年	シリーズ番号	書名	遺跡名	編集/発行
2000(平成12)	第82集	新池遺跡・市場南組窯跡　四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XⅣ　－伊予市編Ⅲ－	新池遺跡　市場南組窯跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2000(平成12)	第83集	湯築城跡　道後公園埋蔵文化財調査報告書第２分冊・第３分冊・第４分冊	湯築城跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2000(平成12)	第85集	南高井遺跡・森松遺跡　四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XⅤ－松山市編Ⅱ－	南高井遺跡　森松遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2000(平成12)	第86集	道ヶ谷古墳　池の奥遺跡　平田七反地遺跡　一般国道196号松山北条バイパス埋蔵文化財調査報告書Ⅱ	道ヶ谷古墳　池の奥遺跡 平田七反地遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2000(平成12)	第87集	旦遺跡　宮之前遺跡　長沢石打遺跡　長沢１号墳　長沢６号墳　二の谷２号墳　鋏又古墳群　郷桜井西塚古墳　－一般国道196号今治バイパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－	旦遺跡　宮之前遺跡　長沢石打遺跡 長沢１号墳　長沢６号墳　二の谷２号墳　旦８号墳　旦９号墳　旦６号墳 旦11号墳　旦12号墳　旦13号墳 旦14号墳　　法華寺裏山古墳 郷桜井西塚古墳	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2000(平成12)	第88集	阿方春岡遺跡　阿方牛ノ江遺跡　矢田八反坪遺跡　矢田大出口遺跡　矢田平山近世墓　矢田平山古墳　矢田平山遺跡　一般国道196号今治北道路埋蔵文化財調査報告書	阿方春岡遺跡　阿方牛ノ江遺跡 矢田八反坪遺跡　矢田大出口遺跡 矢田平山近世墓　矢田平山古墳 矢田平山遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2001(平成13)	第89集	尼ヶ古城跡・かわらがはな窯跡　－四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XⅥ－　伊予市編Ⅳ	尼ヶ古城跡　かわらがはな窯跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2001(平成13)	第90集	松ノ元遺跡　－一般国道196号今治小松道路埋蔵文化財調査報告書　第１集－	松ノ元遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2001(平成13)	第91集	鶴が峠古墳群(Ｌ区)　－主要地方道松山港線道路改築事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	鶴が峠古墳群(Ｌ区)	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2001(平成13)	第92集	犬除遺跡２次調査　主要地方道宿毛津島線緊急輸送路ネットワーク整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書	犬除遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2001(平成13)	第93集	水戸森遺跡　七反山遺跡　今岡城跡　－四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XⅦ－　内子町編	水戸森遺跡　七反山遺跡　今岡城跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2002(平成14)	第94集	大久保遺跡　大久保１号墳　－一般国道11号小松バイパス埋蔵文化財調査報告書第１集－	大久保遺跡　大久保１号墳	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2002(平成14)	第95集	土居山遺跡　－新製紙試験場(仮称)整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	土居山遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2002(平成14)	第96集	祝谷西山遺跡　－主要地方道松山北条線整備に伴う埋蔵文化財調査報告書－	祝谷西山遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2002(平成14)	第97集	道後町遺跡　－都市計画道路東一万道後線(道後工区)整備に伴う埋蔵文化財調査報告書－	道後町遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2002(平成14)	第100集	湯築城跡　道後公園埋蔵文化財調査報告書第５分冊	湯築城跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2002(平成14)	第98集	東峰遺跡第２・４地点　高見Ⅰ遺跡　－四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XⅧ－　双海町編	東峰遺跡第２・４地点　高見Ⅰ遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2002(平成14)	第99集	中城跡　底なし田Ⅱ遺跡　元城跡　－四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XⅨ－　大洲市編	中城跡　底なし田Ⅱ遺跡　元城跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2002(平成14)	第101集	土居窪遺跡２次　祝谷畑中遺跡　祝谷本村遺跡２次　－都市計画道路道後祝谷線整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	土居窪遺跡２次　祝谷畑中遺跡 祝谷本村遺跡２次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2002(平成14)	第102集	幸の木遺跡　－一般国道196号今治小松道路埋蔵文化財調査報告書－　第２集－	幸の木遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2003(平成15)	第104集	永地遺跡　－一般国道317号大島道路埋蔵文化財調査報告書－	永地遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2003(平成15)	第105集	道後今市遺跡13次　－四国財務局樋又住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－	道後今市遺跡13次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2003(平成15)	第106集	中尾山遺跡１次・２次　－一般県道粟井浅海線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	中尾山遺跡１次・２次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2003(平成15)	第107集	久米窪田Ⅳ遺跡２次　－主要地方道松山東部環状線交通安全施設等整備工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－	久米窪田Ⅳ遺跡２次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2003(平成15)	第108集	山越遺跡４次　－四国財務局山越住宅２号棟建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－	山越遺跡４次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター

第6表　愛媛県関係刊行報告書一覧6

発行年	シリーズ番号	書名	遺跡名	編集/発行
2003(平成15)	第103集	常定寺遺跡　音地遺跡　伊崎越遺跡　－四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－　宇和町編	常定寺遺跡　音地遺跡　伊崎越遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2004(平成16)	第109集	星原市東遺跡　星原市遺跡　－一般国道11号新居浜バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　第１集－	星原市東遺跡　星原市遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2004(平成16)	第110集	伊予神社Ⅱ遺跡　－一般県道八倉松前線道路改築事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	伊予神社Ⅱ遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2004(平成16)	第111集	道後鷺谷遺跡２次　－一般県道六軒家石手線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－	道後鷺谷遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2004(平成16)	第112集	矢田八反坪遺跡３次　－浅川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	矢田八反坪遺跡３次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2004(平成16)	第114集	善応寺畦地遺跡　大相院遺跡　別府遺跡　－一般県道湯山高縄北条線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－	善応寺畦地遺跡　大相院遺跡 別府遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2004(平成16)	第113集	南斎院土居北遺跡　南江戸闥目遺跡（２次調査）　－宮前川広域基幹河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	南斎院土居北遺跡 南江戸闥目遺跡（２次調査）	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2004(平成16)	第116集	久枝Ⅱ遺跡２次　本郷Ⅰ遺跡２次　－主要地方道壬生川丹原線道路整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	久枝Ⅱ遺跡２次　本郷Ⅰ遺跡2次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2004(平成16)	第115集	務田遺跡　道改第100号測の１(主)宇和三間線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	務田遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2004(平成16)	第117集	大開遺跡２次　－二級河川都谷川河川改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	大開遺跡２次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2005(平成17)	第118集	長網Ⅰ遺跡　長網Ⅱ遺跡　実報寺高志田遺跡　福成寺遺跡　旦之上遺跡　－東予玉川線地域活性化道路緊急整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	長網Ⅰ遺跡　長網Ⅱ遺跡 実報寺高志田遺跡　福成寺遺跡 旦之上遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2005(平成17)	第119集	願連寺泉遺跡２次　願連寺元泉遺跡　願連寺建ヶ内遺跡　－主要地方道壬生川丹原線道路整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	願連寺泉遺跡２次　願連寺元泉遺跡 願連寺建ヶ内遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2005(平成17)	第120集	大畑遺跡　－県道松山北条線整備に伴う埋蔵文化財調査報告書－	大畑遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2005(平成17)	第121集	道後町遺跡Ⅱ　－都市計画道路東一万道後線(道後工区)整備に伴う埋蔵文化財調査報告書－	道後町遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2005(平成17)	第122集	久枝遺跡　久枝Ⅱ遺跡　本郷Ⅰ遺跡　－一般国道196号今治小松道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　第３集－	久枝遺跡　久枝Ⅱ遺跡　本郷Ⅰ遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2005(平成17)	第123集	神宮太郎丸遺跡　－一般県道今治丹原線道路改築事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－	神宮太郎丸遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2005(平成17)	第124集	正徳ヶ森城跡　－県道広見三間宇和島線整備に伴う埋蔵文化財調査報告書－	正徳ヶ森城跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2006(平成18)	第125集	千足遺跡　－一般国道33号砥部道路整備に伴う埋蔵文化財調査報告書－	千足遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2006(平成18)	第126集	下川遺跡　－四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－　西予市編(宇和町編Ⅱ)	下川遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2006(平成18)	第127集	松原遺跡　－一般国道11号新居浜バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　第２集－	松原遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2006(平成18)	第128集	角ヶ谷城跡　－県道宇和三間線整備に伴う埋蔵文化財調査報告書－	角ヶ谷城跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2006(平成18)	第129集	高橋仏師Ⅱ遺跡　－今治新都市開発に伴う埋蔵文化財調査報告書　第１集－	高橋仏師Ⅱ遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2006(平成18)	第130集	高地スゴ谷Ⅰ遺跡　高地栗谷４号墳　阿方牛ノ江Ⅰ遺跡　阿方牛ノ江Ⅱ遺跡　阿方牛ノ江Ⅲ遺跡　阿方牛ノ江Ⅳ遺跡　－今治新都市開発に伴う埋蔵文化財調査報告書　第２集－	高地スゴ谷Ⅰ遺跡　高地栗谷４号墳 阿方牛ノ江Ⅰ遺跡　阿方牛ノ江Ⅱ遺跡 阿方牛ノ江Ⅲ遺跡 阿方牛ノ江Ⅳ遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2006(平成18)	第131集	馬越和多地遺跡２次　－浅川水系日吉川の河川改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－	馬越和多地遺跡２次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2006(平成18)	第133集	蓼原遺跡１・２次　－主要地方道松山伊予線改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	蓼原遺跡１次　蓼原遺跡２次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター

第7表　愛媛県関係刊行報告書一覧7

発行年	シリーズ番号	書名	遺跡名	編集/発行
2006(平成18)	第134集	熱田城跡　柿の木西法寺遺跡　長松寺城跡－一般国道56号宇和島道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－	熱田城跡　柿の木西法寺遺跡 長松寺城跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2006(平成18)	第136集	郷桜井堀遺跡　－一般県道桜井山路線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書１－	郷桜井堀遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2006(平成18)	第132集	高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡２次　－一般県道今治丹原線道路改築事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－	高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡２次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2006(平成18)	第135集	角ヶ谷城跡２次　－四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－	角ヶ谷城跡２次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2007(平成19)	第137集	郷桜井堀遺跡２次　－一般県道桜井山路線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書２－	郷桜井堀遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2007(平成19)	第138集	阿方頭王Ⅶ遺跡　阿方頭王Ⅷ遺跡　阿方頭王Ⅸ遺跡　阿方頭王Ⅹ遺跡　阿方頭王Ⅺ遺跡　阿方頭王Ⅻ遺跡　－今治新都市開発に伴う埋蔵文化財調査報告書第３集－	阿方頭王Ⅶ遺跡　阿方頭王Ⅷ遺跡 阿方頭王Ⅸ遺跡　阿方頭王Ⅹ遺跡 阿方頭王Ⅺ遺跡　阿方頭王Ⅻ遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2007(平成19)	第139集	別名端谷Ⅰ遺跡　別名端谷Ⅱ遺跡　別名成ルノ谷遺跡　別名寺谷Ⅰ遺跡　別名寺谷Ⅱ遺跡　－今治新都市開発に伴う埋蔵文化財調査報告書第4集－	別名端谷Ⅰ遺跡　別名端谷Ⅱ遺跡 別名成ルノ谷遺跡　別名寺谷Ⅰ遺跡 別名寺谷Ⅱ遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2007(平成19)	第141集	矢田大出口遺跡２次　－浅川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－	矢田大出口遺跡２次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2007(平成19)	第142集	矢田大坪遺跡　－一般県道今治丹原線道路改築事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－	矢田大坪遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2007(平成19)	第140集	世田山4号墳　成福寺Ⅷ遺跡　成福寺３・４号墳　松木池遺跡　長網Ⅰ遺跡２次　－県道孫兵衛作壬生川線道路整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	世田山４号墳　成福寺Ⅷ遺跡 成福寺３・４号墳　松木池遺跡 長網Ⅰ遺跡２次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2008(平成20)	第143集	番町遺跡２次　－松山地簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査委託業務に伴う埋蔵文化財調査報告書－	番町遺跡２次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2008(平成20)	第144集	大久保遺跡(大久保・竹成地区・Ｅ地区)大開遺跡　松ノ丁遺跡(１次・２次)　－一般国道11号小松バイパス埋蔵文化財調査報告書　第２集－	大久保遺跡(大久保・竹成地区) 大久保遺跡(Ｅ地区)　大開遺跡 松ノ丁遺跡１次　松ノ丁遺跡２次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2008(平成20)	第145集	永納山東Ⅰ遺跡　永納山東Ⅱ遺跡　－一般国道196号今治小松道路埋蔵文化財調査報告書　第４集－	永納山東Ⅰ遺跡　永納山東Ⅱ遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2008(平成20)	第146集	別名一本松古墳　矢田長尾１号墳　矢田長尾Ⅰ遺跡　高橋佐夜ノ谷遺跡　高橋向谷２号墳　高橋仏師１～４号墳　－今治新都市開発に伴う埋蔵文化財調査報告書　第５集－	別名一本松古墳　矢田長尾１号墳 矢田長尾Ⅰ遺跡　高橋佐夜ノ谷遺跡 高橋向谷２号墳　高橋仏師１号墳 高橋仏師２号墳　高橋仏師３号墳 高橋仏師４号墳	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2008(平成20)	第147集	猿川西ノ森遺跡　－主要地方道北条玉川線整備に伴う埋蔵文化財調査報告書－	猿川西ノ森遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2008(平成20)	第148集	郷桜井掘遺跡３次　－一般県道桜井山路線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書３－	郷桜井掘遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2008(平成20)	第150集	石手村前遺跡　－一般県道六軒家石手線みち再生事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	石手村前遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2009(平成21)	第149集	一本松遺跡　－一般県道今治丹原線改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅵ－	一本松遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2009(平成21)	第151集	池の内遺跡２次調査　－大型商業施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	池の内遺跡２次調査	編集/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター　西条市教育委員会
2009(平成21)	第152集	上郷遺跡　－県道新居浜東港線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－	上郷遺跡	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2009(平成21)	第153集	杣田池田遺跡２次・３次　－主要県道今治波方港線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－	杣田池田遺跡２次・３次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
2009(平成21)	第154集	国分寺壱町地遺跡・国分向遺跡１次・２次	国分寺壱町地遺跡 国分向遺跡１次・２次	編集・発行/財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター

編集後記

研究紀要『紀要愛媛』第９号が完成いたしました。

今回は「特集　－愛媛の考古学史と今後の課題－」と題して、特集を組みました。

本書では時代ごとに、主に当センターで行った調査を取り上げ、その成果を振り返っています。

当センターが創設されて以来、発掘調査を実施した遺跡数は約470ヵ所を数え、刊行した報告書も170冊以上になります。

しかしながら、当センターの調査成果のみで各時代の研究史を述べるには、材料不足の感も否めないところから、時代によっては周辺研究も取り上げて、愛媛の時代研究を整理してみました。

もちろん、本誌の叙述のみですべてを網羅できたわけではなく、また、やむを得ず割愛した研究成果もありましたが、今後も研究を深化させ、次の調査研究に向けた有意義な議論が展開されることを願っております。

（主任調査員　多田　仁）

㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター研究紀要

紀要愛媛

第 9 号

平成22(2010)年 7 月31日

編集・発行　財団法人　愛媛県埋蔵文化財調査センター
〒790-8570　愛媛県松山市衣山四丁目68番地1
TEL (089)911-0502　FAX (089)911-0508

印　　刷　アマノ印刷有限会社